

宇治遺跡群 I

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第11集)

1988

宇治市教育委員会

宇治遺跡群 I

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第11集)

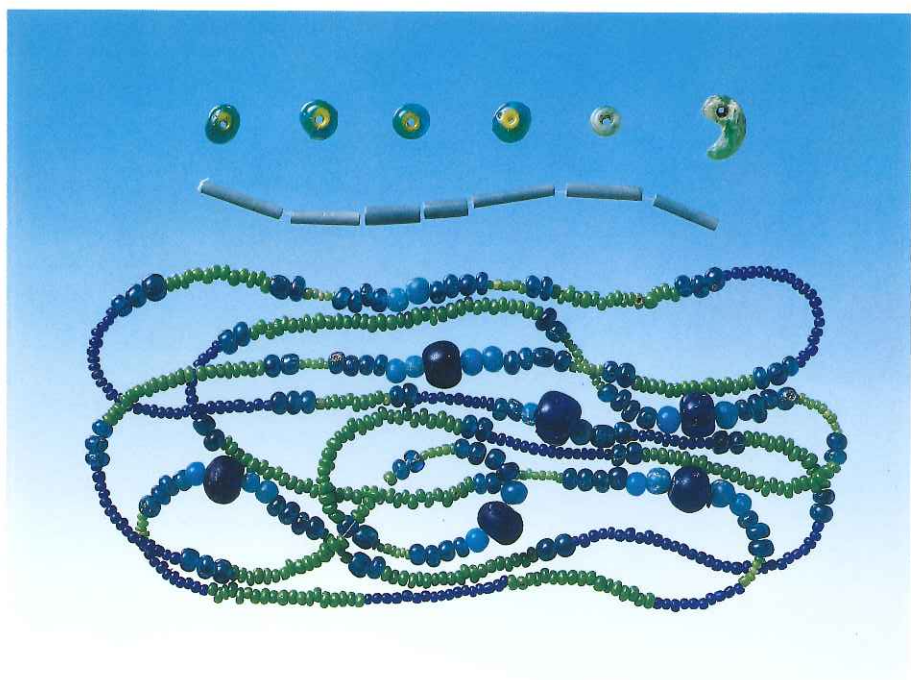
- I. 瓦塚古墳発掘調査概要
- II. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要

1988

宇治市教育委員会



(1) 瓦塚古墳出土玉杖形金銅製品



(2) 瓦塚古墳出土玉類



(1) 瓦塚古墳第1主体部



(2) 瓦塚古墳第2主体部

序

宇治市教育委員会では、本年度より文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受け、市内に存在する重要な遺跡や緊急に保護しなければならない遺跡に対して計画的に発掘調査を行っていくこととなりました。

初年度の昭和62年度では、市内最大規模である二子塚古墳(前方後円墳)と瓦塚古墳(円墳)の2遺跡の発掘調査を実施致しました。

二子塚古墳は、古墳の範囲や規模を明らかにし、その保護に係る基礎資料作成を目的とした調査でありました。調査の結果、石室の基礎や堀の一部を発見致しました。また、瓦塚古墳は自然崩壊に伴う緊急調査であり、府下では初めての礫槨や多量の玉類、金銅製品などの貴重な資料を収集することが出来ました。

本書は、この2件の発掘調査成果を一冊にまとめたものであります。本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史を知る機会となり文化財保護に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々を始め、調査にあたりご指導を賜った関係機関ならびに各位、そして調査に直接従事していただいた方々に対し心よりお礼申し上げます。

昭和63年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

例 言

- 1、本書は、昭和62年度宇治遺跡群発掘調査事業として発掘調査を実施した遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2、本書が収録する遺跡は下記の2遺跡である。

名 称	種 類	時 代	所 在 地	調 査 期 間
瓦塚古墳	円 墳	古墳時代中期	宇治市五ヶ庄瓦塚	62年8月～10月
五ヶ庄二子塚古墳	前方後円墳	古墳時代後期	宇治市五ヶ庄大林	62年12月～63年3月

- 3、本発掘調査事業の経費は5,000,000円であり、文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金としてその1/2を、京都府から文化財緊急整備費補助金としてその1/4を得て事業を実施した。
- 4、本発掘調査事業の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩 本 昭 造
調査担当者	宇治市教育委員会	社会教育課 主事	杉 本 宏
	同	嘱 託	猿 向 敏 一
調査事務局	宇治市教育委員会	参 事	頼 成 綾 子
	同	社会教育課 課長	小 山 豊 嗣
	同	社会教育課文化係長	吉 水 利 明
	同	社会教育課 主任	小 西 弘 子
	同	社会教育課 主事	梅 田 正 人

- 5、本発掘調査事業の実施について、下記の方々より専門的な指導を得た。

中谷雅治(京都府埋蔵文化財調査研究センター次長)、金村允人(京都府教育庁文化財保護課記念物係長)、高橋美久二(京都府立山城郷土資料館館長補佐)、白石太一郎(国立歴史民俗博物館教授)、橋本清一(京都府立山城郷土資料館)、〔順不同、敬称略〕。

- 6、本発掘調査事業の参加者は下記のとおりである。

調査補助員……………上 元庸・内田貴則・杉本和繁・竹村 充・元川康司・
八瀬正雄・山之内志郎

調査整理員……………岡本真由美・志村みどり・山岡万里子

調査作業員……………小川七郎・小山光男・沢井 勇・高山一夫・稲木富三郎

- 7、調査を実施するについては、下記の方々のご協力を得た。

中村健二、藤原了孝、河村信雄、太田勇、関健治、岸村栄、〔順不同、敬称略〕。

8、調査期間中及び整理作業時において下記の方々のご教示・ご協力を得た。

京都府教育委員会、京都府立山城郷土資料館、東京国立博物館、兵庫県立歴史博物館、京都大学文学部博物館、宇治市歴史資料館、地元町内会、岡屋水利組合、宇治市立南部小学校、宇治市立岡屋小学校

小林行雄(京都大学名誉教授)、亀井正道・早乙女雅博(東京国立博物館)、水口富夫(兵庫県立歴史博物館)、都出比呂志(大阪大学助教授)、和田晴吾(立命館大学助教授)、堤圭三郎・平良泰久・奥村清一郎(京都府教育委員会)、菱田哲郎(京都大学文学部博物館)、荒川史(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、古谷毅(国学院大学大学院)、田中新史(市原市文化財センター)、笠井敏光(羽曳野市教育委員会)、中司照世(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、飯田武雄、竹中宏、〔順不同、敬称略〕。

9、赤色顔料の分析については、上田健夫氏が行なった。

10、本書の遺構・遺物写真は主に杉本宏と猿向敏一が撮影し、原色図版1については寿福滋氏が撮影したものである。また、作図は参加者全員で行なった。

11、本書の執筆分担は下記のとおりである。

(瓦塚古墳) 杉本 宏……1・3・4・5-3・6各章。

猿向敏一……2・5-1・5-2各章。

八瀬正雄……5-4・5-5各章、付表1・2。

(五ヶ庄二子塚古墳) 杉本 宏……1・2・3・6各章。

猿向敏一……4・5各章。

12、本書の編集は宇治市教育委員会社会教育課が行ない、実務を杉本宏が主担当し猿向敏一が副担当した。

本文目次

I. 瓦塚古墳発掘調査概要

1. はじめに	1
2. 位置と環境	3
3. 調査の経過	7
4. 遺構	10
(1) 主体部	10
(2) 墳丘	18
5. 遺物	23
(1) 第1主体部	23
(2) 第2主体部	26
(3) 盗掘坑	33
(4) 埴輪	36
(5) その他の遺物	46
6. まとめ	47
付表1. 円筒埴輪観察表	57
付表2. 朝顔形埴輪観察表	58

II. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要

1. はじめに	59
2. 位置と環境	61
3. 調査の経過	66
4. 遺構	67
5. 遺物	71
6. まとめ	75

挿 図 目 次

I. 瓦塚古墳発掘調査概要

第1図	瓦塚古墳位置図	1
第2図	瓦塚古墳と周辺の地形	3
第3図	古代の景観と周辺主要遺跡	4
第4図	一里塚古墳出土の須恵器	6
第5図	瓦塚古墳トレンチ配置図	8
第6図	第1主体部の盗掘部分	10
第7図	第1主体部実測図	11
第8図	第1主体部礫層実測図	12
第9図	主体部横断面図	14
第10図	第2主体部実測図	15
第11図	第2主体部木棺実測図	16
第12図	墳丘北半部全図	18-19
第13図	Cトレンチ実測図	19
第14図	Eトレンチ実測図	20
第15図	F・Gトレンチ実測図	21
第16図	段築部分復元図	22
第17図	第1主体部出土遺物実測図	24
第18図	鍬の部分名称	26
第19図	第2主体部出土鉄鍬実測図 1	27
第20図	第2主体部出土鉄鍬実測図 2	28
第21図	第2主体部出土鉄鍬実測図 3	29
第22図	第2主体部出土刀子実測図	30
第23図	第2主体部出土棺金具実測図	31
第24図	小玉製作の2種	33
第25図	玉類実測図	34
第26図	玉杖形金銅製品実測図	35
第27図	円筒埴輪部分名称と調整	36
第28図	埴輪実測図 1	39

第29図	埴輪実測図 2	40
第30図	埴輪実測図 3	41
第31図	埴輪実測図 4	42
第32図	朝顔形埴輪部分名称	43
第33図	形象埴輪実測図	44
第34図	土器実測図	46
第35図	瓦塚古墳復元図	48
第36図	宇治二子山南墳出土の鉄鏃	49
第37図	埼玉稻荷山古墳の礫柳	50
第38図	玉杖形金銅製品の類例	51
第39図	宇治二子山古墳測量図	53

II. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要

第1図	調査地周辺の主要遺跡	60
第2図	五ヶ庄二子塚古墳と周辺の地形	61
第3図	五ヶ庄二子塚古墳周辺の地籍図	62
第4図	大正年間出土の埴輪	63
第5図	五ヶ庄二子塚古墳昭和46年測量図	64
第6図	外濠出土の須恵器	65
第7図	五ヶ庄二子塚古墳測量図	68—69
第8図	第1・第2トレンチ実測図	68—69
第9図	第2トレンチ葺石実測図	69
第10図	第3トレンチ実測図	70
第11図	埴輪実測図 1	72
第12図	埴輪実測図 2	73
第13図	環状金銅製品実測図	74
第14図	市尾墓山古墳の石室基礎石	75
第15図	墳丘縦断面図	76

図 版 目 次

- 原色図版 1 (1) 瓦塚古墳出土玉杖形金銅製品
(2) 瓦塚古墳出土玉類
- 原色図版 2 (1) 瓦塚古墳第 1 主体部
(2) 瓦塚古墳第 2 主体部

瓦 塚 古 墳

- 図版第 1 瓦塚古墳付近航空写真(下が北、昭和57年)
- 図版第 2 (1) 瓦塚古墳遠景(東から)
(2) 瓦塚古墳近景(西から)
- 図版第 3 (1) Oトレンチ中央盗掘壙完掘状況(南から)
(2) 第 2 主体部完掘状況(北から)
- 図版第 4 (1) 第 2 主体部遺物出土状況(北から)
(2) 第 2 主体部鉄鏝出土状況(北から)
- 図版第 5 (1) 第 1 主体部検出状況(北から)
(2) 第 1 主体部完掘状況(北から)
- 図版第 6 (1) 第 1 主体部南半検出状況(北から)
(2) 第 1 主体部南半完掘状況(北から)
- 図版第 7 (1) 第 1 主体部排水溝断面(北から)
(2) 墳頂部盛土状況と第 1 主体部西側掘方(北から)
- 図版第 8 (1) Bトレンチ完掘状況(西から)
(2) Aトレンチ西端完掘状況(西から)
- 図版第 9 (1) Cトレンチ完掘状況(南から)
(2) Cトレンチ埴輪列検出状況(南から)
- 図版第 10 (1) Cトレンチ東壁土層
(2) Cトレンチ葺石検出状況(北から)
- 図版第 11 (1) Dトレンチ完掘状況(北から)
(2) Dトレンチ葺石検出状況(南から)
- 図版第 12 (1) Eトレンチ完掘状況(南から)
(2) Eトレンチと墳丘斜面(東から)

- 図版第13 (1) Eトレンチ西壁土層
(2) Eトレンチ葺石検出状況(南から)
- 図版第14 (1) Fトレンチ埴輪列検出状況(南から)
(2) Gトレンチ埴輪列検出状況(南から)
- 図版第15 第1主体部出土馬具
- 図版第16 第2主体部・盗掘壕出土遺物
- 図版第17 (1) 第2主体部鉄鏃
(2) 第2主体部鉄鏃
- 図版第18 (1) 第2主体部鉄鏃
(2) 第2主体部鉄鏃
- 図版第19 円筒埴輪
- 図版第20 円筒埴輪・朝顔形埴輪
- 図版第21 (1) 円筒埴輪口縁部
(2) 円筒埴輪スカシ孔
- 図版第22 (1) 形象埴輪・刻線埴輪片
(2) 朝顔形埴輪

五ヶ庄二子塚古墳

- 図版第1 二子塚古墳航空写真
- 図版第2 (1) 宇治川と宇治東部
(2) 二子塚古墳遠景
- 図版第3 (1) 二子塚古墳全景(中央の森 南西から)
(2) 二子塚古墳西側内堤(南から)
- 図版第4 (1) 二子塚古墳東側の現状(左手の森が二子塚古墳 南東から)
(2) 二子塚古墳の石室に使われていた巨石(西方寺本堂裏)
- 図版第5 (1) 伝二子塚古墳出土鏡(四乳四獣形鏡)
(2) 大正年間出土の埴輪(京都大学蔵)
- 図版第6 第1トレンチ全景(南から)
- 図版第7 第1トレンチ基礎礫群(北から)
- 図版第8 (1) 第1トレンチ基礎礫群検出状況と後円部残丘(北から)
(2) 第1トレンチ基礎礫群掘方北端部(西から)
- 図版第9 (1) 第1トレンチ北端(後円部北斜面の一部 南から)

- (2) 第1トレンチ墳丘盛土の状況(西から)
- 図版第10 第2トレンチ全景と後円部残丘(北東から)
- 図版第11 第2トレンチ葺石と周濠の埋没状況(南西から)
- 図版第12 (1) 第2トレンチ後円部東斜面検出状況(北東から)
(2) 第2トレンチ葺石残存状況(北東から)
- 図版第13 (1) 第2トレンチ・第3トレンチ(南西から)
(2) 第3トレンチ全景(南西から)
- 図版第14 (1) 埴輪1
(2) 埴輪2
- 図版第15 (1) 埴輪3
(2) 須恵器

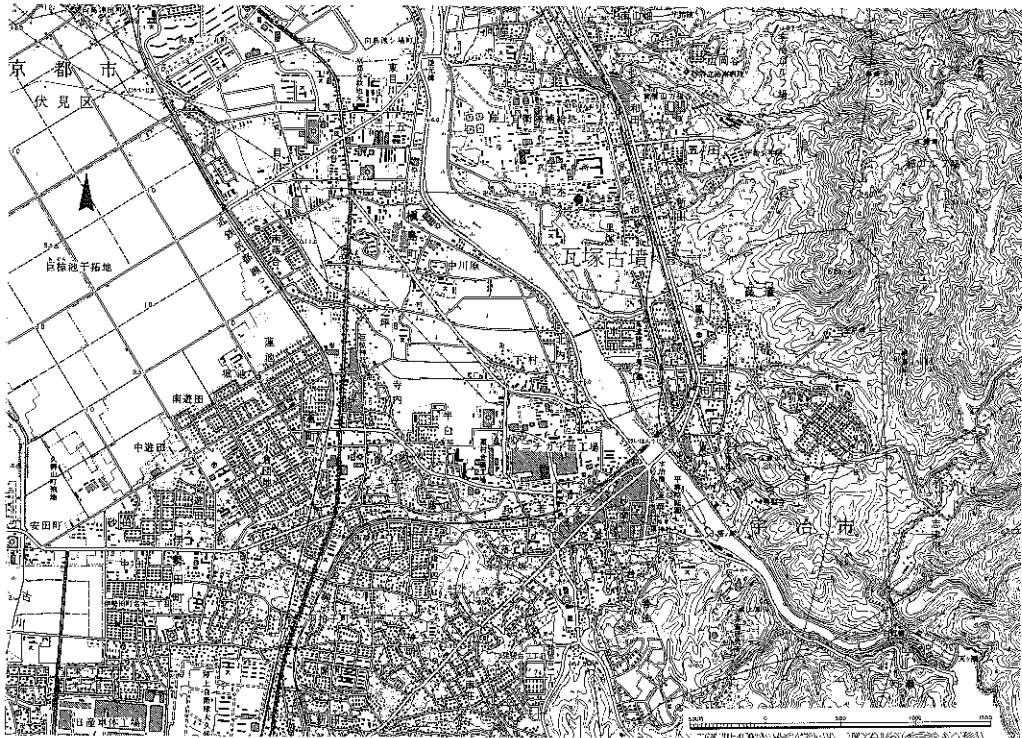
I. 瓦塚古墳発掘調査概要

1. はじめに

ここに報告する^{かわらぶか}瓦塚古墳は、宇治市五ヶ庄瓦塚32番地に所在する円墳であり、宇治市教育委員会が昭和62年度において「宇治遺跡群発掘調査事業」として発掘調査を実施した遺跡である。

瓦塚古墳は、五ヶ庄の岡本集落と京都大学研究施設とはさまれた水田中に往時の姿を残している。地元では、この古墳を「まるやま」と通称しているという。古墳の現況は畑として利用されている。瓦塚古墳という遺跡名称は、古墳の所在する字名「瓦塚」によるものであり、現在、一般的にこの名称を用いている。

この古墳の最初の調査は、宇治市史編纂に伴う墳丘の測量調査であり、昭和46年3月に実施された。その成果は、昭和48年刊行の『宇治市史 第1巻』の229・230頁に収録されており、^{註1}直径30m、高さ2.5mの円墳であること、墳丘のまわりに残る水田の畦が古墳の濠跡に関する可能性があること、墳丘表面に埴輪・須恵器が散布していること、が指摘されている。



第1図 瓦塚古墳位置図(1:50,000)

I. 瓦塚古墳発掘調査概要

この測量調査後は、昭和57年に航空写真の撮影を行なったのみで、他の調査はない。

今回の調査は、墳丘が畑として利用されている関係上、雨水や耕作等に伴い埴輪等の遺物が表面に露出し始め、かつ墳丘頂の低下により主体部が露出する危険性が生じたため緊急に発掘調査を実施し、その保護をはかるためのものである。

調査を実施するにあたっては、次の3点を調査目標とした。第1点、主体部の遺存状況と内容を確認する。第2点、墳丘本体の遺存状況と内容を確認する。第3点、外表施設の遺存状況と内容を確認する。調査面積は、これらの目標達成に必要な最少限度の広さとし、単年度調査とした。墳丘の全容解明のためには、周囲の水田においても調査を実施するのが本来ではあるが、当面、現在の墳丘部分以外はその保護に係る緊急性を認めないため、調査範囲は墳丘部分に限った。

調査後については、実測及び写真撮影を行ない、主要部分に砂を入れ埋め戻しを行なった。実測に使用した絶対高は、東宇治中学校内に在る国土地理院の水準点を基本とした。

調査の成果については、後述するとおり、主体部及び外表施設の一部が良好な状況で遺存していることが確認できたのを始め、その形式や出土遺物についても予想以上に重要な知見が得られ、瓦塚古墳が本市における重要な遺跡の一つであることを再認識した。

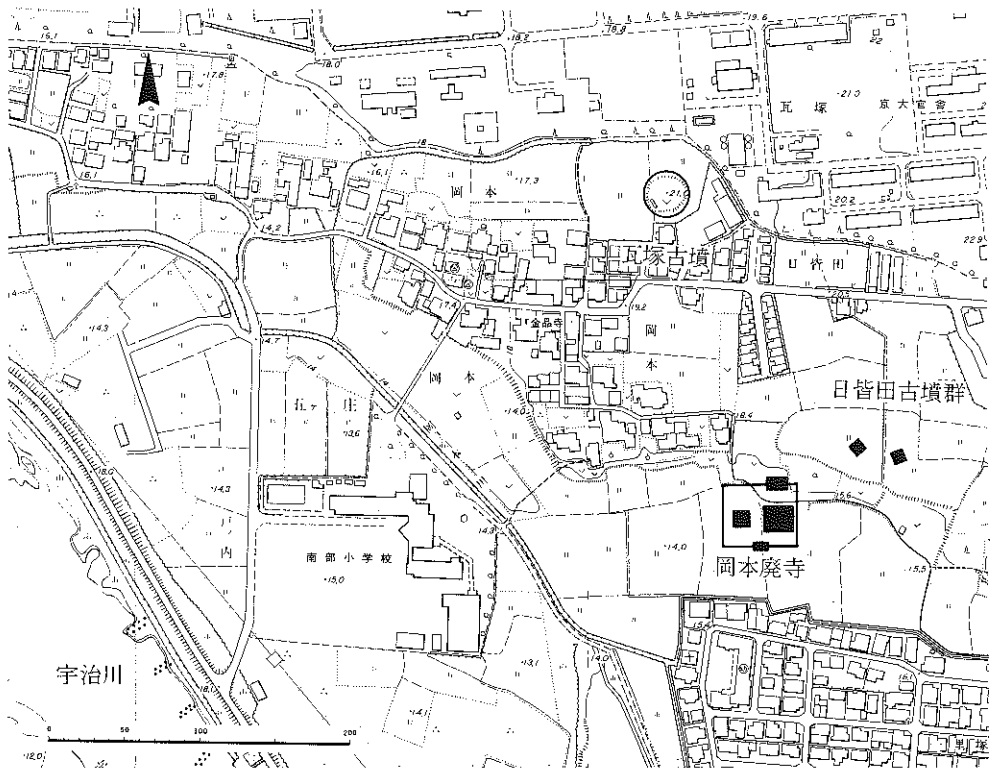
本報告は、この調査の基本的な資料を提示するものである。また、出土遺物及び調査に伴う全資料については宇治市教育委員会が保管をしている。

調査を実施するについては、土地所有者である中村健二氏の全面的なご協力をいただくとともに、地元町内会にはいろいろお世話をいただいた。感謝を申し上げます。調査中では、猛暑の中を発掘調査に取り組んでいただいた学生諸君を始め、考古学実習として調査に参加した帝塚山大学^{註2}学生諸君、また、種々のご指導をいただいた関係機関・各位に対して心から感謝の意を表したい。

2. 位置と環境

(地理的環境)

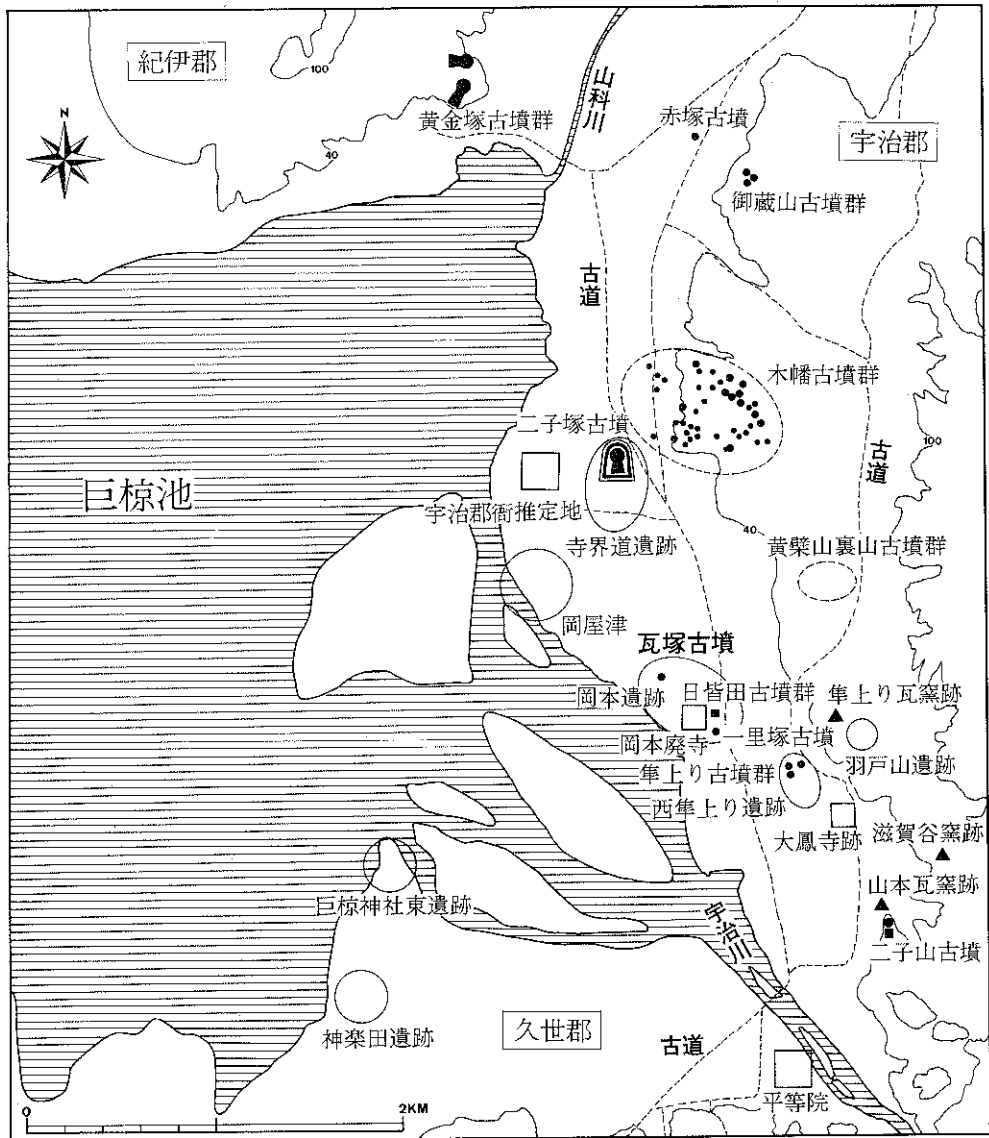
「洸洸横流 其疾如箭」と宇治橋断碑にその急流の様を刻まれた宇治川は、琵琶湖から流れ出る唯一の河川であり、滋賀県側では瀬田川と呼ばれている。瀬田川(宇治川)は、琵琶湖を発すると直ちに山間部を南流し、宇治市において初めて平野に至る。ここで、流れは北へ一転し市域を南北に貫流する。北流する宇治川の西岸を宇治市西部、東岸を宇治市東部とに分けると、今回報告する瓦塚古墳は宇治市東部に含まれる。このように市域を分断する宇治川の流路は豊臣秀吉の伏見城築城時の太閤堤によって決定されたもので、かつては山間部から出ると直接巨椋池に注いでいた。巨椋池は山城盆地中央部に位置した巨大な淡水湖で、宇治川・木津川・桂川の三河川が合流する一大遊水地帯を形成していた。周囲16km という沼沢^{註3}も、現在は昭和16年の干拓終了により豊饒な水田地帯となり宇治市西部のその大部分を占める。それに対して、宇治市東部は、醍醐・笠取山地から派生した低丘陵と宇治川との間に形成された洪積段丘と、これを被覆する扇状地が、主要な地形となる。



第2図 瓦塚古墳と周辺の地形

I. 瓦塚古墳発掘調査概要

瓦塚古墳の所存する大字五ヶ庄小字瓦塚付近は、標高約20m 前後で、東より西への緩やかに傾く台地である。瓦塚古墳より南200m 付近では、宇治川によって形成された高さ4 m 程の河岸段丘が南北にはしっている。瓦塚古墳は、西方に広大な湖沼、巨椋池がひろがり東方には低丘陵がつづくという宇治市東部の古代地形の中にあつて、巨椋池に近い台地端部付近に立地していることとなる。この辺りの土地利用状況は、段丘南端に位置する岡本集落や京都大学研究施設を除けば、基本的には水田である。しかし、近年の宅地開発のため水田の宅地化が進み、現況を大きく変貌させつつある。



第3図 古代の景観と周辺主要遺跡

(歴史的環境)

ここでは、宇治市東部、つまり宇治川東岸地域に絞ってその歴史的環境を概観したい。

現在、宇治川東部の最古の遺跡は縄文時代にさかのぼることができ、早期の押型文土器と尖頭器が、西牟上り遺跡^{註4}から出土している。また、本市が調査を行った寺界道遺跡^{註5}からは、古墳時代後期から奈良時代にわたる遺構と共に、貯蔵穴を検出した。縄文晩期の刻目突帯文土器と石鏃などが発見されている。弥生時代の遺跡では、その内容が窺えるものとしては羽戸山遺跡^{註6}があげられる。標高60m前後の丘陵上に営まれた後期の集落であり、その立地条件などから高地性集落と考えられる。宇治における縄文・弥生時代の遺跡は現状では乏しい。水稻農耕を基盤とした弥生時代については、宇治市東部よりも宇治市西部の旧巨椋池周辺の低湿地とよく発達した自然堤防などの微高地が、彼等にとって最適の居住地であったであろう。しかし、巨椋神社東遺跡・神楽田遺跡など一部調査されたのみで、具体的解明には遠い。

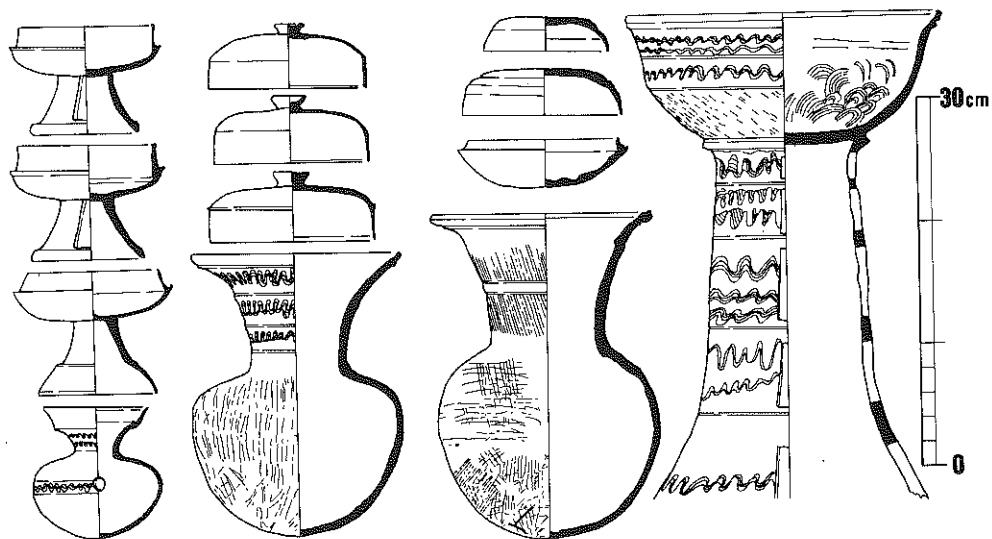
宇治川東岸地域には、大・小規模の古墳群が点在している。隣接市の城陽市にある久津川古墳群^{註7}に対して、これらを宇治古墳群^{註8}と呼称したい。以下、簡単にその概要を説明する。前期古墳は現在のところ見つかっていない。最も古いものは中期の二子山古墳^{註9}である。宇治川の谷口の宇治橋東側丘陵に南北に位置する2基の古墳群である。北側を北墳、南側を南墳と呼ぶ。北墳は径42mの円墳で、鏡・玉類を始め衝角付冑・革綴短甲・刀剣・農工具等の多量の鉄製品が出土している。南墳は一辺36mの方墳である。北墳と同様、鏡・玉類を始め衝角付冑・紙留式短甲・挂甲及び、馬具等と共に、三環鈴という珍しい遺物が出土している。時期的には、北墳が中期中頃、南墳が中期後半に比定される。これらの豊富な副葬品からは、二子山古墳の被葬者が、東国への水・陸路の交通の要衝である、この地を支配していた有力な豪族であったことが推測されるのである。この二子山古墳に続くのが今回調査した瓦塚古墳である。後期に入って宇治川東岸地域が、古代山城の中心的な地域として抬頭したことを物語るのが、二子塚古墳であり木幡古墳群である。

二子塚古墳は二重周濠を持つ所謂大王陵級の前方後円墳^{註10}である。推定全長110m、二重周濠を含めたその規模は東西・南北とも全長220m程と、後期の山城地方最後の大型前方後円墳である。本市が行った本年度調査では、土取りによって半壊した後円部の中心部、横穴式石室推定位置に、石室を支えたと考えられる基礎礫群を検出した。木幡古墳群^{註11}は山城地方最大の後期群集墳である。現在宮内庁が宇治陵墓として管理するが、径10m～20m程の円墳がその主体となる。現状で120基程、かつてはその数倍はあったとされる。時期的には二子塚古墳が6世紀前半に、木幡古墳群には多くの横穴式石室の存在が推測されることから、後期群集墳が造成される6世紀中頃から後半を中心とするものであろう。このほか、後期群集墳では牟上り古墳群^{註12}がある。6世紀後半から7世紀前後の円墳3基から構成されている。

1. 瓦塚古墳発掘調査概要

以上、これらの他にもかつて存在した古墳がいくつか知られている。瓦塚古墳周辺に限っても、南150mの岡本遺跡からは発掘調査によって須恵器・埴輪片だけではなく、2基の方墳、日皆田1・2号墳を発見した。また、その付近には横穴式石室の石材と思われる石多数と須恵器が出土した一里塚古墳がある。須恵器には型式差が認められ、2基以上の古墳が存在していた可能性もある。また、この周辺は、旧陸軍施設敷地として大きな改変を受けた地区である。瓦塚古墳北東700mの黄檗宗本山万福寺の裏山では、馬具を副葬した古墳を発見したとの記録や須恵器の出土が伝えられる。瓦塚古墳の北側には宇治川東岸部で最も広大な平坦地が広がっている。この地区も旧陸軍施設敷地(現陸上自衛隊・京都大学宇治校地・市立東宇治中学)である。現在、考古学的空白地帯となっているものの、かつては瓦塚古墳と同規模程度の円墳状の小丘があったと伝えられている。これらの状況を考えると、この付近には比較的まとまった数の古墳が存在していた可能性が推測される。

飛鳥時代の遺跡としては、史跡準上り瓦窯が注目される。大和豊浦寺の創建瓦窯であり、瓦陶兼業窯4基と付属する工房跡が発見された。次の白鳳時代では、大鳳寺・岡本廃寺が造営される。大鳳寺は、川原寺式の創建瓦を持つ法起寺式伽藍配置の寺院である。下成基壇を付設する瓦積基壇の金堂を備えた本格的古代寺院であったことが確認された。岡本廃寺は前述の岡本遺跡に含まれる。瓦積基壇の金堂や、掘立柱建物の講堂を備えた法隆寺式伽藍配置の寺跡である。古墳時代から奈良時代の集落遺跡は、前述の寺界道遺跡・岡本遺跡や準上り遺跡・東中遺跡などがある。このように、最近の調査で宇治市東部の歴史的変遷は徐々に解明されつつあるが、不明な点も数多く、一層の調査を必要とする。



第4図 一里塚古墳出土の須恵器(註14報文よりのトレース)

3. 調査の経過

(調査前の状況)

瓦塚古墳は、ゆるやかに西に向って低くなる台地上に築造された古墳で、現状は周囲を水田で囲まれている。現状での規模は最大直径30m、最小直径27mの不整形で、水田面より2.5m程の高さである。水田中より古墳を眺めると、径の割には高さが低い感を否めない。墳丘裾は幅1.5m程のテラスがめぐり、水田との境は高さ50cm程の崖となっている。

古墳は、現在、畑として利用されている。利用されているのは、墳頂部と東・西・南各斜面が主であり、北斜面には樹木が植えてある。墳丘の西南裾には小屋が建ち、小屋の東側には昭和56年に宇治ライオンズクラブが建立した「瓦塚古墳」の石碑が建っている。また、墳丘裾のテラスにそって茶木がめぐっているが、これはかつて古墳が茶畑として利用されていた名残りであるという。

墳丘上では埴輪片が散見できた。また、耕作中も埴輪片がよく出土したといい、ダンボール箱一箱分の埴輪片を中村健二氏が保管されていた。この中には縄タキを有す平瓦片が少量混じっていた。墳丘西斜面では耕作中に拳大の円礫がよく掘り出されたといい、その一部が木の根本に集めてあった。これらは葺石である可能性が高いと判断される。

(トレンチの設定)

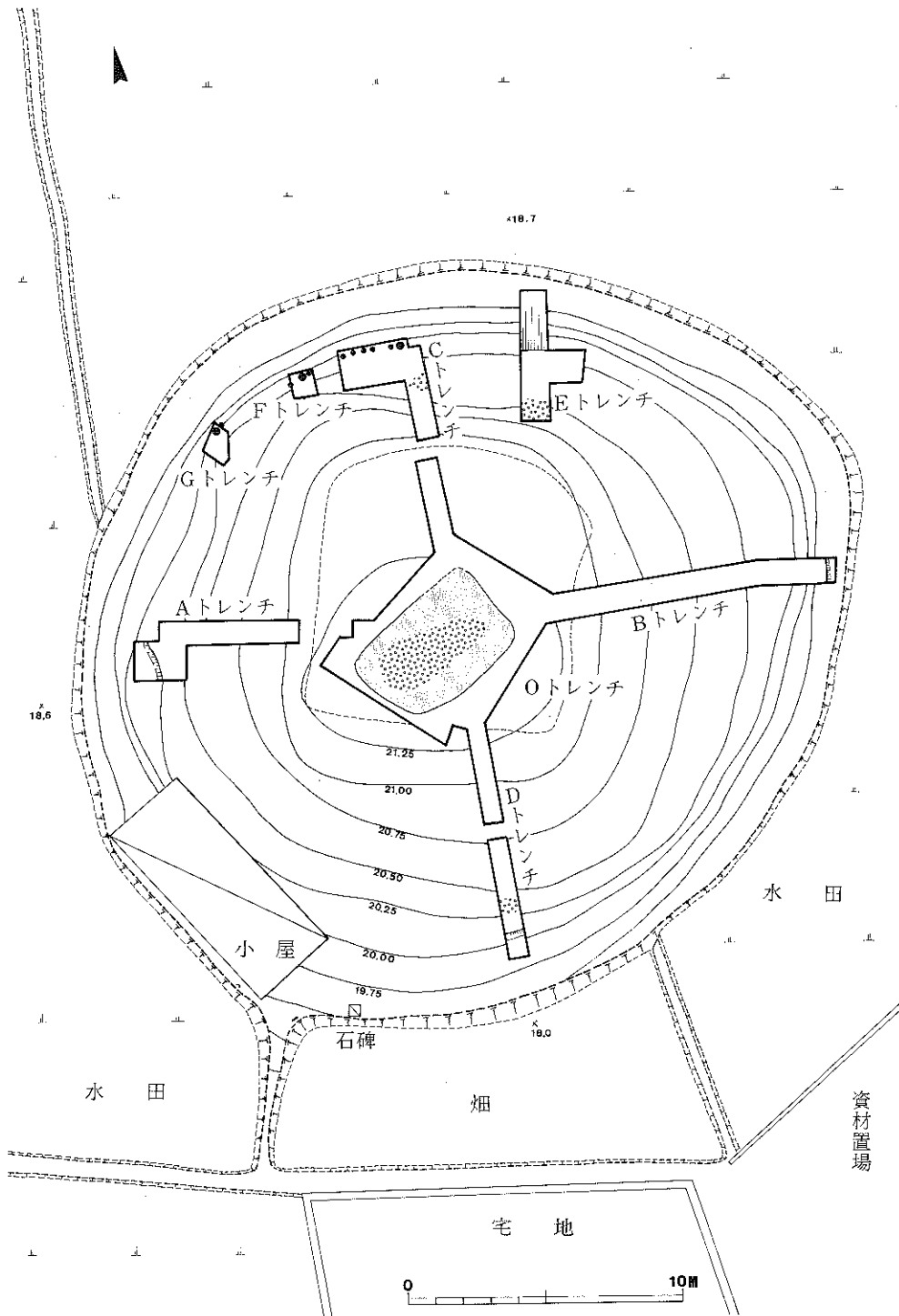
調査は昭和62年8月17日より開始した。まずは墳丘の測量より開始した。ここで使用した標高は、宇治市立東宇治中学校内に存在する国土地理院の水準点(23.18)を基本とした。測量とともにトレンチ(試掘溝)の設定を行なった。

トレンチは、まず墳頂部にOトレンチ(5m×7m)、墳丘斜面にA・Bトレンチ(幅1m、長さ6~10m)とC・Dトレンチ(幅1m、長さ8~9m)を直交させて設定するとともに、Cトレンチ東側に補助としてEトレンチを設けた。調査の進行とともに、Cトレンチで埴輪列を発見したため、トレンチを西側に2m拡張し埴輪列を追求することとし、西側にF・Gトレンチ(1×1m)を新たに設定し更に埴輪列を西に追求した。

(主体部の調査)

Oトレンチでは、厚さ15cm程の耕作土等を除去後に直ちに第1主体部掘方と第2主体部掘方・木棺痕跡及びそれらを破壊する盗掘壙・攪乱壙の輪郭を検出した。まずは、主体部を破壊する盗掘壙の掘削から手がけた。盗掘壙中からは、玉類多数・金銅製品破片・赤色顔料小粒・若干の鉄片・埴輪片が出土し、玉類・金銅製品については、第1主体部中央東側を破壊する盗掘壙より集中して出土した。このため、この部分の掘削土については、すべて篩に

I. 瓦塚古墳発掘調査概要



第5図 瓦塚古墳トレンチ配置図

3. 調査の経過

かけこれらを取り上げるよう努めた。第2主体部は、盗掘により南側の一部を残して大半が完全に破壊されていた。また、耕作土直下にその残存部もかろうじて遺存している状況だったため、これを完掘することとした。第1主体部は、北3分の2を盗掘により攪乱されていたものの、墓壇掘方及び礫槨の一部が遺存しており、その範囲を確認することができた。そして、南3分の1は、第2主体部遺存部直下にあるため、第2主体部木棺部分をウレタン樹脂で取り上げ、調査を実施した。第1主体部の礫槨遺存部は、棺側を覆う礫中に天井を覆っていた礫が落ち込んだ状況が良好に確認でき、落ち込んだ礫を除去し、槨内の調査を行なった。

(墳丘の調査)

墳丘用に設定したA～Gトレンチの内、A・Bトレンチでは、後世の改変が著しく、葺石・埴輪列・段築について良好な状況は検出できなかった。これらを最も良く検出したのは墳丘北側斜面に設定したC・E～Gトレンチである。Cトレンチでは埴輪列・葺石・段築を、Eトレンチでは段築・葺石を、F・Gトレンチでは埴輪列を検出した。ただ、埴輪列はその底部がかろうじて遺存しているのみで、段築を検出したEトレンチでは原位置の埴輪は無く、破片が散乱している状況であった。また、段築整形土を流土と当初誤認したため、一部に掘りすぎた部分があった。Dトレンチでは葺石の一部を検出した。

(現地説明会と埋め戻し)

遺構が概ね完掘に近づいた10月3日に市民対象の現地説明会を開催し、約300名の参加をえた。その後、主要部に山砂を入れ、埋め戻しを行い10月20日に調査を終了した。

4. 遺 構

(1) 主 体 部

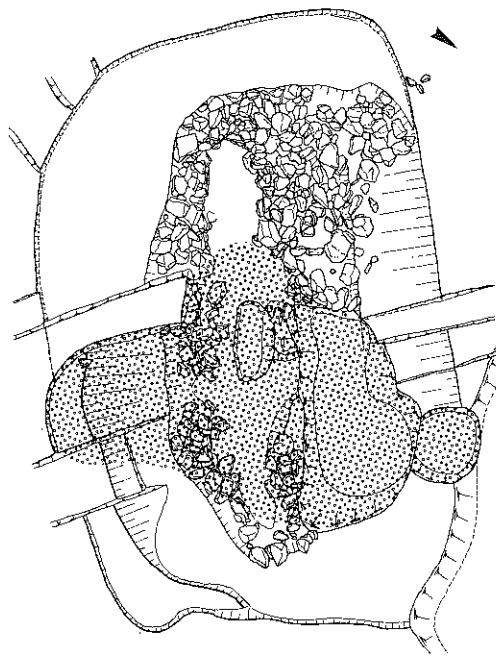
瓦塚古墳の被葬者埋葬施設(主体部)は、墳頂部のほぼ中央部分で2基検出した。両者は同じ位置で上下に重複して築かれており、その構築時期を違えている。したがって、下位に位置する主体部が古墳築造に伴い構築された中心的な主体部であり、上位に位置するものが追葬の主体部と判断できる。最初に築かれたものを第1主体部、後に築かれたものを第2主体部と呼ぶこととする。

(第1主体部)

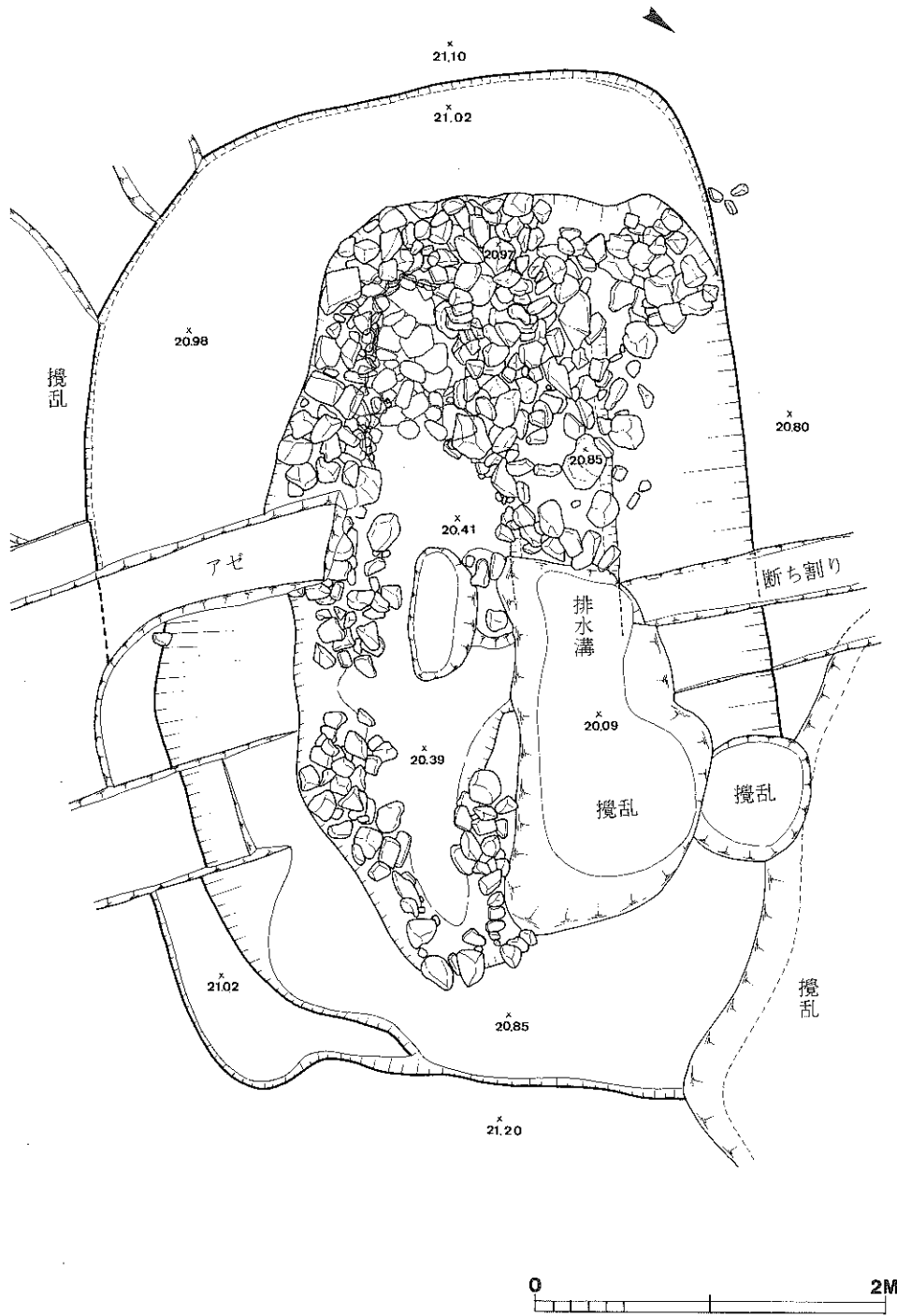
第1主体部は、主軸を北から約47度東へ振り築かれた礫槨である。盗掘による破壊は墓壇掘方の一部と礫槨の北3分の2に及ぶが、礫槨については被盜掘部分が完全に破壊されていたわけではなく、部分的に礫が旧状を留めておりその全体的概要を窺うことができた。

墓 壇 墓壇掘方は、全長5.8m程、幅3.7m程を測る隅丸長方形の平面形であり、西長辺を除く3方が礫槨部分のみをさらに一段深く掘り凹めている。基本的には2段墓壇といえる。西長辺が2段に掘り凹められていないのは、後述する排水溝のためと思われる。墓壇掘方の埋土は単一土層である。

礫 槨 墓壇の中心に木棺を礫で覆う礫槨が構築されている。全長約4.4m、幅約1.4mを測る。礫の大きさは、10~20cm程でチャート質の河原石である。礫は雑然と積みあげられている。盗掘を免れた南部分では、木棺が腐朽し棺上を覆っていた礫が棺内に落ち込んだ状況を保っていた。この礫は棺底面まで達しており、その厚さは0.5mを測る。したがって、瓦塚古墳の礫槨は、棺の四周及び上面を覆うものであったことが理解できる。図版第5の写真では、木棺がかつて存在した断面部分に土が見えるが、これは盗掘墳の土がなお完全に除去できていないためであり、そ



第6図 第1主体部の盗掘部分(アミ部分)



第7図 第1主体部実測図

1. 瓦塚古墳発掘調査概要



第8図 第1主体部礫埋実測図

の向こうにはぎっしりと礫が詰まっている。

木 棺 木棺は完全に腐朽していたが、礫槨の内法よりその規模は推測できる。これによると、全長3.7m、幅0.6m、高さ0.5m程の木棺が復元できる。型式は不明である。木棺は直接墓壇に置かれていたものと思われる。

排水溝 礫槨の西辺外側にそって排水溝が穿たれている。幅0.6m、深さは墓壇底より0.3mである。長さは不明である。これは、北半分が盗掘により完全に破壊されていることと、礫槨西辺下に排水溝の遺存部分があるため、礫槨の保存を考慮して完掘することを断念したためである。但し、ボーリングによる調査では、礫槨遺存部分西辺下に礫の反応があるため、この排水溝は西辺にそって構築された可能性は高い。なお、排水溝断面は「U」字形を呈し、その中に10~20cm大の河原石が詰め込まれている状況が断面観察より確認できた。

遺 物 遺物は、大きく3箇所から出土している。棺内(上)、礫槨内、墓壇内である。出土位置は第17図に詳しい。棺内(上)からは、鉸具(1)が底面よりやや遊離した状況で出土した。棺内遺物か棺上遺物かは不明である。礫槨内からは、礫の間隙より鉸具(2・9)・鏡(5~8)が出土している。礫を完掘していないため、これらは礫上面からやや落ち込んだ状況のもののみを取り上げたこととなっている。墓壇内の埋土中より、鞍金具(3・4)が出土した。ただ、鞍金具の(3)は攪乱により原位置を移動したものである。

また、盗掘壇内より玉類、金銅片、玉杖形金銅製品、鉄片、赤色顔料粒、埴輪片が出土している。盗掘壇は、第1主体部及び第2主体部をも破壊しているため、これらがこのどちらの遺物であるかは確定し難い。しかし、玉類、金銅片、玉杖形金銅製品が比較的集中して出土した盗掘壇東部付近については、これらの遺物は第1主体部のものであったと推測できる。この理由は、判出した赤色顔料が水銀朱(上田健夫氏分析)であり、第2主体部の使用するベニガラと異なるためである。

(第2主体部)

第2主体部は、第1主体部上に主軸をほぼそろえて構築されている木棺直葬である。遺存していたのは南端部分のみでありその長さは墓壇1.8m、木棺0.9mである。他は完全に盗掘により消滅していた。また、第2主体部の検出面は地表下わずか15cmであり、検出面より木棺底面までも10~15cm程である。かろうじて、その一部が遺存していたといえる。第2主体部は、第1主体部礫槨直上に構築されており、その構築時期は第1主体部礫槨内の木棺が腐朽し天井部を覆う礫が棺内に陥没した後である。これは、第2主体部の断面に土層の乱れがないことから窺うことができる。

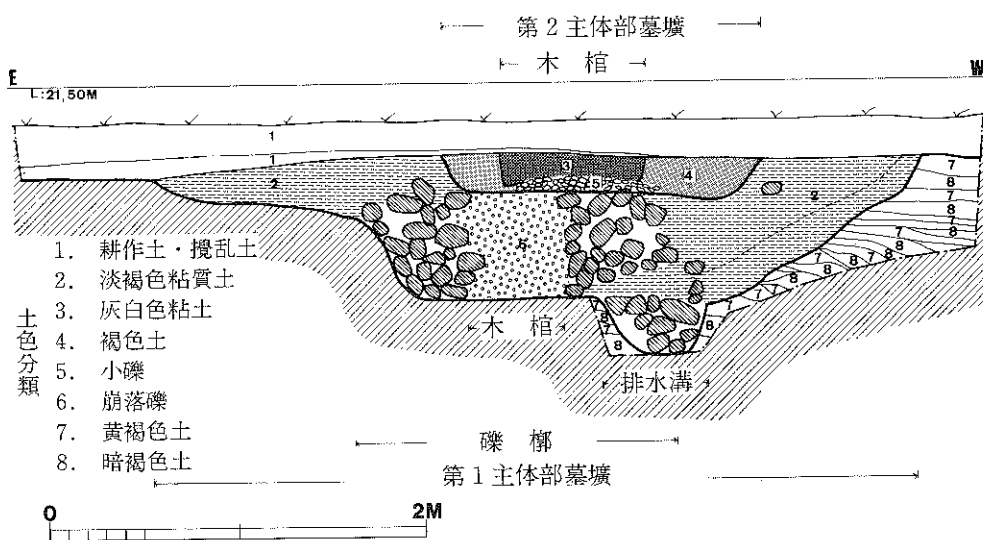
墓 壇 墓壇は、幅0.9m、遺存長1.8mの平面方形を呈する。墓壇端部には大きさ10~20cm程のチャート質の河原石が数十個まとめてあった。これらの河原石は第2主体部構築上

I. 瓦塚古墳発掘調査概要

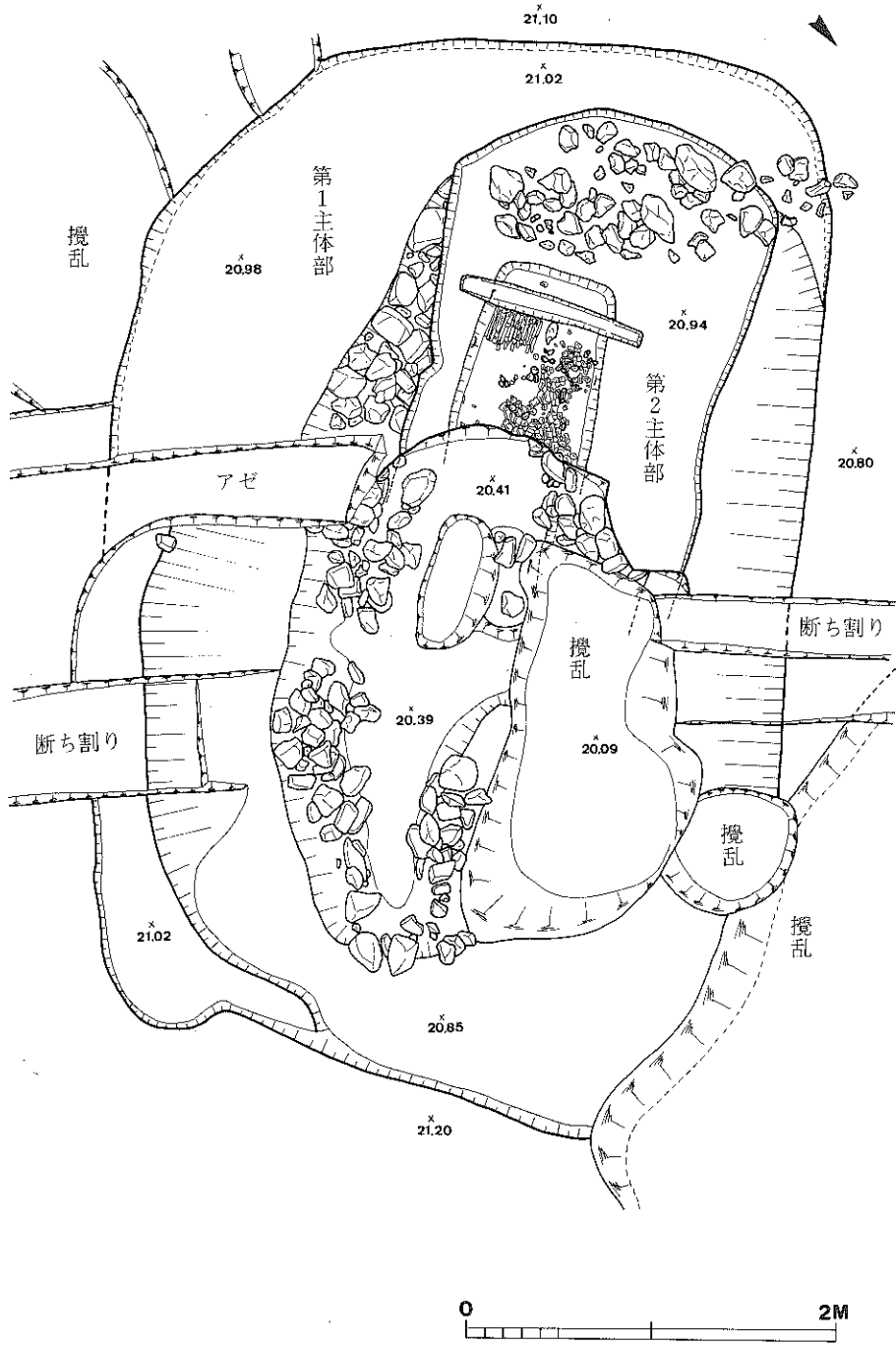
必ずしも必要とするものではないため、構築時に掘り出した第1主体部礫層使用礫を一個所にまとめたものと考えられる。

木棺 木棺は、遺存長0.9m、棺端の幅0.6m、破壊部の幅0.75mを測る組合わせ式木棺である。木棺材は完全に腐朽しており、その痕跡を検出した。木棺痕跡の両側辺部で幅5～7cm程の木棺側辺材らしき痕跡を検出した。したがって、木棺の内法の幅は約0.6m程と考えられる。木棺痕跡は検出面で直ちに灰白色粘土の広がりとして確認でき、粘土は棺底まで達していた。木棺は、この粘土での被覆範囲が天井だけなのか、四側面をも含むのかは確定できなかった。また、木棺内側は赤色顔料が塗布されていたらしく、木棺痕跡全体が赤く染まっていた。上田健夫氏の分析によれば、この赤色顔料はベンガラ(Fe₂O₃)であるという。

棺台の丸太 棺端から15cm程内側で棺を横切る細長い圧痕を検出した。長さ1m、幅10cm程である。この圧痕は、棺側より東辺で15cm程、西辺で18cm程外側にはみ出ている。棺台として使用した丸太材が棺の重みや土圧によって圧痕として残ったものである。凹みの深さは棺底より2～3cm程である。圧痕を詳細に観察すると、斜面はゆるやかな湾曲をなすため丸太材であると判断できるが、底面が幅5cm程の平坦面となっている。したがって、安定をはかるため丸太の接地部を面取りしたものであったことが理解できる。圧痕が棺よりはみ出ている部分にも棺内と同様な灰白色粘土が覆っていた。棺を被覆した粘土が何らかの事情で流れ出したとは考え難く、丸太も粘土で被覆されていた可能性が高い。また、ベンガラも一部に認められたが、圧痕の棺よりはみ出した部分すべてに存在しないため、これは棺

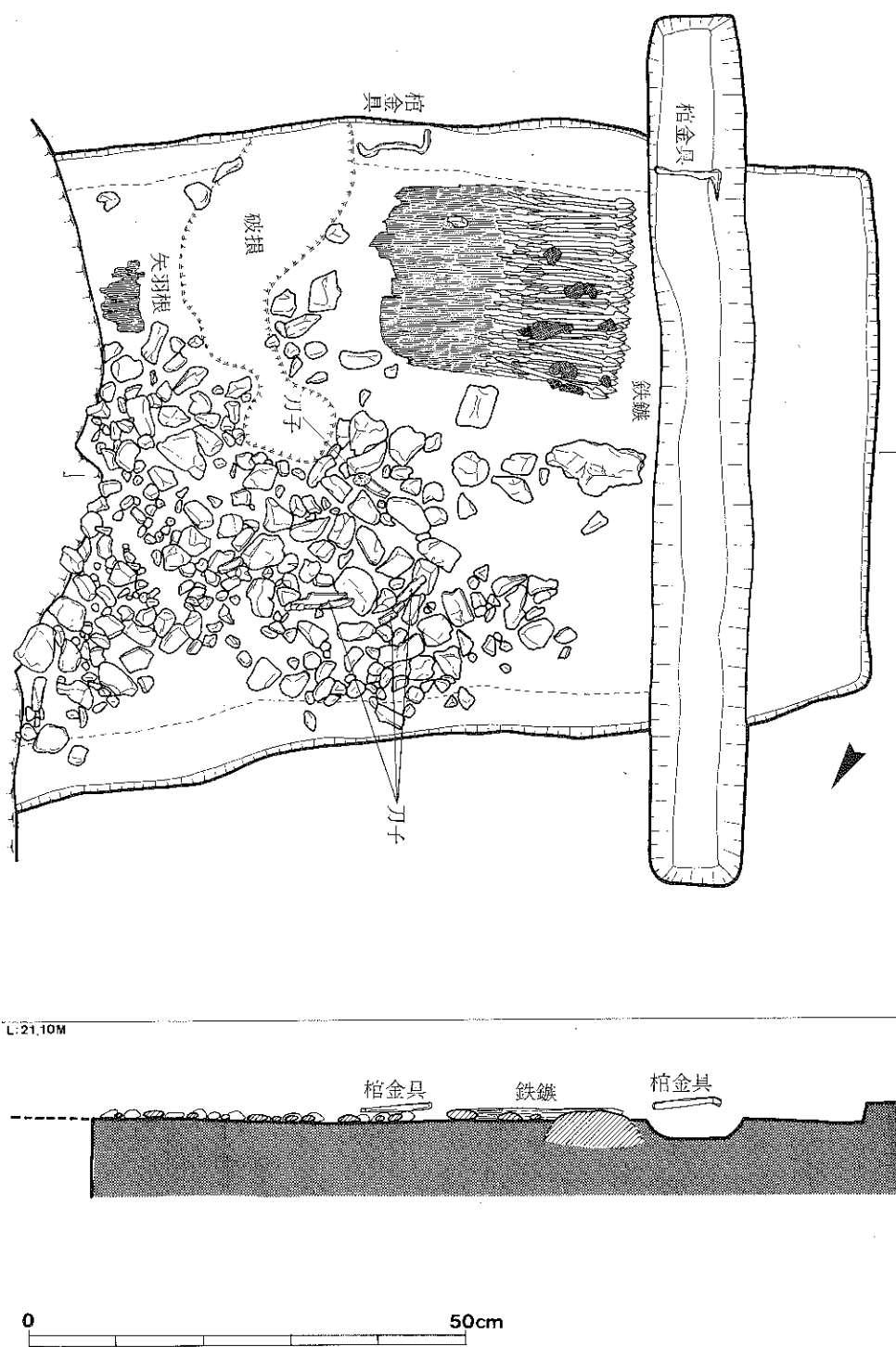


第9図 主体部横断面図



第10図 第2主体部実測図

I. 瓦塚古墳発掘調査概要



第11図 第2主体部木棺実測図

内に塗布されていたものが滲み出したものと考えられる。

木棺下の小礫 棺台より内側の木棺底面に径数cm程のチャート質の河原石が一部に敷きつめられていた。この小礫は、ほとんどが棺内におさまっているが、盗掘墳の断面で観察すると明らかに木棺外にも少し広がっている状況が窺えた。したがって、小礫は棺内に入れていたものではなく、木棺の下、つまり墓壇底と棺台により少し浮いた木棺との間に本来は存在していたものであると考えられる。また、小礫に混じってところどころに第1主体部礫層の一部が顔を出していた。

遺 物 遺物は、鉄鏃40本、刀子8本、鏃と思われる棺金具3個、矢羽根がすべて棺内より出土した。鉄鏃は、切先をそろえ3段程に積み重なった状況で出土した。茎の外側には竹材と思われる矢柄の一部が錆化し痕跡を留めていた。鉄鏃の上面にはところどころに繊維質のものが付着しており、鉄鏃の下面には木材の一部が錆でつまれていた。この木材は木棺底板の一部と思われる。鉄鏃は、状況的に矢立に入れられ棺内に副葬されたものと思われ、鉄鏃上面に付着している繊維質(布)がその矢立の一部とすれば、矢立は胡籛であったと考えられる。

刀子は、鉄鏃の右下方で8本がまとまって出土した。切先の方に規則性はない。

鏃と思われる棺金具は、東辺で2個、西辺で1個出土した。ともに棺底よりやや遊離している。西辺のものは調査上の手違いで出土位置を明確にできなかった。また、漆膜状のものが盗掘で破壊されている部分付近で出土した。矢羽根と思われる。

(小 結)

以上のように、第1主体部・第2主体部ともに盗掘に会い旧状を大きく損っていたが、それぞれの概要は概ね窺うことができた。特に第1主体部については、その規模を確認できたことは不幸中の幸いであったといえる。

第1主体部の木棺を礫で覆う施設については、ここでは「礫層」という用語を使用した。礫層を主体部とする古墳として著名なものに埼玉稲荷山古墳がある。埼玉稲荷山古墳の礫層は、木棺の側面及び下部を礫で覆うものであって、いうなれば礫床に近いものである。従来からはこの礫床に近い構造のものを一般的に「礫層」と呼んできた。この点では、瓦塚古墳の第1主体部の施設は礫層と呼べないかも知れない。しかし、石室状に石を積みあげるのではなく、天井石を乗せ室を作るでもなく、無雑作に礫で棺を被覆した瓦塚古墳の第1主体部については、現状では礫層と呼称して大過ないものと考えた。また、第2主体部についても、木棺を粘土で被覆はしているものの、棺を粘土で完全に囲み込んでしまう粘土層とは相違するため、木棺直葬の用語を使用することとした。

1. 瓦塚古墳発掘調査概要

(2) 墳 丘

墳丘については、墳形・規模、盛土、段築、埴輪列、葺石の各項目別に調査の概要を報告することとした。

(墳形・規模)

墳形は、すでに『宇治市史第1巻』で指摘されているように円墳と見てまちがいはない。現状でも、ややいびつではあるが概ね円形で保存されているし、後述するように埴輪列も概ね弧を描いている。墳頂部付近では、測量図の等高線は隅丸方形状を呈するが、これは耕作に伴い変形を受けているためである。

規模については、今回の調査で明らかな墳丘裾部を検出していないため確定はできないものの、E・Aトレンチ下端部の状況を見ると、概ね現状の高まりが本来の墳丘の大きさと見て大過ないように思える。したがって、瓦塚古墳の直径は約30mと推定できよう。ただし、墳丘周囲の水田下に周溝が埋没している可能性があるため、墳丘直径の確定は、水田部分の調査によって決定されるべきであろう。

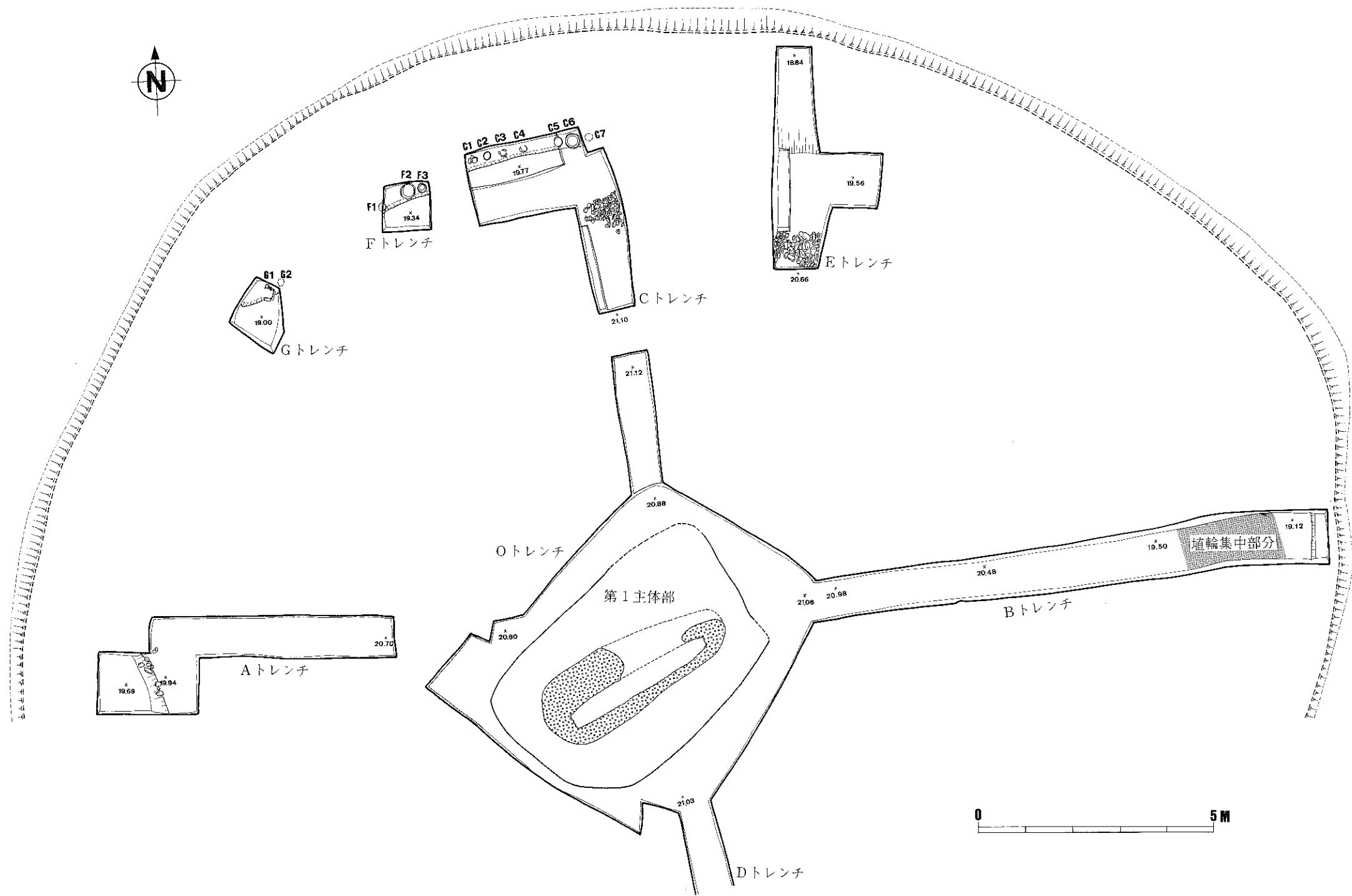
墳丘の高さは、現状では水田面より約3m程を測る。しかし、本来は更にこの高さを上回る規模であったことは第2主体部の検出状況から考えて充分理解し得る。また、土地所有者である中村健二氏も、ここ数十年間で数十cm程墳丘が低下していることを証言している。かつての墳丘高を推定する根拠は現状では見い出せないが、第2主体部を完全に埋葬し、その上に一定の被覆土が必要であったことを考慮すれば、少なくとも現状よりは1m近く高かったものと思われる。

(盛 土)

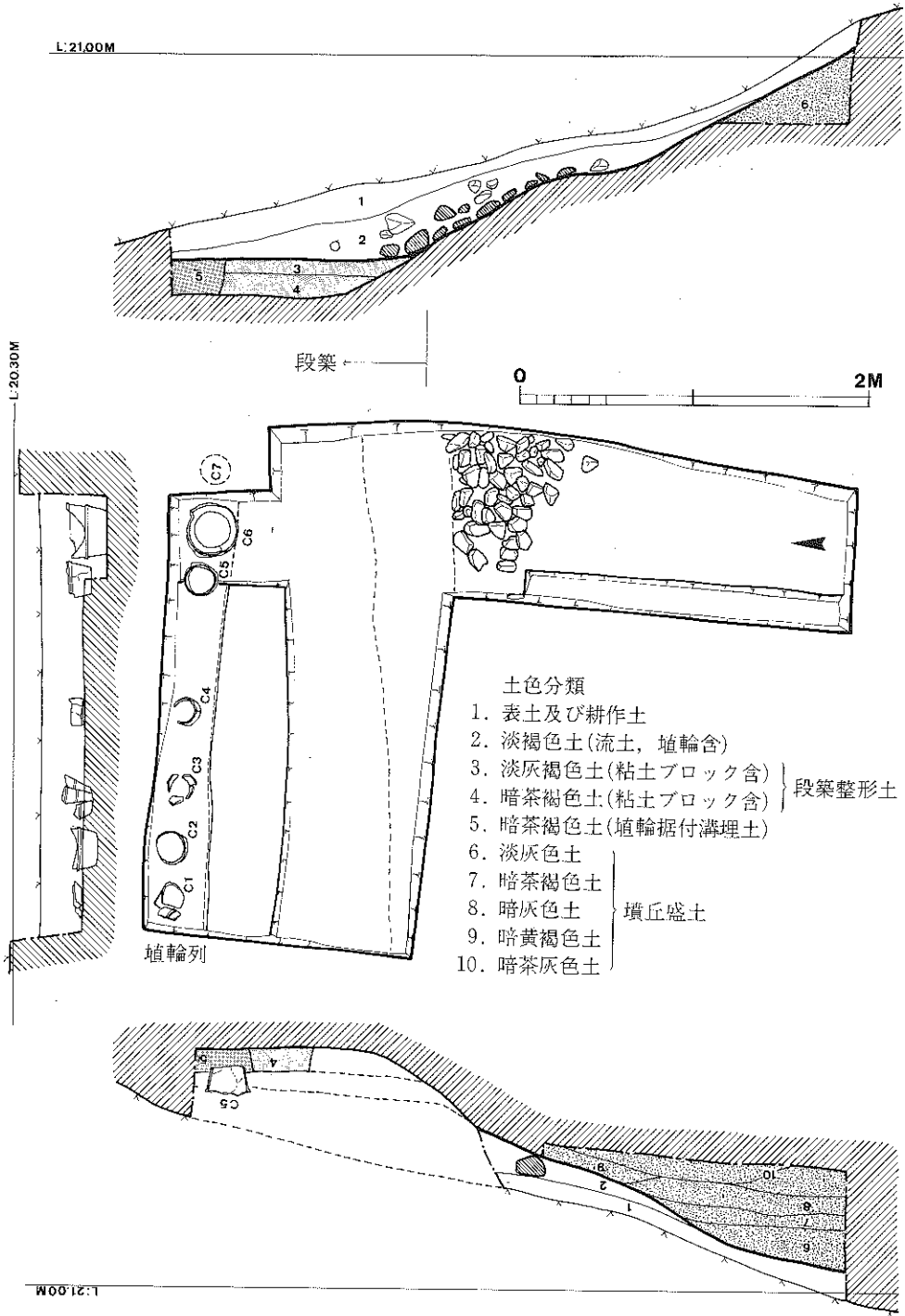
墳丘斜面部に設定した各トレンチの状況から考えて、本墳は盛土によって築造されていることが理解できた。墳丘に断ち割りを設けていないため、盛土の状況は詳細には観察できていないが、墳丘の下方は暗褐色ないし黒褐色系の土であり礫を混じえていない。比較的軟らかい土である。墳丘の上方は、暗褐色ないし灰褐色の粘質土が多くやや硬い。主体部を横断する土層図作成時に一部墳丘をも断ち割ったところ、暗褐色土と黄褐色土が層厚5～10cmずつ交互に盛り上げられている状況が看取できた。いわゆる版築ほどではないが、意識的に交互に盛り上げたものと思われる。

(段 築)

段築を検出したトレンチは、E・F・G・Cの各トレンチであり、C・Eトレンチではその幅や造り方を観察できた。段築は、水田と墳丘の境から約3m、水田より1.2mの高さの墳丘斜面部にその外端があり、幅はEトレンチでの状況より概ね1.7m程と思われる。

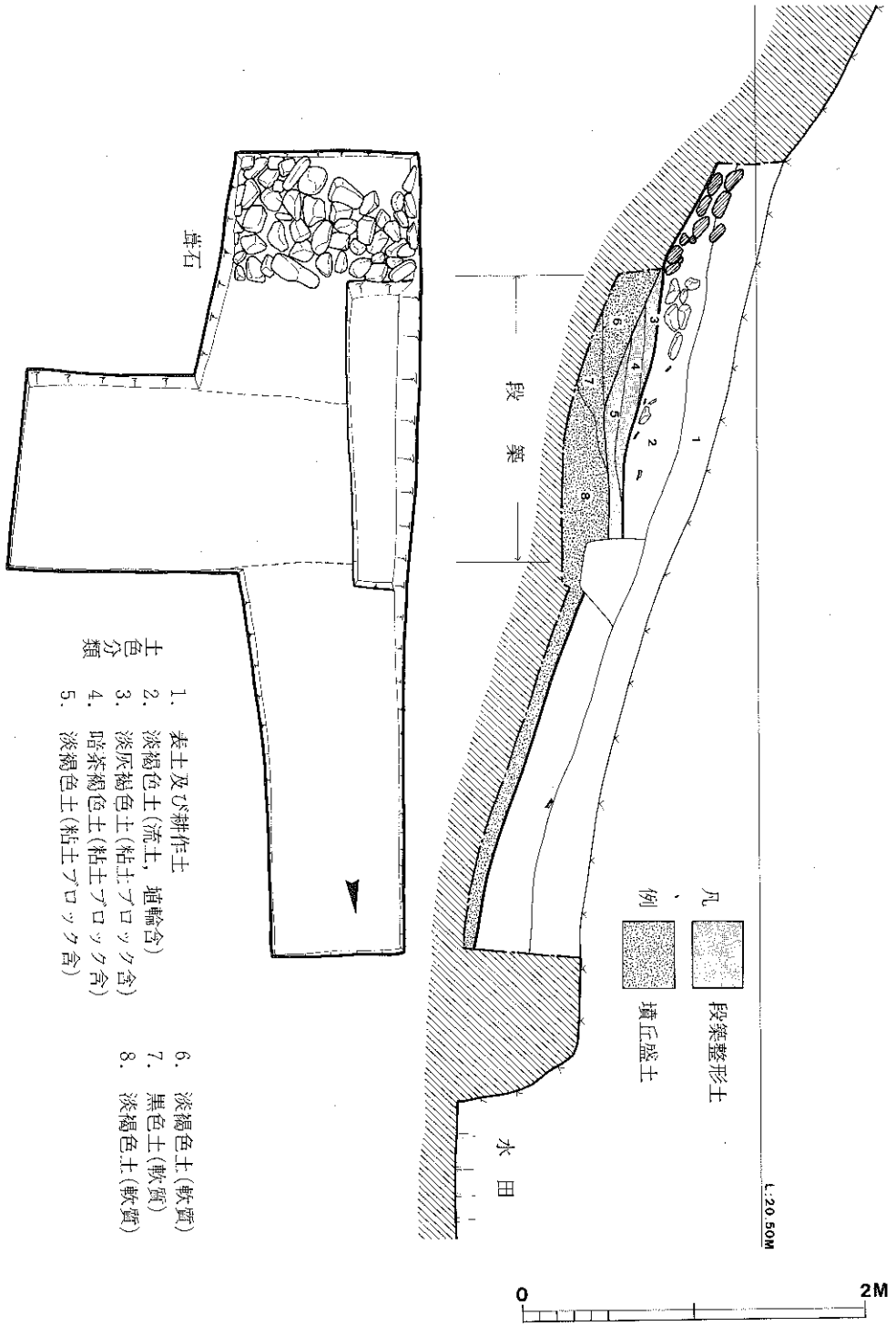


第12図 墳丘北半部全図



第13図 Cトレンチ実測図

I. 瓦塚古墳発掘調査概要



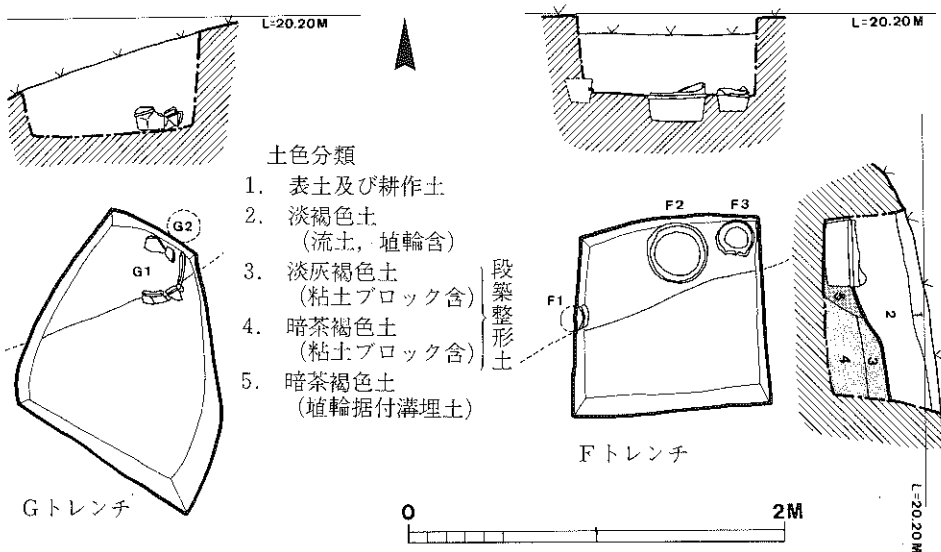
第14図 Eトレンチ実測図

段築の造作は、墳丘を土盛りする時に一定の荒造作を行ない、その幅を確保し、その後に灰色粘土を多く含む土を更にその上に20cm程盛り造りあげている。この灰色粘土を多く含む土を段築整形土と呼ぶこととする。段築整形土は、C・E・Fの各トレンチで検出している。A・B・D各トレンチでは、墳丘が後世に破損しているため段築を検出できなかった。瓦塚古墳は現状の中では2段築成と考えられる。

(埴輪列)

埴輪は、各トレンチから出土しているが、原位置を保つ埴輪列を検出したのはC・F・Gの各トレンチである。埴輪は段築整形土を掘り込む幅約50cm程の埴輪据え付け溝に底部が埋め込まれている状況で検出した。埴輪には、底部直径30cm程の大型品と20cm程の小型品とがあり、大型品を3本分(C 6・F 2・G 1)、小型品を8本検出した。C 7の埴輪は、中村健二氏がかつて偶然掘り出したもので円筒埴輪と考えられるものである。大型品については、G 1周囲に散乱していた破片の状況から朝顔型埴輪であることが理解できた。小型品は円筒埴輪である。列中における両者の配置状況は、朝顔型埴輪が約3.2m間隔で配置され、その間を9~10本の円筒埴輪でうめているものと考えられる。

埴輪列中に埴輪間の距離が他と比べて非常に長い部分がある。F 1とF 2、C 4とC 5の



第15図 F・Gトレンチ実測図

1. 瓦塚古墳発掘調査概要

間である。この間は後世の改変で埴輪が脱落したのではなく、当初よりなかったことが土層の状況より確認できている。有機質の埴輪状品がここに立てられていた可能性がある。埴輪列は、段築外側ぞいに概ね弧を描いている。

Eトレンチでは段築上に、Bトレンチでは下端付近で埴輪が比較的まとまって出土した。

(葺石)

葺石を検出したのは、C・D・Eの各トレンチである。いずれも墳丘2段目斜面の葺石の一部である。使用石材は、拳大のチャート質の河原石註24が主体で、若干砂岩を混じえている。葺き方は、小口積み状に石を葺きあげている。Eトレンチでは、Cトレンチと比べてやや大ぶりの石が使用されている。C・Eトレンチの葺石は原位置であるが、Dトレンチは移動したものの可能性が高い。墳丘1段目斜面では葺石を検出していない。はたして1段目に葺石があったか否かについては現時点では不明であるが、Eトレンチでの土層状況から、後世の改変により今回のトレンチでは発見できなかった可能性が考えられる。

(小 結)

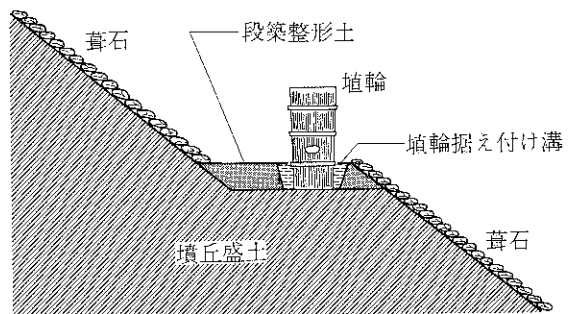
以上、瓦塚古墳の墳丘の概要について、各トレンチの状況からのべてきた。ここでは、これらを整理するとともに、現状での墳丘遺存状況についても若干のべることにする。

瓦塚古墳は、現状では、直径30m程、高さ約4mの円墳であるといえる。また、墳丘斜面に一段の段築を有するため、2段築成の円墳でもある。

墳丘の外表施設としては、段築上に埴輪列をもち、墳丘斜面には葺石を有している。墳丘は、その大半を盛土により築造されていると考えられる。

墳丘の遺存状況については、状況的に現在の古墳範囲がかつての墳丘の大きさを比較的良好に今に伝えているものと判断できる。

外表施設の遺存状況は、北半分が比較的良好に遺存していることが理解できた。葺石については、トレンチ外のボーリング探査においても墳丘北半部で反応が確かめられる。このように北半部の葺石等の遺存状況が良好なのは、この部分では耕作が行なわれておらず、後世の攪乱が少ないためであろうと思われる。墳丘南半部では、部分的に葺石が検出できたが、埴輪・段築は検出されず、かろうじて外表施設の一部が遺存しているに留まっている。



第16図 段築部分復元図

5. 遺 物

今回の調査で出土した遺物には、金銅製品、鉄製品、玉類、土器類、埴輪類があり、コンテナに10箱分程出土している。出土位置は、第1主体部、第2主体部、盗掘壙、墳丘の各所である。前3者から出土した遺物は被葬者の副葬品であり、墳丘から出土した遺物は墳丘に樹立された埴輪が中心である。

(1) 第1主体部

第1主体部から出土した遺物は鉄製馬具であり、鞍金具^{しおでかなぐ}2点、鍔^{あぶみ}1点、鉸具^{かこ}3点である。出土位置は、棺内、礫塚内、墓壙掘方内であり、詳しくは第17図のとおりである。

第1主体部は盗掘の災いを受けているため、原位置を保っていたものは上記のごとく少量ではあるが、盗掘壙出土遺物の大半は後述のごとく第1主体部副葬品の可能性が高い。

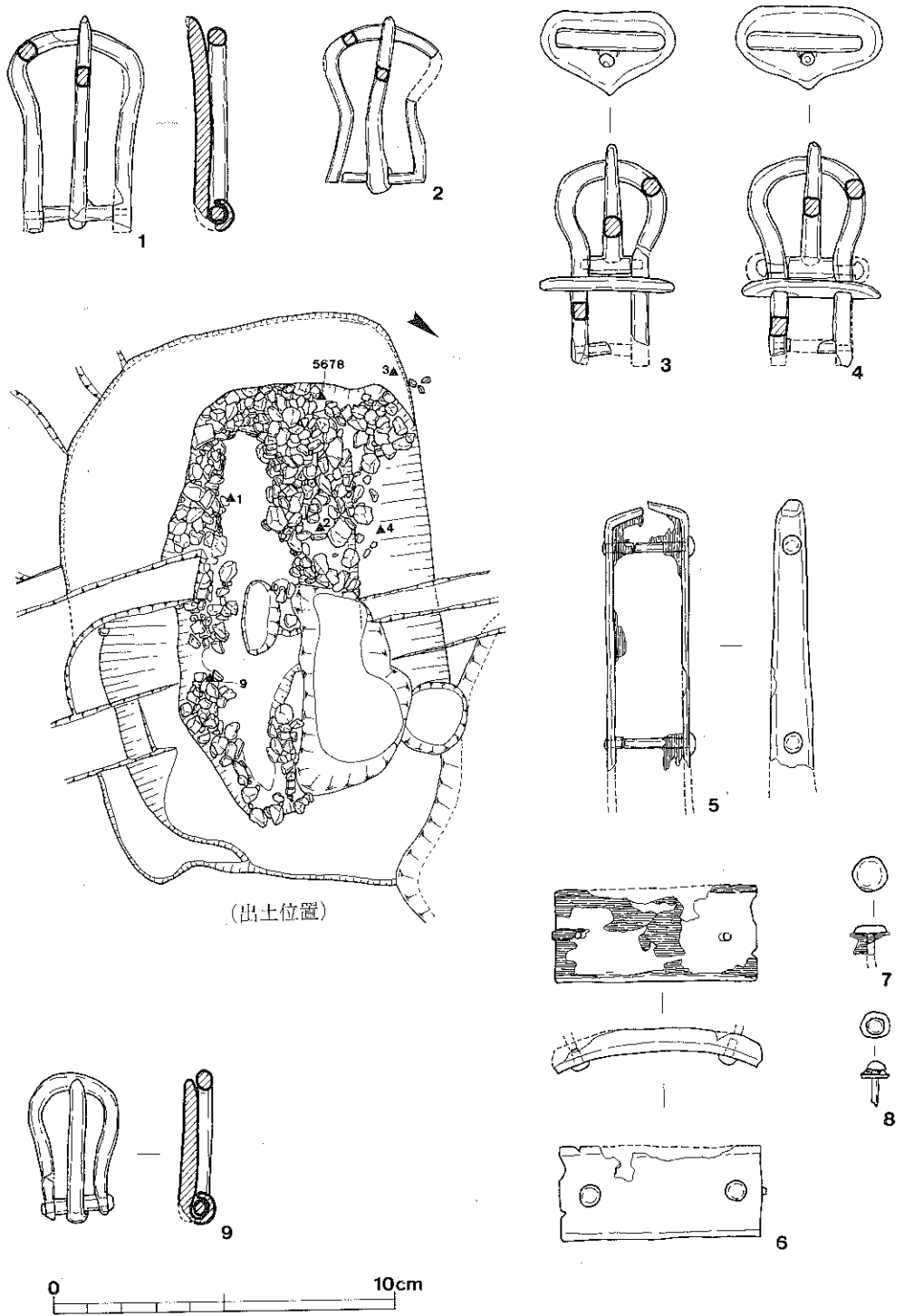
(馬 具：第17図)

鞍金具(3・4) 同一型式の鞍金具^{しおでかなぐ}1組2点がある。その法量から鞍の後輪の磯金具としてつけられた鞍金具1組と考えてよい。鉄製品。構造的には、輪金・刺金・座金具からなり、アソビがないものである。鉸具に座金具を付けた形態をとる。一端の開いた輪金にT字形の刺金を所定の孔にさし込む。その開いた一端はそのまま脚となり座金具を介して木製の鞍橋に打ち込み、鞍橋の裏側につきぬけた先端に、段をつけて両端を細くした鉄棒を孔にさし込み固定する。座金具とその脚側の鉄棒との間隔から推定される鞍橋の厚さ、つまり後輪に使われた木質の厚さは1.5cmである。1は全長6.4cm。輪金の環部は幅3.3cm、断面は径5mmの円形。基部は5×7mmの長方形断面。座金具は心葉形で高さ2.5cm、幅3.9cm。4もほぼ同寸法で、全長6.6cm。輪金の環部の幅は3.4cmを測る。ただし、4は3と同一構造であるものの、輪金と刺金との連結方法が若干異なる。3は単に孔に鉄棒の先端をさし込むものであるが、4は細くした刺金の両端を輪金基部の外側までつきだし、その飛び出した突出部をつぶすことによって鉸状とし、輪金基部に留める。

鍔(5・6・7・8) 木製の鍔^{あぶみ}に要所だけを細い鉄板で覆い鉸留めした木心鉄板張輪鍔。柄上半部と輪上端部内面にあたる鉄板帯(5・6)と、鍔に付属する鉄鉸(7・8)である。

5は、厚2mmの先細りする鉄板の狭端部を1cm程曲げたものを2枚1組として木製輪鍔の柄側面に装着する。柄部への固定は、長さ2.6cm、径3mmの円頭鉸を2本片面よりさし込んで固定する。鉄板内面に遺存する木質から、柄部木心幅は2.4cmに復元できる。また、残る木質は全面に認められることから、鍔鉸金具には木質部を穿って連結されていた可

I、瓦塚古墳発掘調査概要



第17図 第1主体部出土遺物実測図(鉸具：1・2・9、鞞金具：3・4、鏡：5～8)

能性がある。残存長7.7cm。幅は狭端部側で7mm、広端部側で1.3cmを測る。

一方、6は厚さ1mmの鉄板の両長側辺を8mm程内側に、断面「コ」の字形に折り曲げたものである。折り曲げられた側面の両端は目取りをする。輪部への固定は、輪上端部の内面のカーブに合わせ緩やかに反りをもたせ、径3mmの円頭鋏を両端より8mmの所に1か所づつ計2本打ち込む。鉄鋏は5で用いられた同一のものと思われるが全長は不明。残存長は8mm。内面に付着する木質より輪部木心厚は2.4cmに復元できる。全長7.9cm、幅3.6cmを測る。

7・8は出土状態から鐙に付属する鉄鋏とした。7は、残存長1cm、径2mmを測る。鉄製の平頭鋏である。木質は釘部に対して垂直方向に遺存する。8は、残存長1.4cm、径2mmを測る。鉄製の円頭鋏である。円形の座金をもつ。木目は釘部に対して直交方向に遺存する。

鉸具(1・2・9) 法量・形式はまちまちで対となるものはない。いずれも鉄製である。

1は、一端の開いた輪金に段をつけて両端を細くした鉄棒を所定の孔にさし込んでさむ。それに長さ8cm程の鉄棒の端を巻き付け刺金とするものである。全長6.3cm。輪部の環部は幅4cm、断面は径5mmの円形。基部は一辺6mmの方形断面。

2は、長さ13.5cm、一辺4mmの断面方形の鉄棒を曲げて輪金をつくり、その基部に長さ7cm程の鉄棒の端を巻き付け刺金とするものである。全長5.2cm。輪金の環部は幅3.4cm。

9は、構造的には1と同様のものである。ただし、輪金基部と刺金の巻き付く鉄棒との連結の方法及び、法量が異なる。輪金の開いた一端は両端とも扁平で、刺金の巻き付く鉄棒の両端は、突出部をつぶし鋏状にして輪金の基部に留める。全長4.4cm。輪金の環部は幅2.7cm、断面は径5mmの円形。基部は一辺5mmの断面方形。刺金は6cm程の鉄棒を使用。

(小 結)

以上、第1主体部より出土した馬具の概要である。鐙及び鉸具は、それぞれ対となるものは認められなかった。しかしそれは、既に遺構で述べた通り、棺内(上)出土の鉸具(1)以外のすべてが礫塚の礫間より出土したことによる。つまり、調査目的の主旨より礫塚の保存を考え礫を完掘していないためであり、その対になるものは礫間に残る可能性がある。

鐙は鉄板に遺存する木質の木目方向から、削り抜きのものでなく木をたも状に曲げたものであることがわかる。また、この木心鐙の要所のみを留める鉄板は、鉄板自身も細く鉄鋏の径も細い^{註25}。一般的にこのような木心鐙は実用目的よりも装飾的要素が強いものであるとも^{註26}されている。しかし、それに対して鞍金具は、後輪の磯金具の鞍2点のみである。これ以外の覆輪や海金具等が見られないことから、現時点では白木の鞍が想定できる。つまり、今回の状況からは、白木の鞍を中心とした鞍部のみが出土したといえる。

(2) 第2主体部

第2主体部の出土遺物は、盗掘をまねがれた棺内よりそのすべてが出土した。その内訳は、鉄鏃40本、刀子8本、棺金具3点のほか、漆膜である。以下、個々について概要を報告する。なお、鉄鏃は各部の名称等を本稿では第19図のような部分名称で呼ぶこととしたい。鉄鏃・刀子はすべて図化した。遺物番号は基本的には任意である。ただし、鉄鏃の場合、取り上げた順に番号を付した。そのため、その番号はより若い番号の個体程木棺の東側板寄りであることを示す。

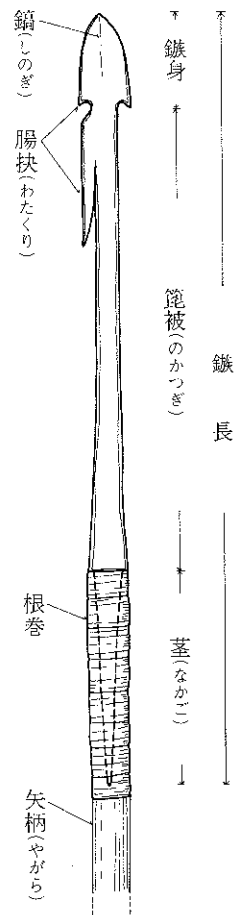
(武器：第19～21図)

鉄鏃(1～40) 鏃身と茎との間に長い筒被をもつ^{註27}長頸鏃と呼ばれるものである。総数40本すべてが同一型式のものである。

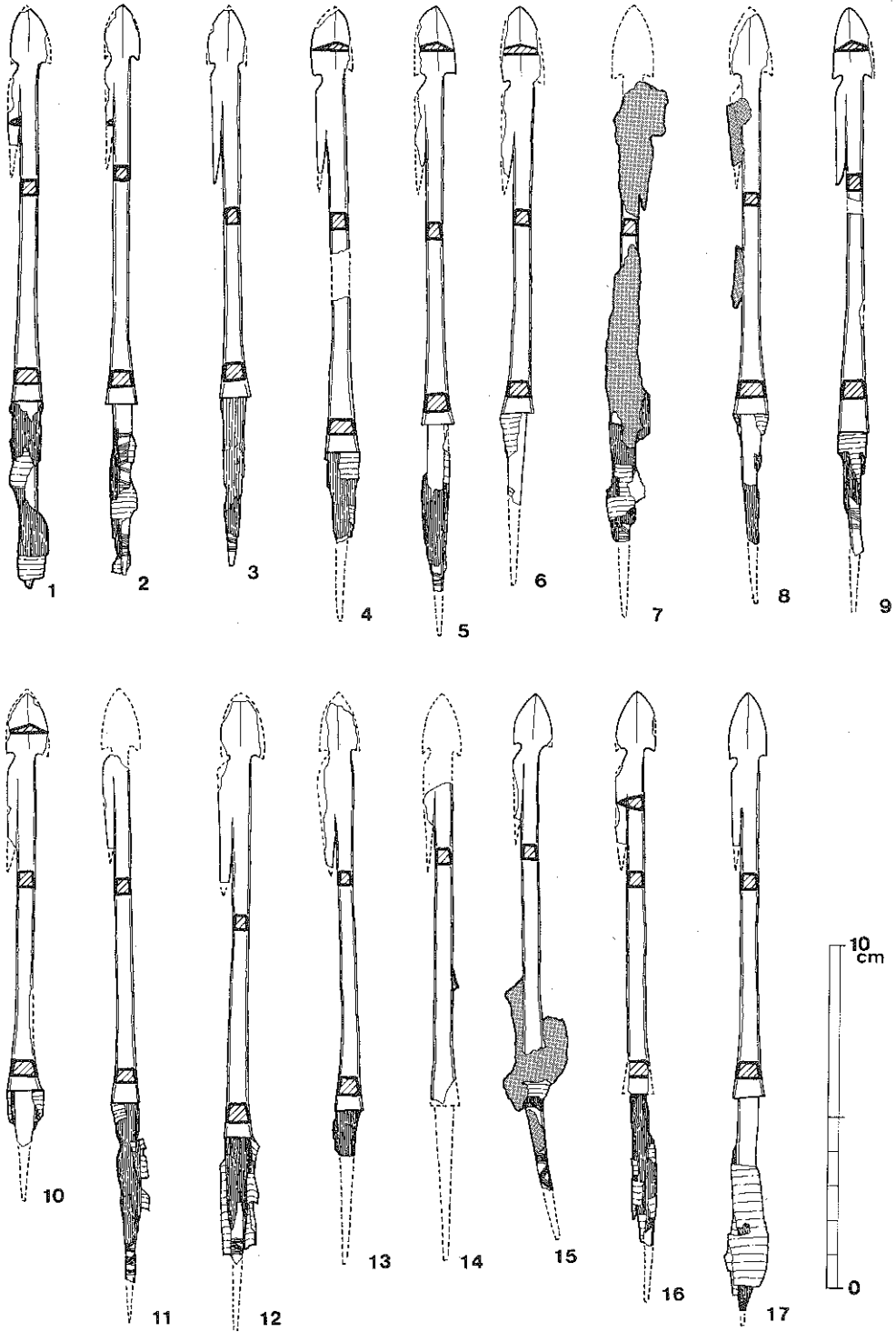
鏃身は小さな三角形を呈し腸袂をもつものである。腸袂は、鏃身及び筒被に認められる。筒被の方は、外側に鋭い刃をもつ。筒被は、茎との境い近くで厚みを増し境は段をつけ、茎側は細くなる。矢柄との結合の安定を図るため、茎には植物繊維が巻かれている、矢柄の^{註28}根巻きには桜と思われる樹皮を巻き、その上には赤漆が塗られている。鍛造製であるため若干の法量の違いはあるものの、比較的遺存状態の良いもので全長18cm程である。矢柄から外に出る部分の長さは、12cm程。鏃身の長さは2cm、幅は1cm程、厚さは鏃の部分で3mmを測る。筒被の腸袂は、長さ3cm前後で、一辺2mm程の断面三角形を呈す。筒被は中央部で一辺5mmの方形断面、基部で5×7mmの断面長方形をなす。茎は先細りするもので全長6cm程を測る。

既に遺構で述べた通り、鉄鏃は切先をそろえ3・4段程に積み重なった状況で出土した。最上段にあたるもののうちいくつかには、上面のほぼ全面に比較的厚手の繊維質が付着しているものが認められる。またその反対に、最下段の下面にあたるものには、板状の木質が付着しているものが見られる。以下、特徴のある数点について簡単に説明する。

2は、鉄鏃と矢柄との結合の安定を図るため、茎に巻かれる植物繊維が最も良く遺存するものである。残存長16.6cm。植物繊維が巻かれる範囲は、筒被と茎との境より1cm程の部分から3.5

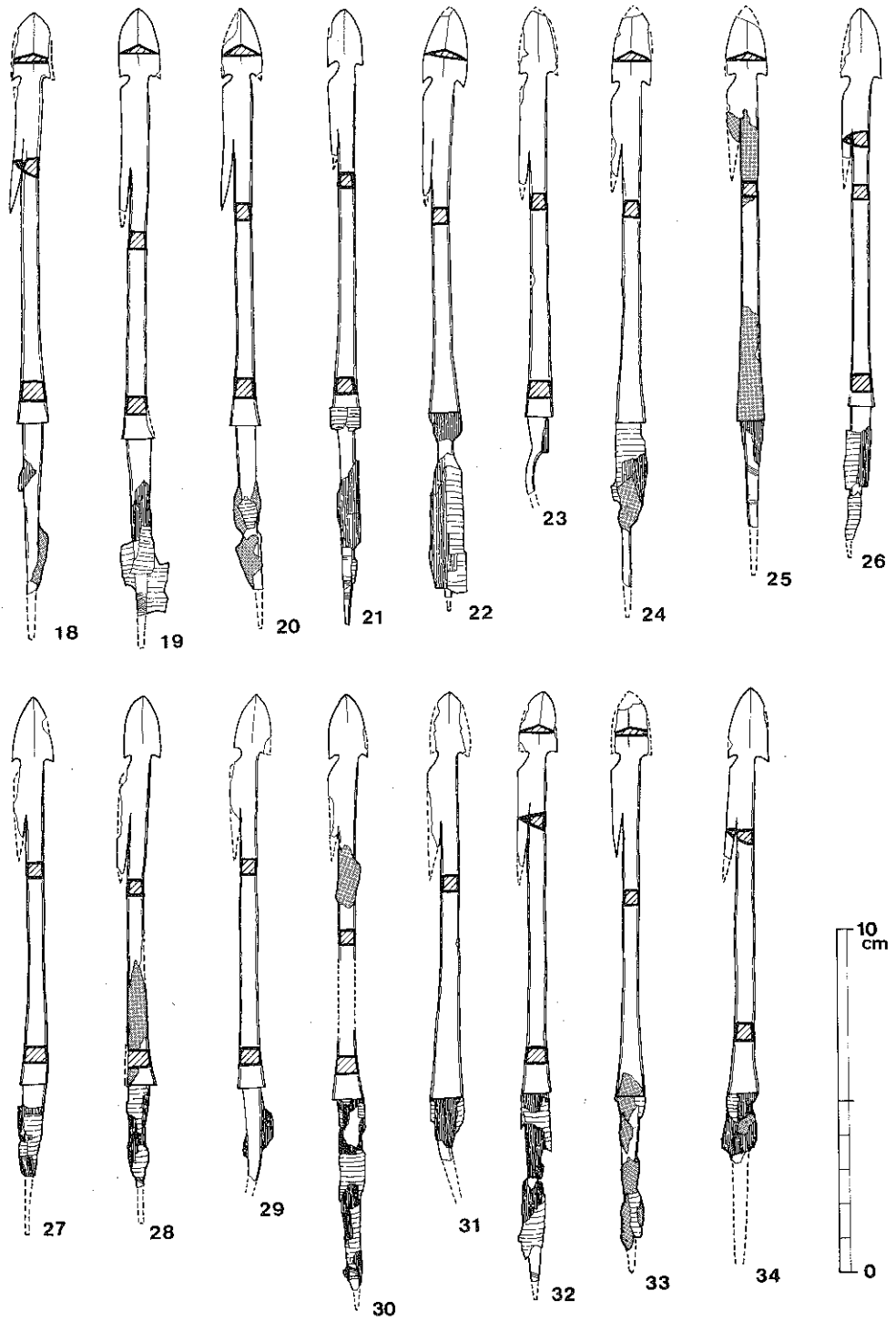


第18図 鏃の部分名称



第19図 第2主体部出土鉄鏃実測図 1 (アミ部分に布付着)

I. 瓦塚古墳発掘調査概要



第20図 第2主体部出土鉄鏃実測図 2 (アミ部分に布付着)

cm 程の範囲である。幅 3 mm 程の植物繊維を 2 重に巻く。筥被との境の方から茎の先端に向って角度をもって巻き、反転したのち逆の傾きをもって巻き上げる。時計回りである。

4 は、矢柄から出る部分全体に板状木質が付着したものである。取り上げ段階でいくらかは剥離したが、筥被中央部より鏃身に掛けて一連の木質が比較的良好的に残る。付着する木質は、扁平な板材でありかつ鉄鏃の片面のみに認められるこ

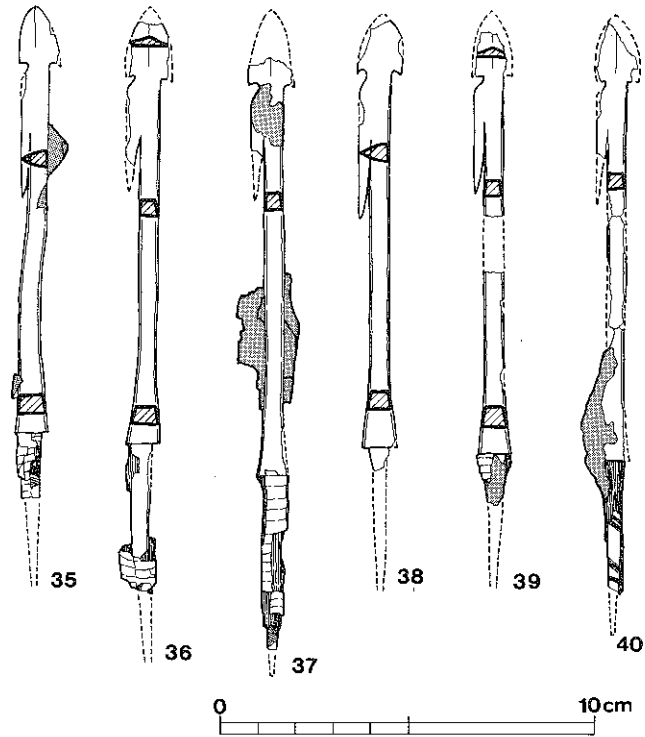
とから、木棺の底板の一部

である可能性が高い。剥離前で、長さ 10 cm、幅 1.5 cm、厚さ 0.3 cm 程の木片である。

7 は、矢柄から出る部分全体に植物繊維(布)が付着するものである。鏃身及び茎の先端を欠失。残存長 13.5 cm を測るものである。布は基本的には全体を覆うが、筥被の 1 面が見られることから、この個体のみを包み込むものでないことが理解される。また、布の表面の一部にはさらに木棺の底板材と思われる扁平な木片が付着している。この布については、出土状況からも鉄鏃全体を一包みしたもので、つまり矢筒もしくは矢立の一部と考えてよい。

22 は、矢柄の根巻部分が最も良く残っており、茎と矢柄との結合状態がよく観察できるものである。残存長 17.2 cm、根巻の残存長は 5.2 cm を測る。径は 1 cm 程である。錆ぶくれのため実数値よりいくらかは違うが、茎の先端から 1 cm の部分では、一辺 2 mm の茎に 0.5 mm 程に植物繊維が巻かれ、竹にさし込まれ、幅 8 mm、厚さ 5 mm 程の桜皮を巻き締める。竹は肉厚 2 mm、径 9 mm 程のものである。

また、鉄鏃群の茎より後のあたりには、矢柄の一部が長さ 20 cm 程にわたって土圧で押しつぶされた状態で検出された。これは鉄鏃の錆化に伴い、鉄鏃に近い部分がかろうじて遺存したものであると思われる。さらに、鉄鏃の下方 40 cm 程には漆膜状のものが検出できた。これを詳細に観察すると羽毛状であるため矢羽根と判断でき、矢の長さは約 60 cm 程と復元できた。



第21図 第2主体部出土鉄鏃実測図 3 (アミ部分に布付着)

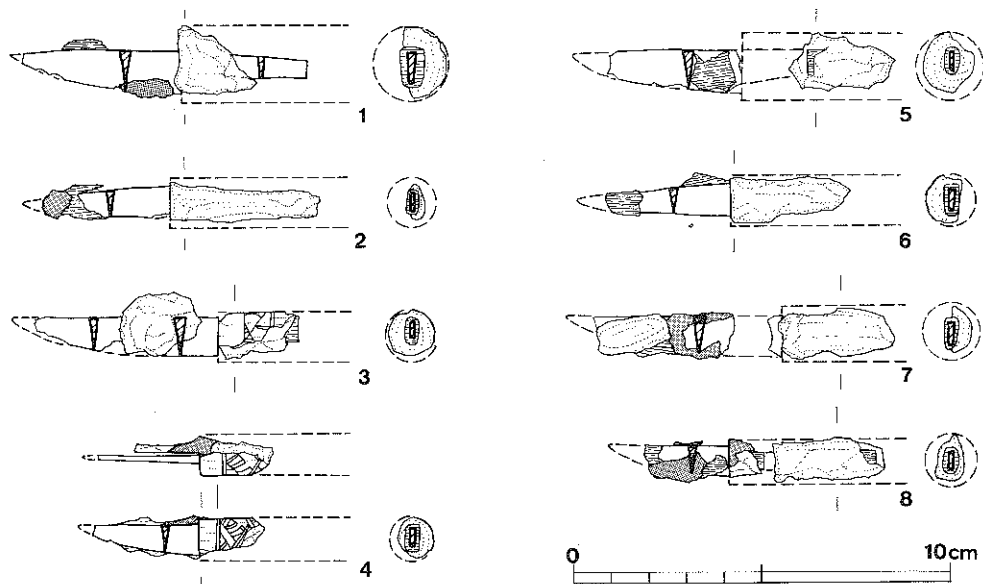
I. 瓦塚古墳発掘調査概要

(工 具：第22図)

刀子(1~8) 鹿角装の刀子が8本ある。いずれの刃部は鉄製である。形態からA類よりD類の4タイプに分かれる。基本的には各タイプとも2本で1組からなる。前述の通り、遺物番号は任意であるが、1~4については原位置出土のものである。他のものは取り上げの手違いから確認できなかった。以下、タイプ別に順次その概要を説明する。

A類(1・5) 刃幅の割には刃長が短くずんぐりした形態のもの。1は、刀先がわずかに欠失する以外はほぼ完形のものである。残存長7.5cm。刃部には布目痕跡を残す木質が遺存。鹿角装の把は把元の一部のみ遺存する。復元される把の径は2.1cm以上である。残刃長は4.2cm、関から2cmの部分で刃幅1.1cm、刃厚0.3cmを測る。茎は長さ3.3cm、関から2cmの部分での断面は台形であり、幅0.6cm、厚さは棟側が0.2cm、刃側は0.1cmを測る。5は1と同じタイプのもの、刃部と把部とは接合しない。残存長は刃部で3.6cm、把部で2.8cmを測る。刃部には木質が残る。木製の鞘である可能性が高い。

B類(2・6) 刃部が関から切先に向かって先細りする形態のもの。2は、切先がわずかに欠失する以外はほぼ完形のものである。残存長7.4cm。刃部には布目痕跡を残す木質が遺存する。鹿角装の把は全長4cm程残る。残刃長3.4cm、関から1.5cmの部分で刃幅0.7cm、刃厚0.2cmを測る。茎は鹿角のため残存長は不明。破断面で幅0.6cm、厚さ0.1cmを測る。断面長方形。6は2と同じタイプのもの。残存長6.5cm。刃部には布目痕跡を残す木質が遺存。鹿角装の把は3.1cm程残る。比較的遺存状況が良く、径は1.4cm程に復元できる。



第22図 第2主体部出土刀子実測図(アミ部分に布付着)

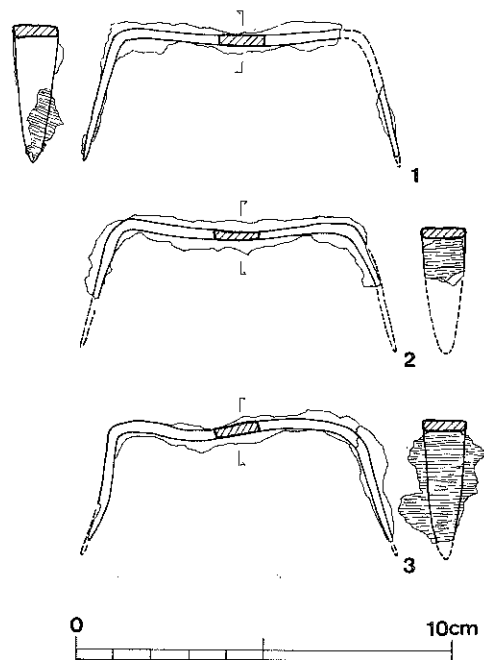
C類(3・7) 関が棟と刃の両側につく形態のもの。3は、切先及び茎の端をそれぞれ欠失するものである。残存長7.0cm。鞘・把とも鹿角装である。2cm程残る把の一部には、^{註29}直弧文の線刻が上塗りされた赤漆によって明瞭に残る。把の復元径は1.3cmを測る。残刃長4.9cm、関から1cmの部分で刃幅1cm、刃厚0.3cmを測る。茎は残存長2.2cm、破断面で幅0.4cm、厚さ0.1cmを測る長方形断面を呈する。7は3と同じタイプのもの。刃部と把部とは接合しない。残存長は刃部で3.6cm、把部で3.4cmを測る。刃部には布目痕跡がほぼ全面を覆う。その外側に木質と鹿角が付着する。この状況から7は木製鞘である可能性がある。茎部には片面にのみ鹿角が遺存する。把は全体的に遺存状況があまり良いものでないことから、直弧文の確認はできなかった。

D類(4・8) 4タイプの中で最も小型のもの。4は切先がわずかに欠失するもの。残存長4.5cm。刃部には布目痕跡を残す鹿角装鞘が遺存する。また、鞘は関を越え、把縁にもかかる。鹿角装の把は、把元部1.8cm程が遺存する。復元される把の径は1cm程である。また、把縁から0.5cmの部分から直弧文が、線刻で幅1.2cm程遺存する。文様の展開は把に対して垂直方向、つまり把元に文様帯として回る。残刃長2.7cm、関から1cmの部分で刃幅0.7cm、刃厚0.2cmを測る。8は4と同じタイプのもの。刃部と把部とは接合しない。残存長は刃部で3.2cmを測る。刃部には布目痕跡を残した木質が遺存する。鞘は木装である可能性がある。把にはわずかながら朱の痕跡がみられるが、線刻直弧痕跡かどうかは不明。

(棺金具：第23図)

以上のような副葬品のほか、棺金具が3点出土している。前述のとおり、木棺の東長側板の位置より金具の長辺を木棺外側に向けて2点出土した。この出土状況やその形態から、棺金具として使われたかすがい錠とした。1・2は原位置を保つもの。このほか鉄釘等の棺金具は認められない。錠(1～3)は3点とも同じ型式のものである。全長13.5cm程、幅1.2cm、厚0.3cmの断面長方形の鉄板の両端を先細りにつくり、それぞれ3.5cm程内側に折り曲げたものである。

1は一方の屈曲部が欠失したもの。脚内面には木棺の板材の木質が遺存する。



第23図 第2主体部出土棺金具実測図

1. 瓦塚古墳発掘調査概要

木目方向は、鏃の脚部中軸方向に対してやや斜方向である。残存長6.8cm。2は、両脚部の先端が欠失したもの。内面全体に木質が遺存する。木目方向は、鏃の脚部中軸方向に対して横方向である。残存長は7.6cmを測る。3は、両脚端部がわずかに欠失するものである。一方の脚部内外面に木質が遺存する。木目方向は、2と同様に横方向。残存長7.7cmを測る。

(小 結)

以上、第2主体部より出土した遺物の概要である。ここでは再度、これら遺物の整理を行い若干の説明を加えることとする。

鉄鏃は総数40本が一括で出土し、それらはすべて同一型式の長頸鏃であった。これらは、木棺長側板に接近して幅20数cm間に3～4段に重なっていた。鉄鏃の上面に認められた布は、下面の木棺の底板の木質と鉄鏃との間にも認められ、明らかに鉄鏃全体を一包みしたものである可能性が高い。そして、この布については、矢を収納していた矢筒または、矢立の一部と考えた。矢筒とは、鏃を上にして矢の束を携帯した鞆であり、矢立とは、鞆とは逆に鏃を下にして納めた胡籥^{註30}を指す。今回の場合、副葬された位置関係や鉄鏃などの観察から、胡籥である可能性が高いと想定した。それは、矢柄の先端側、からくも盗掘からまぬがれた部分から出土した漆膜状のものが、矢羽部分であろうと推察したからである。この漆膜状のものは、平面的に塗られた一重の漆膜ではなく、一枚一枚が幾重にも重なったものである。また、遺存する繊維方向が矢柄方向と一致し、さらに羽毛らしい痕跡も認められる。速断はできないが、このような状況からは、黒漆塗りの矢柄の矢羽部分が腐植し表面の黒漆だけが残ったと見てよいだろう。とすれば、積極的に胡籥の存在を示すものはないが、この漆膜部分には全く布や皮革の付着が認められず、反対に鏃の方は布によって一包みされていたという状況から、矢の矢羽を出して収納する胡籥を想定してよいと考えた。また、胡籥とすれば所謂胡籥金具が一片も見られないことから、有機質のもので構成された胡籥であったと想定できる。胡籥それ自体の法量については、現状のなかではよくわからない。

刀子はいずれも鹿角製の装具をもつものであった。基本的には、木製の鞘と鹿角製の把からなるものが2本1組となり、4タイプ計8本が認められた。しかし、そのうち2本は鹿角製の把と鞘を装具とし、把元外周面に文様帯をもつもので、直弧文の線刻が施されていた。遺存状態は必ずしも良くないが、上塗りされた朱痕跡によってかろうじて文様構成が確認できる。狭義の直弧文の一単位図形に満たないため文様展開は復元できないが、4については単位図形の所謂連結部にあたる部分であると考えられる^{註31}。3・4以外のものは、全体に遺存状態が良くないため直弧文の有無については断定できないが、前述のとおり3・4は鞘・把とも鹿角装具であるのに対して、それ以外は木製の鞘と鹿角製の把であることから、この2者だけに直弧文が施されていた可能性が高い。

(3) 盗掘墳

盗掘墳からは、玉類、玉杖形金銅製品、金銅片、鉄片、水銀朱粒などが出土している。すでのべたように、これらは第1主体部の遺物(副葬品)である可能性が高いものである。

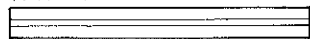
玉類 玉類は盗掘墳の東部付近より比較的まとまって出土した。種類及び個数は、硬玉勾玉1個、硬玉小玉1個、碧玉管玉7個、ガラス2色小玉4個、ガラス小玉670個である。

硬玉勾玉(1)は、全長1.5cm程の小型品で、頭部に3条の条痕をもつ丁字頭である。頭部を貫通する孔は両面よりの穿孔であり、孔内に若干の赤色顔料が付着していた。硬玉小玉(2)は、径0.7cm程のもので、孔は片面穿孔である。両者とも澄んだ淡緑色を呈している。

碧玉管玉(3~9)は、径0.2~0.4cm、全長1~2cm程の細身管玉である。孔は、片面穿孔と両面穿孔とが見られる。色は淡い空色を呈している。

ガラス2色小玉(10~13)は、径1cm程のもので、孔の軸にそってまず黄色ガラスが、その外側に淡青色ガラスが使われているものである。

管切り法



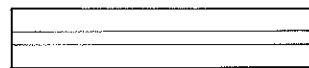
(切断)



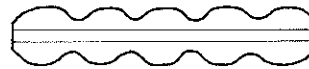
(加熱)



連玉法



(成形)



(切断)



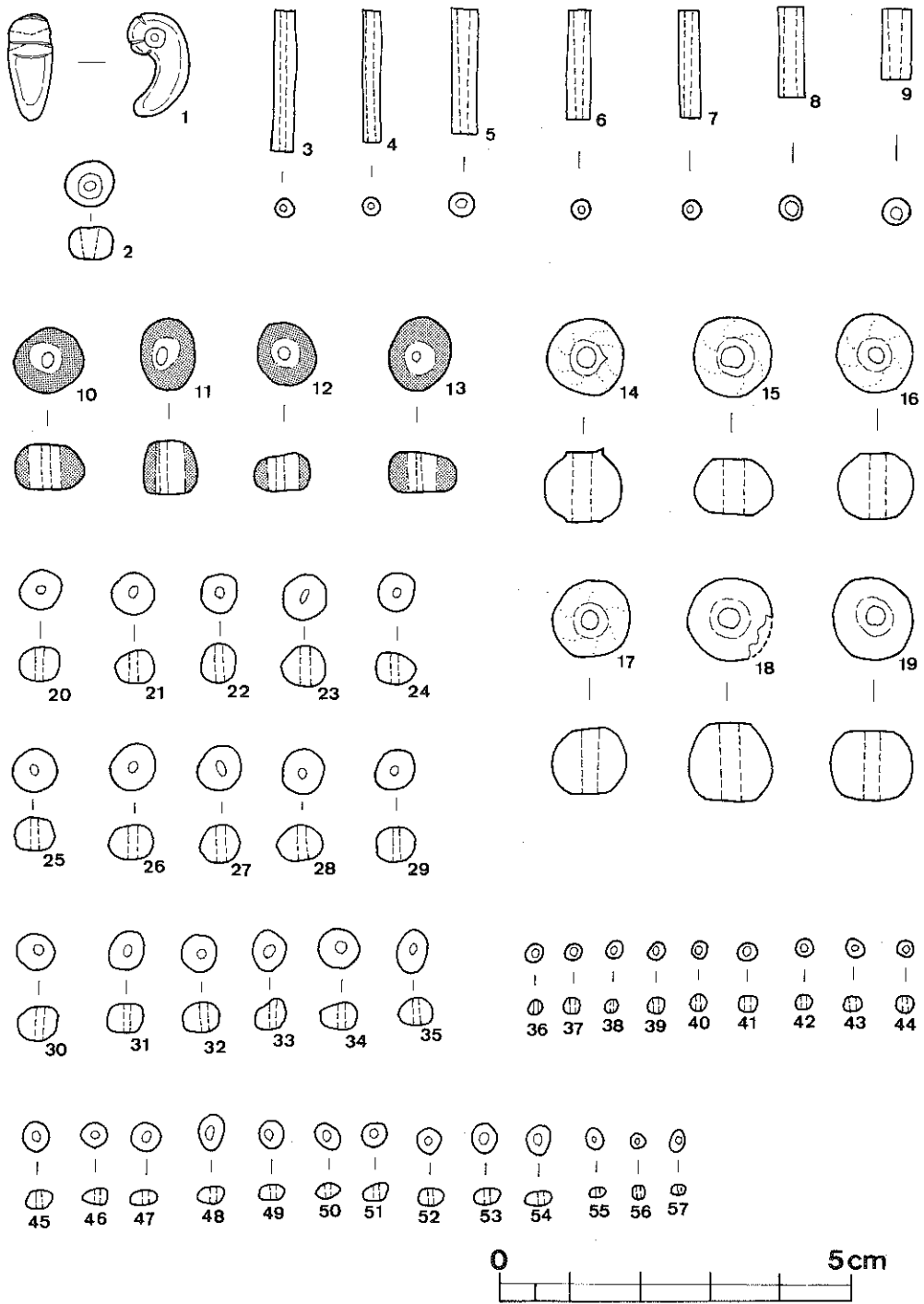
第24図 小玉製作の2種

ガラス小玉は、玉類中の圧倒的多数を占めるが、色・大きさによって5種類に分けることができる。まず、最も大きいもの(14~19)は、径1.1cm程あり濃紺色を呈する。次に大きいものは、径0.6cm程であり、色調は空色を呈するもの(20~29)と淡青色を呈するもの(30~35)とに分けることができる。小型のものは、径0.2~0.4cm程であり、大きさにややばらつきがある。色調は濃紺色を呈するもの(36~44)と黄緑色を呈するもの(45~57)の2種がある。

ガラス小玉の大半とガラス2色小玉は、管切り法註32により成形されている。管切り法とは、中空の棒状ガラス管を裁断し、後に加熱して破断面を平滑にするものである。この方法による成形では、小玉中の気泡が孔と平行して細長く伸びる特徴がある。最初の管作成時にガラス塊より管として引き伸ばされるため、気泡が細長く伸びるのである。出土したガラス小玉には、この気泡が良く観察できるのである。特にガラス2色小玉と中型の小玉に顕著に認められる。

このような管切り法と異なる成形法が復元できるものに14・15・16がある。これらの小玉の孔周囲を観察すると、割れたままの新鮮面が孔周囲に幅0.1cm程でめぐっている事を見

I. 瓦塚古墳発掘調査概要



第25図 玉類実測図

(硬玉勾玉：1、硬玉小玉：2、碧玉管玉：3～9、ガラス2色小玉：10～13、ガラス小玉：14～57)

い出すことができる。通常の管切り法では、管裁断後の加熱によって、この裁断面は全く平滑になるはずである。しかし、14・15・16のように玉として成形されているものに小さな裁断面が新鮮なまま残るといことは、すなわち、玉の概ねの成形は裁断前に行なわれているという事になる。これは、管の熱いうち、もしくは管を加熱して連玉状に成形、そして裁断したと考えられるのである。この方法を連玉法と呼んでおきたい。17～19はこの連玉法によるか否かは不明である。

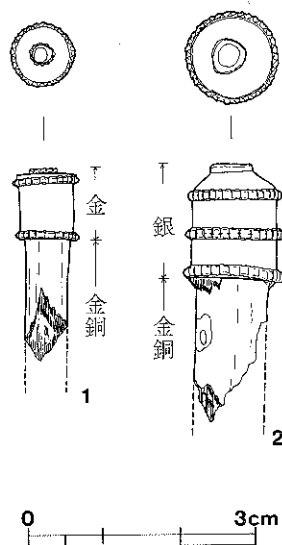
玉杖形金銅製品 金銅製の軸の端部に金製及び銀製の頭部を付けた小型の金具がそれぞれ1個体ずつ出土している。これらは、後述するように姫路市宮山古墳出土例や東京国立博物館収蔵例と同形の小型の杖形金銅製品の断片である。現在、この遺物については名称がないため、本報告では玉杖形金銅製品という仮称を与えておくこととしたい。

頭部が金製のもの(1)は、現存長2.5cmを測り、端部に付く円筒形の頭部は径0.9cm、長さ0.9cm程の大きさである。頭部の上・下端にはキザミを細く施した凸帯が付されている。凸帯も金製である。頭部頂は平坦で、中央部に径0.3cmのわずかな突出が付されている。突出周囲にもキザミを施す。突出内は孔となっており、その中に径0.2cm程の金製の管が入っている。軸は、径0.6cm程の中空金銅製で、頭部に装着されている。軸表面には金箔が一部に残っている。軸の中には有機質かと思われるものが付着している。

頭部が銀製のもの(2)は、現存長3.5cmを測り、端部に付く円筒形の頭部の大きさは、径1.1cm、長さ1.5cm程の大きさである。頭部頂はやや盛り上っており、その中心に径0.6cmの突出をもつ。突出内は孔となっている。頭部の上・下端及び中程にキザミを施した凸帯が付されている。軸は径1cmを測る金銅製で、一部に金箔の遺存が看取できる。軸は中空であり、中に有機質状のもの付着が認められる。また、この有機質の中には径0.1cmの金製の細管が3本認められる。この金製細管が軸及び頭部とどのような関係にあるのかは不明。

これらの玉杖形金銅製品は出土例が極めて少なくその使用方法等について良くわからない。おそらくは大陸からの輸入品と考えられる。

その他 その他の遺物として、金銅片・金箔片・鉄片等が若干出土しているが、いづれも細片でありもとの形状を推測することは不可能である。また、赤色顔料(水銀朱)の小粒も小型シャーレ1個分程出土した。



第26図 玉杖形金銅製品実測図

I. 瓦塚古墳発掘調査概要

(4) 埴輪

今回の調査で出土した埴輪には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。数量はコンテナで7箱程である。今回報告するものは、C・F・Gトレンチで出土した埴輪列中の9個体を中心とし、他は適宜その他の所で出土したものを加えるとする。尚、個々の埴輪の特徴は観察表に譲り、ここでは総括的に述べていく。また、各部分、調整法等の名称は、川西宏幸氏の「円筒埴輪^{註33}」を基本とした。

C・F・Gトレンチで検出した埴輪には、底径、13~20cmの小型品、23~26cmの大型品の2種類がある。このうちGトレンチで出土した大型品(8)は、それに接して散乱する同一個体の破片より朝顔形埴輪と推定できた。このことより、大型品を朝顔形埴輪、小型品を円筒埴輪と理解する。

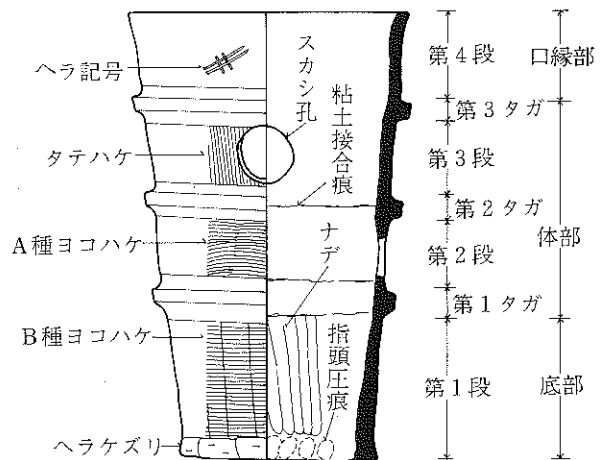
(円筒埴輪：第28・30図)

円筒埴輪は埴輪列中の小型品である。いずれも埴輪据え付け溝、段築成形土内に埋設される底部および2段目までの残存である。本来地上に露出する部分は、長年の風雨等で破損し接合できるものはない。しかし、他のトレンチでいくらかの口縁部、スカシ孔部の破片を検出することができたので、各部分の形態はある程度わかる。

形態と法量 形態は、底径の比較的小さい(1・4・5)は2段目に向けてゆるやかに外傾する。底部のやや大きい(2・3)は、ほぼ垂直に上方に向う。

法量は底径が14~20cm、第1タガ部直径が17~22cm、底部高が9~12cmの間に、後に述べる口縁部径が24~30cmの間にそれぞれおさまる。

器高、段数等は現状では確定できない。しかし、^{註34} 鴨谷東1号埴輪出土円筒埴輪は、底径、口径の平均が、それぞれ17.8cmと27.6cmを計り、瓦塚古墳出土の円筒埴輪にほぼ等しい。また器高は平均41.3cm タガ3条4段を成す。これを参考とすると瓦塚古墳の円筒埴輪も、同様にタガ3条4段、器高40cm前後、全体としては、底部より口縁部にかけてゆるやかに外反する形態を持つことが想定される。



第27図 円筒埴輪部分名称と調整

口縁部 口縁部は、B・Eトレ

ンチで数点検出することができた。このうち形態のよくわかる4点を図化した。これらは、その断面形態と端部の処理により2系統3種に分類できる。

a₁、直線的に立ち上がり端部が内傾する(10)。

a₂、直線的に立ち上がり端部が外傾する(11・12)。

b、やや外反し端部外面に低い突帯を製作する(13)。

a₁、a₂、は総じて端部をナデにより上方にややつまみ上げる傾向がある。そのため端面が凹面を成し、内傾、外傾するが、技法的には同じと考える。

bは突帯を製作する点でのaの技法とは根本的に異なる。このことより、a、b間の相違は、単に一工人の技法の違いと見るより、工人単位間の様式の違い註35と見る方が良いかもしれない。

タガ タガは接合方法と断面形態により、概ね次の2種類に分類できる。

A、接合時に上下を強くナデ、突出度の高い台形を呈するもの(5・9)。

B、接合時のナデが不均一で、突出度が低く不整形なもの(1・2・3)。

このうちAは接合方法、断面形態共に丁寧に製作されており、均一に台形を呈している。Bは接合方法が粗雑で断面形態は同一のタガ内で三角形、円形、台形と不均一である。

これらA・B両種内で同一の製作工人と分かるものはない。ただ、このA・Bと相違が工人単位間の相違に該当する可能性は残す。尚、タガは内外面調整終了後に接合されている。これは、タガ接合時のナデがハケメ、ナデの上より施されていることより理解できる。

スカシ孔 スカシ孔はB・Eトレンチで出土した破片の中に数点認められる(14~16)。これらは円形、あるいは楕円形である。また、土地所有者の中村健二氏が発見された埴輪(C7)は、横長の楕円形であったことが、証言より明らかである。概ね3段目に配されたものであろう。これは2段目の遺存する(2)でスカシ孔が認められないことより理解できる。

成形 成形は最初4~7cm幅の粘土紐により、基礎部分を作る。このうち(1・5)は粘土紐の長さが足りず粘土を補充している。これら基礎の上に2~4cm幅の粘土紐を積み上げていく。確認できるもので底部で4~5段積み上げている。尚、これら遺存部分内では粘土紐積み上げ休止に伴う、いわゆる「乾燥単位面」註36は認められない。

底部には径3~5mm程の棒状圧痕が残る(1・2・5)がある。この圧痕は円筒を縦貫せず底面に対し不定方向に残る。(1)ではこの圧痕部分が大きく歪んでおり、乾燥不十分な段階でこの圧痕部分を上方へ引き上げたことが窺える。おそらく、埴輪を製作台より取りはずしやすくする工夫の跡と考える。

内面調整 内面調整は底部より5本指によってナデ上げる。(4)は右上り、他は左上りである。これは、(4)は左きき、その他は右ききの工人を示唆するのかもしれない。これらナ

1. 瓦塚古墳発掘調査概要

デは高さ10cmを単位として器壁を1周し、上部も同様のことを繰り返す。そのため上下ナデに重複部分が認められる。これらナデを施すもののうち(2)はタテハケの後ナデを施す。また、(1・5)はタガ接合時の横ナデが内面に残る。口縁部内面は、横ナデのもの(10・13)粗いヨコハケを施すもの(11・12)がある。

外面調整 外面調整は、普通タガ接合前を一次調整、タガ接合後を二次調整と呼ぶ。しかし、瓦塚古墳の埴輪は、タガは全調整終了後に接合されている。ここでは成形に準ずるものを一次調整、整形とするものを二次調整としたい。

一次調整は全個体ともタテハケを施す。二次調整により次の3種に分類できる。

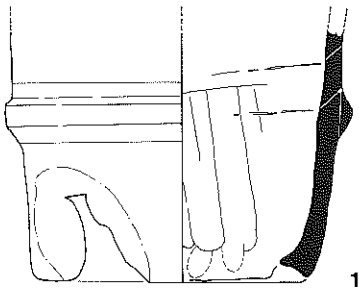
- I、ヨコハケを施すもの(2・3)。
- II、指により上方ヘナデるもの(1・5)。
- III、二次調整を省略するもの(4・9)。

Iのヨコハケは川西氏の言うB種ヨコハケである。これは、工具が器壁を一度も離れず一周する連続的なもので、一周する間工具は器壁上で何度も静止する。この静止した際の工具木口痕が縦の条痕として残るものである。(2)は右回りに施し2～3cm間隔で条痕が残る。(3)は、一見ハケメ同志が重複するA種ヨコハケに見えるが、施文が稚拙で静止条痕の不明瞭なB種ヨコハケである。IIは底部全体を5本指によってナデる。IIIは二次調整を省略するもので、(4)は右上りのタテハケを施す。(9)は左上りのタテハケの後、底部中央を一周ナデる。尚、ヨコハケ、タテハケは板状工具の木口を器壁に押しあて施すものとされるが、個々のハケメは精粗がそれぞれ異なる。一工人一工具の使用を前提とすれば、同一工人による製作と分かる埴輪は、今回は認められない。また、ナデによるものも上述のタガの形態により別工人の製作であると思われる。

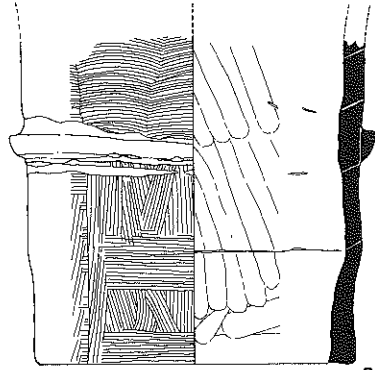
底部調整 底部調整について川西氏は、「ある時期を境に、基部の上から口縁部まで粘土紐を一処に巻きあげるようになる。そのため軟弱な状態の底部に急激に自重が加わり、底部が変形しやすくなる。そこで、変形を調整する必要がでてくる。」とされている。川西氏はこの時期を氏の編年案のV期に比定している。

今回出土した円筒埴輪のうち、明らかに底部調整と考えられるものは(4)に存在する。これは底部下4cmを内面は左方向、外面は上から底面に向かってヘラケズリを施している。その他(2・9)は底部調整を強く意識していることが窺える。(2)は底部下3cm程の外面にのみヨコハケを強く施す。(9)は底部中央を板状工具で一周している。これらは外側に膨れた部分をおさえる目的で施されたものとする。

胎土 胎土は、全体的に砂粒の混入の少ない良質の粘土を使用する。肉眼で確認できる砂粒は0.5～1mm大のチャートを中心に、石英、長石等を若干含む。



1

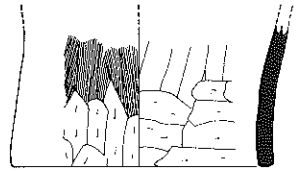


3

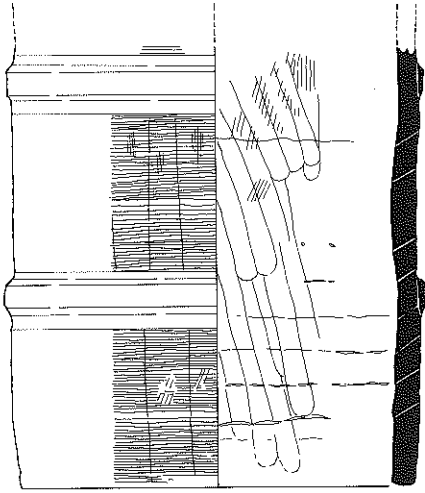


压痕

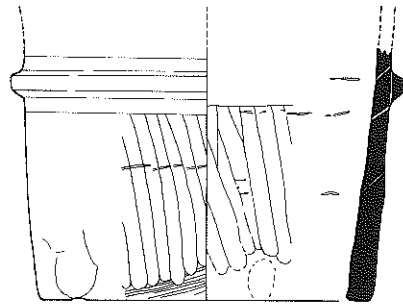
压痕



4



2



5



粘土紐接合痕

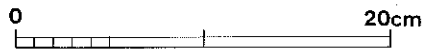
压痕



压痕

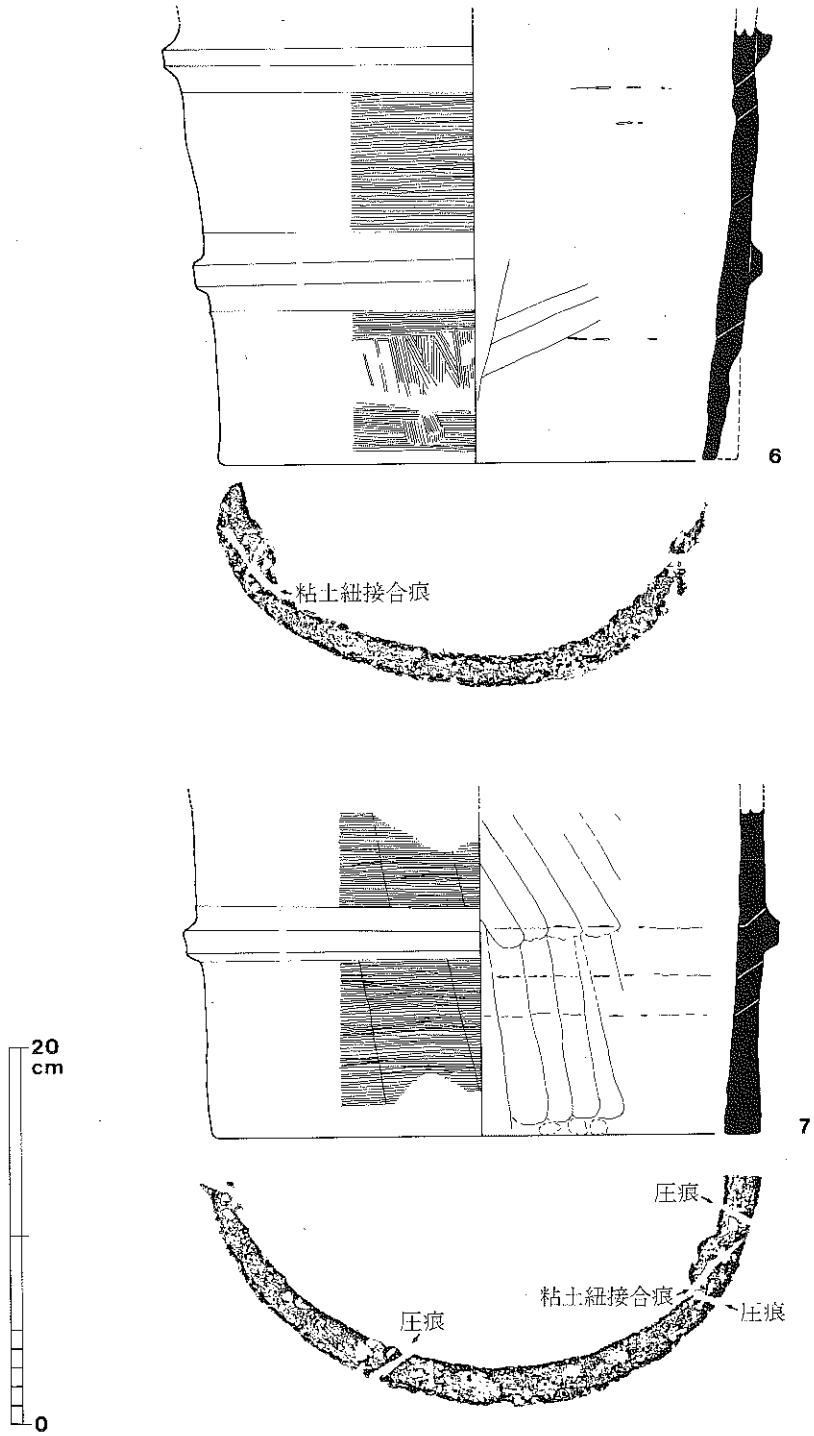
粘土紐接合痕

压痕

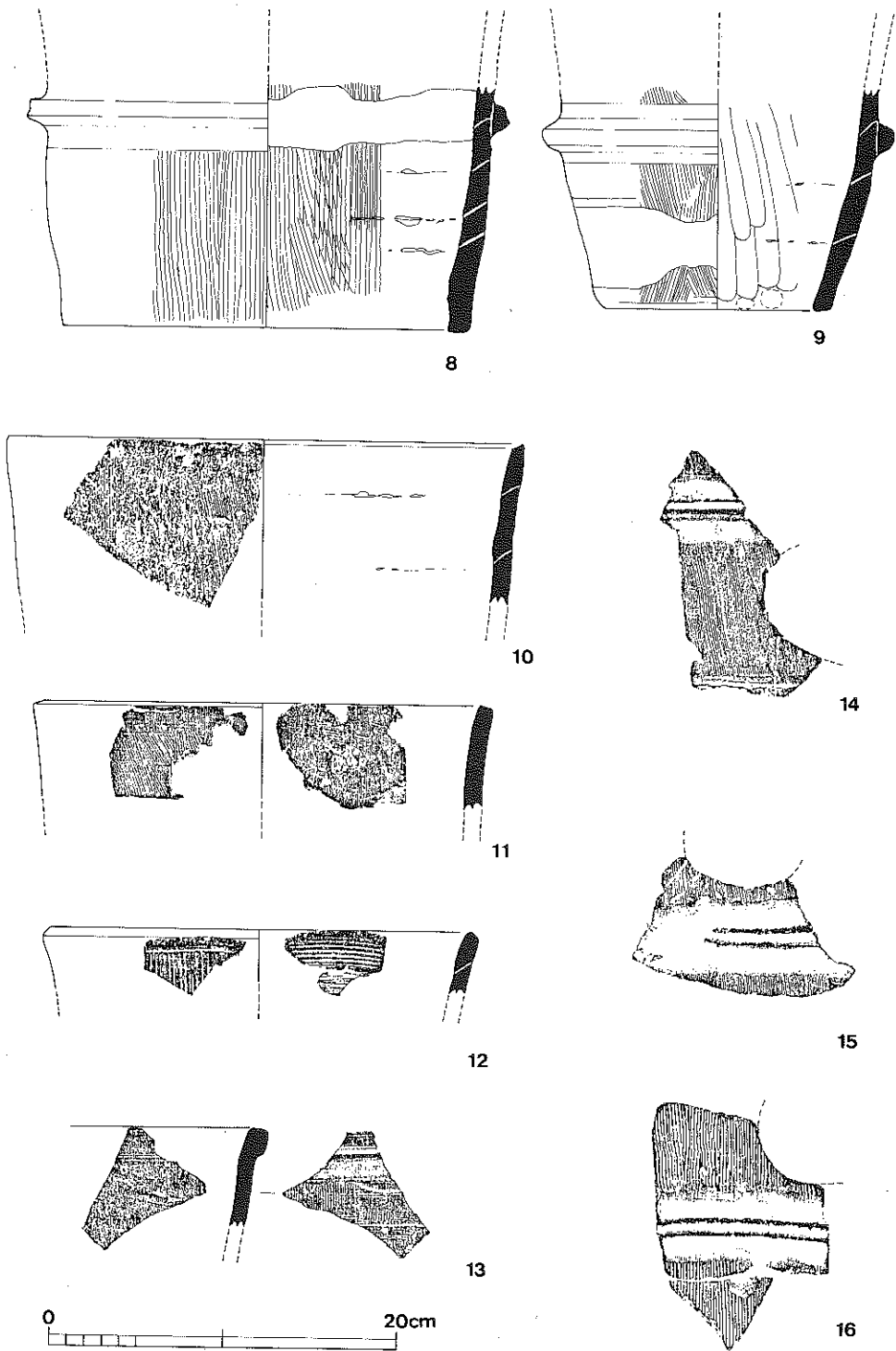


第28图 埴輪実測图 1 (円筒埴輪底部)

I. 瓦塚古墳発掘調査概要

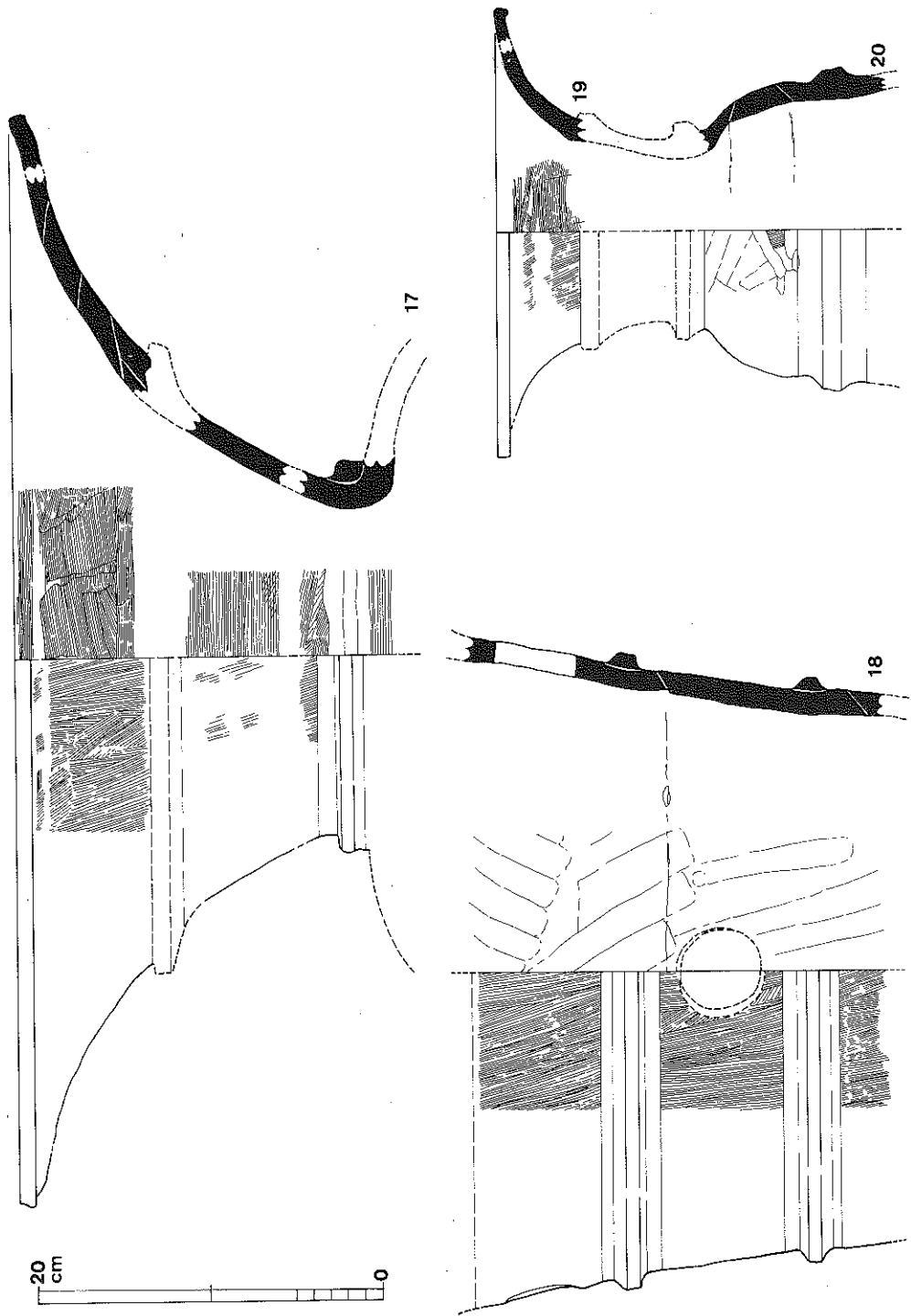


第29図 埴輪実測図 2 (朝顔形埴輪底部)



第30図 埴輪実測図 3 (朝顔形埴輪底部：8、円筒埴輪底部：9、円筒埴輪口縁部：10~13、スカシ孔：14~16)

I. 瓦塚古墳発掘調査概要



第31図 埴輪実測図 4 (朝顔形埴輪口縁部: 17・20、朝顔形埴輪体部: 18)

焼成と色調 焼成は比較的良く硬質のもの(2・5)と不良で軟質のもの(1・9)がある。硬質の(2・3・5)は淡橙色、(4)は赤橙色。軟質の(1・9)は黄橙色を呈す。いずれも黒斑はない。また、これらとは別に、流土中より須恵質で青灰色を呈するものも若干ながら検出されている。

(朝顔形埴輪：第29～31図)

朝顔形埴輪は、埴輪列中の大型品を中心とするものである。遺存状態は円筒埴輪同様、底部、および2段目までである。口縁部、頸部、および体部はEトレンチで検出できた。

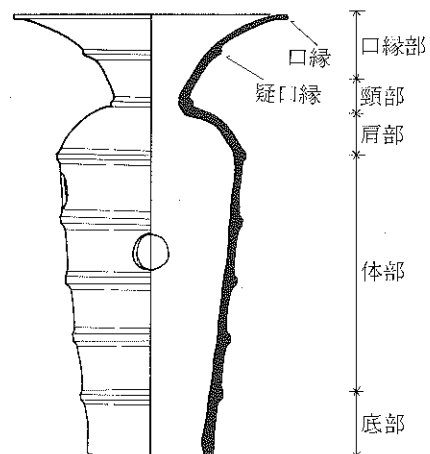
形態と法量 底部の基本的形態は、2段目に向かってほぼ垂直に伸びてゆく。底部径は23～26cm、第1タガ部直径が26～30cm、底部高が10～12cmの間に収まる。Eトレンチで出土した体部(18)は最小幅径32cm、最大幅径38.8cmである。同じくEトレンチで出土した頸部、口縁部(17)は径22.7cmの頸部の上に口径62.8cmの大きく外反する口縁部をのせる。頸部より口縁部までの高さは概ね20cmである。これらの法量より全形を窺うとすれば、体部(18)は、第3、第4段目、あるいは第4、第5段目に該当すると考えられる。器高は現状では確定できないが、円筒埴輪に比べ、法量的にかなり大きくなることがわかる。

また、これらとは別にBトレンチで出土した朝顔形埴輪(19・20)は口径25.9cm、体部最上段部径18.4cmと、他のものと比べ非常に小さい。このことから、法量的に二形態認められる。

口縁部 口縁部は、口縁と疑口縁とから成る、いわゆる二重口縁の形態を持つ。疑口縁は、頸部より、やや立ち上がり気味に外反する。先端は(17)と同一個体では確認できなかったが、他の出土品を参考にすると、先端上面は、その上に口縁を成形するため広く平坦にし、外面に低いタガを接合する。口縁(17)は疑口縁から、より大きく外反させる。端部はヨコナデにより下方にやや肥厚させる。(19)は全体的に、やや立ち上がり気味で外反し、端部はナデにより下方に肥厚する。

タガ タガはすべて円筒埴輪で述べたA類に属す。しかし、(7・8)は断面形態が一貫してM字形を呈する。このため(7・8)をA₂として分類することも可能である。

スカシ スカシ孔は(18)に認められる円筒埴輪同様、円形、あるいは楕円形である。2段目の遺存する(6)で認められないことより、3、4段目か、4、5段目の各段に配されていたも



第32図 朝顔形埴輪部分名称

I. 瓦塚古墳発掘調査概要

のと考える。

成形 成形は、最初5～7cm幅の粘土紐を2～3本継ぎ足し円筒形の基礎を作成し、その上に2～3cm幅の粘土紐を積み上げている。乾燥単位面は認められない。底面には円筒埴輪同様、径3～5mm程の棒状圧痕が残る(7)がある。口縁部(17)は疑口縁端部上面を受けとして5本の粘土紐を大きく外反させながら積み上げる。疑口縁外面には低いタガを貼り付ける。頸部(17)は内側に如意形に屈曲し外面凹部に粘土紐を接合しタガとする。(20)に見られる肩部は円筒最上部より粘土紐を内傾させながら積み上げ、壺肩部のように丸味を持たせ頸部に接続する。

内面調整 内面調整は(8)のみがタテハケ、他はナデである。ナデは粘土紐積み上げ後指によってていねいにナデる。(6)は剥離のため明確でないが、左上りのナデ、一部に右上りのナデがある。(7・18)は左上りのナデを高さ10cm程を単位として施すものである。(8)は左上りの粗いタテハケを施し、タガの裏面にタガ接合時のヨコナデがハケメの上より施される。これらナデ、ハケメの方向より右ききの工人が想定される。口縁部、頸部(17)はハケメ同志が重複するA種ヨコハケである。頸部最小径部分のみ右方向のナデを施す。(19)は(17)同様A種ヨコハケを施すが部分的にB種ヨコハケとなる。

外面調整 外面調整はいずれも円筒埴輪で述べた分類に準ずる。(6・7)はI類、(8・18)はIII類に属す。(7)は2～3cm間隔で静止条痕の残るB種のヨコハケである。(6)は風化が激しく一見静止条痕が不明瞭であるがB種ヨコハケである。(8・18)は左上りのタテハケを施す。口縁部、頸部(17・19)はともに左上りのタテハケを施す。肩部(20)はタテハケの後、不定方向のナデを施す。個体ごとのハケメ精粗はそれぞれ異なり、同一のものは認められない。

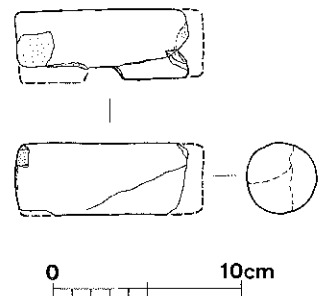
底部調整 底部調整は(7)に認められる。これは底部下4cm程を板状工具でナデるものである。基底内面に指頭圧痕が多く残ることより、親指を内面にあてがい、他の指で底部と工具を狭み施したものと考えられる。

胎土 胎土は円筒埴輪同様、いずれも比較的精良な粘土を使用する。肉眼で確認できる胎土中の砂粒は、0.5～1mm大のチャートを中心に石英、長石等を若干含む。

焼成 焼成は、比較的良く硬質のもの(7・18・19・20)、不良で軟質のもの(6・8)がある。(7・18)は淡橙色、(6・8・19・20)は黄橙色を呈す。

(形象埴輪：第33図)

形象埴輪は数点出土している。しかし、いずれも細片化



第33図 形象埴輪実測図

しており全形を窺えるものはない。このうち(第33図)は直径4cm、長さ9cm程の円柱状を呈し中央は逆台形状に凹む。成形は、まず、2本の粘土紐により半円柱状に作り、中央部を残し両端に粘土を補充し円柱形に整える。焼成は比較的良く、淡橙色を呈す。

この形象埴輪が如何なるものであったかは現状では確認できない。しかし、今回図化していない破片のなかには家形埴輪の壁部らしきものもあり、これは家形埴輪の屋根上にある堅魚木の可能性を示唆する。

(小 結)

以上、瓦塚古墳の埴輪について分析してきた。ここでは製作工人、時期についてまとめてみたい。

製作工人は、一般的に形態、成形、調整方法、あるいはハケメの精粗等が類似する埴輪については、同一工具を用いる同一工人の製作が想定される。

今回出土した埴輪は、各部分においては、ある程度分類はできた。しかし、それを、個々の埴輪の組み合わせで見た場合、埴輪同志に共通点は見られない。このことは、個々の埴輪製作がすべて別工人であることを示唆する。ただ、ここで、注目しておきたいのは、各部分(口縁部、タガ)の分類でわかるように、一定のまとまりを持つことである。これら分類が即、各工人単位間の様式の相違に該当するとは決しがたいが、その可能性はあると考える。

次に製作時期について考える。埴輪は、成形、調整方法、タガ、スカシ孔の形態、焼成方法等によりその変遷をたどれる。この変遷を川西宏幸氏は5期に編年し、「円筒埴輪総論」に集大成されている。今回は、この編年案に則し瓦塚古墳の埴輪について述べる。

瓦塚古墳の埴輪は一次調整タテハケ、二次調整はB種ヨコハケ、ナデ、省略等がある。スカシ孔は円形、または楕円形。黒斑はない。これらのことを総合して考えると、川西編年IV期の特徴を有するものが多い。しかし、タガを最終段階に接合する、二次調整を省略する、底部調整を有するなど、V期の特徴に通ずる個体もあり、両者が併存

第1表 円筒埴輪編年表(川西編年Ⅲ～Ⅴ期)

期	年代	外面調整		内面調整	タガ	スカシ	黒斑	底部調整	備考
		1次	2次						
Ⅲ	5C前	タテハケ	B種ヨコハケ	ハケメナデ	台形	○まれに ○	有	無	
Ⅳ	5C中、後	タテハケ	B種ヨコハケ省略	ハケメナデ	台形 不整形	○	無	無	
Ⅴ	6C	タテハケ	省略	ナデ 口縁ヨコハケ	不整形	○	無	有	乾燥単位なし

する。この状況から考えて当古墳の埴輪は、IV期からV期への過渡期に位置するものと理解できる。実年代としては、川西氏は、IV期を5世紀中葉から後半、V期を6世紀以降とされ

1. 瓦塚古墳発掘調査概要

ている。

以上、瓦塚古墳の埴輪について述べてきた。しかし、それらのほとんどが部分的な観察であり多くの不安を残す。今後の資料増加を待って詳細な検討が必要であろう。

(5) その他の遺物

墳丘流土内より多くの埴輪片と共に、若干の土器類が出土している。内訳は、土師器皿、須恵器杯、高杯、甕、不明品等である。しかし、いずれも細片化しており、全形を窺えるものはほとんどない。このうち、今回報告するのは次の3点である(第34図)。

1は口径9.6cmを測る土師器皿である。口径から見ると中皿に属す。口縁部、体部上半をヨコナデ、体部下半をユビオサエする。内面には内底面より派生すると考えられる時計回りの強いナデを施し、その後口縁部に向ってナデ上げる。そのため、体部、底部が最も薄く、口縁部が厚くなる。底部は欠失する。色調は淡褐色を呈す。

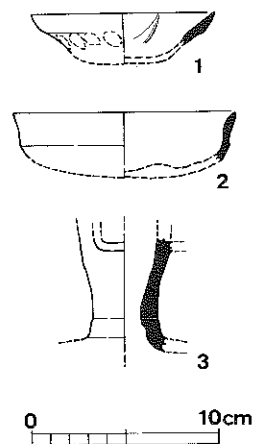
これは、平安京左京内膳町出土の土師器皿^{註37}Aタイプに相当する。Aタイプは平安時代より江戸時代にいたるまで通有に認められるものであるが、上述の成形、調整法等、特に最後のナデ上げる方法の特徴より、近世初頭のものと考えられる。

2は、口径11.4cmを測る杯、あるいは高杯である。いずれにせよ無蓋のものである。口縁部は、やや肥厚しながら外反し、端部は丸くおさめる。体部と底部の境界には、わずかに突出するゆるい陵線を持つ、底部は欠失する。焼成は良く硬質で、色調は青灰色を呈す。

これを無蓋高杯とすると、その形態より陶邑編年^{註38}Ⅱ期のいずれかのものに相当すると思われる。

3は、器形不明の須恵器である。現状の形態は、壺頸部、高杯脚部状を成し上部には突出する部分がある。この突出部分は器壁を水平、垂直に屈曲させるものである。突出部上面には上方から落下したと思われる緑色自然釉が付着する。全体は、上から見て右回りのロクロナデを施す。焼成良く硬質で、色調は灰白色を呈す。

以上、土器類について述べてきた。これらの土器は上述のとおり細片化しており、また遺構に伴うものもない。このように、これら土器より瓦塚古墳の築造時期あるいは改変の時期を窺い知ることはできない。以上のことから瓦塚古墳の位置づけに関しては、今後の資料増加を待ち、すでに述べてきた埴輪等との比較、検討、また、単に瓦塚古墳の時期だけでなく、古代宇治の他の古墳との関連をも含めて、今後の詳細な検討を要するであろう。



第34図 土器実測図

6. ま と め

瓦塚古墳の発掘調査で知り得た事実をのべてきたが、ここでは、これらの知見をふまえ以下の項目別に若干の検討を加え、本報告のまとめとしたい。

(墳丘の復元)

すでにのべたように、瓦塚古墳は後世の耕作等に伴いかつての姿をそのまま残してはいない。しかし、人の出入りの稀な山丘に立地する古墳に比べ、このように人家に近接している古墳は一般的に遺存状況が悪い中であって、瓦塚古墳はかなり良好に旧状を留めているといえる。したがって、調査で得られた資料と現状の状況とをもとに瓦塚古墳の姿を復元してみたい。

古墳の直径は、現状から考えて径30m程と推定して大過ないものと思える。ただし、このように平地に立地する古墳は、周囲に幅数m程の周溝をもつ事が一般的である。今後、古墳周辺の水田を調査する事があり、周溝の有無を確認できた時に初めて直径の確定となるうが、周溝を有していたとしても直径は30mをさほど上廻らないと考えられる。

古墳の高さは現状で約3mである。第2主体部検出面の浅さから、かつては更に1m程高かったとした場合、墳丘高は4m程となろう。この高さも前述のごとく周溝の存在を考慮しないものである。

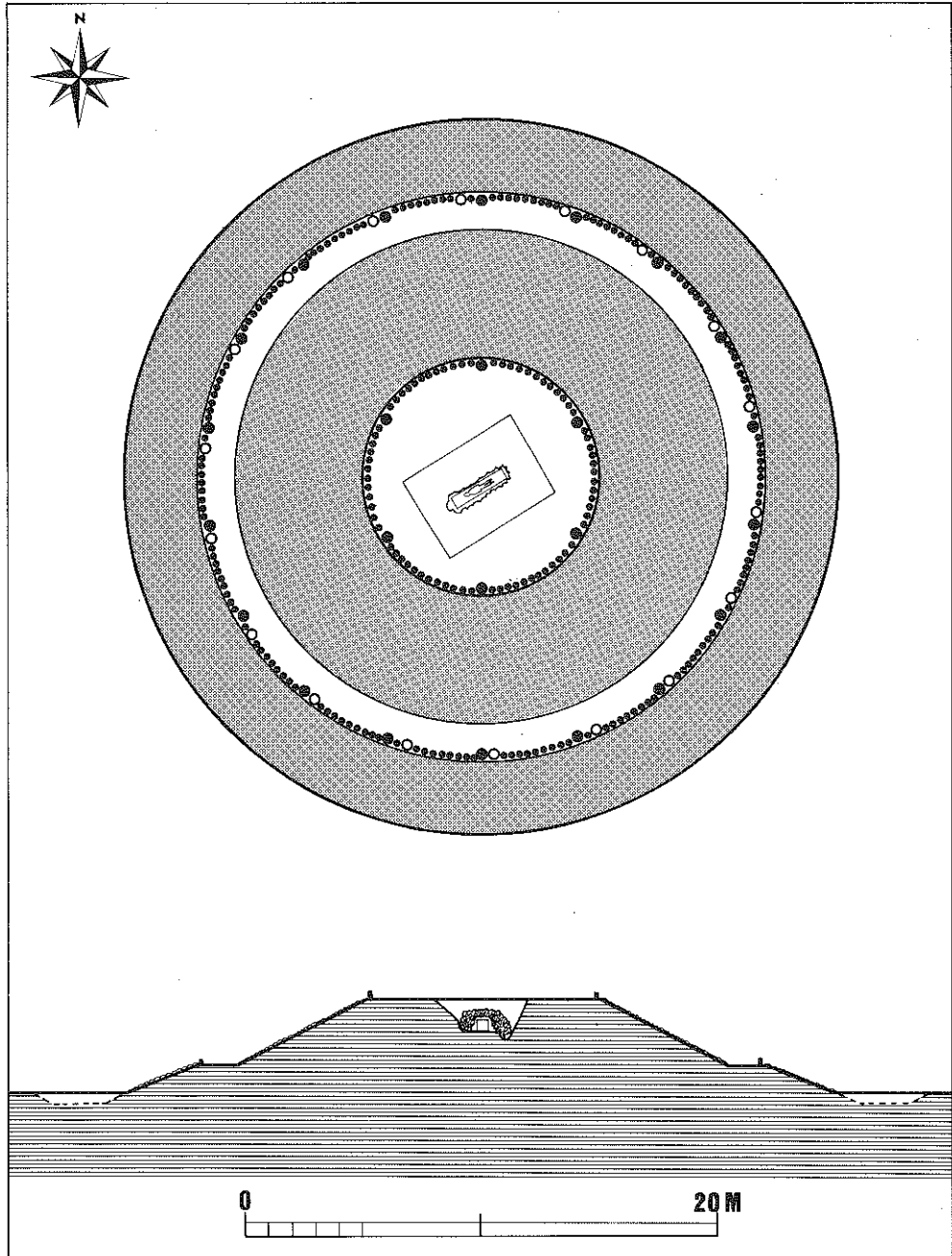
段築は、現状では水田面から約1.2mの高さにあり、その幅は約1.7mと推測できる。したがって、墳丘第2段の円丘の直径は約21m程、その高さは1.2m程と推測できる。

この段築の外周ぞいに埴輪列がめぐる。埴輪列は円筒埴輪を主体とし、その中に一定間隔で朝顔形埴輪が樹立されている。朝顔形埴輪の検出位置から埴輪列の中心を求め、その中心を基に朝顔形埴輪相互の角度を求めると、ちょうど20度となる。朝顔形埴輪は、埴輪列を18等分する位置に立てられ、その中を9本の円筒埴輪でうめている可能性がある。また、埴輪列中に埴輪間隔が非常に長い部分が存在することを指摘した。この部分は、長さ的にはちょうど埴輪1本分に相当する。この部分の精査をしていないため不安な面があるが、ここに埴輪形木製品が立てられていた可能性も否定できない。加悦町の鴨谷東1号墳^{註39}でもこのような部分が埴輪列中に認められ、そこには柱穴が認められたという。また、墳頂部にも埴輪が立てられていた。これは、盗掘壕より出土した埴輪の中に底部片が存在することから窺うことができる。形象埴輪も墳頂部に立てられていたのであろう。

葺石は、墳丘第2段目斜面で検出している。第1段目では未検出であったが、これは後世の改変によりすでに消滅しているものと考えられる。かつて、墳丘斜面全体にわたって葺石があったと推測してよいと思われる。

I. 瓦塚古墳発掘調査概要

第1主体部は、墳丘のほぼ中心に設定されており、棺底は想定墳頂部より約1.5m下にあったと考えられる。第2主体部は、第1主体部の礫層が陥没後に造られたものであり、棺底は第1主体部の棺底より約50cm上にある。

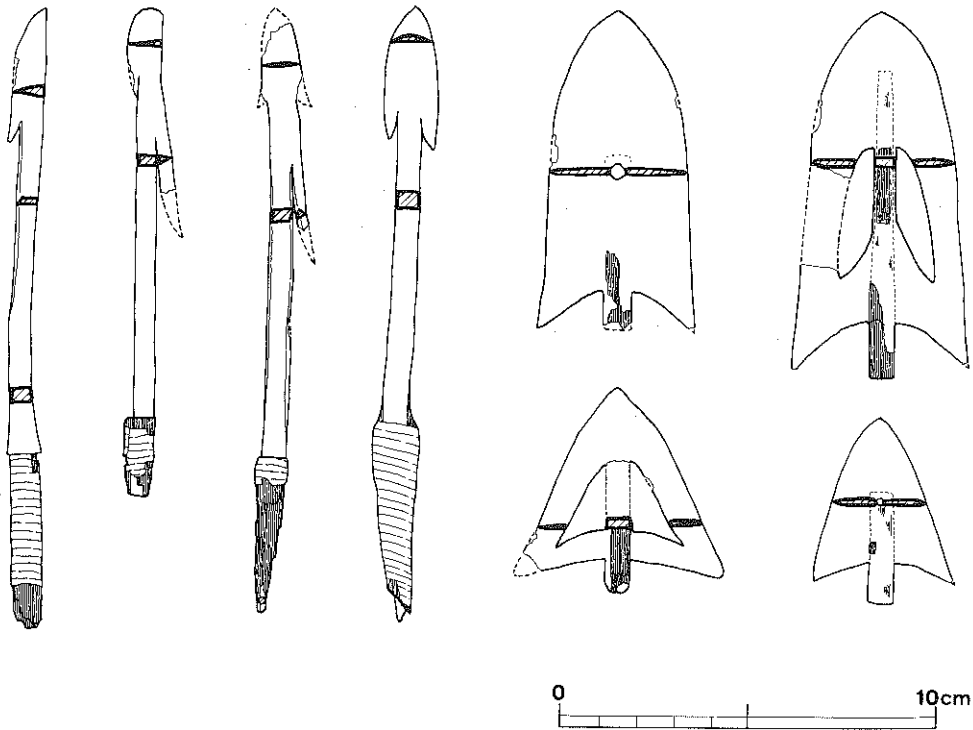


第35図 瓦塚古墳復元図（築造時）

(古墳の年代)

瓦塚古墳の築造年代を推定する最も有効な資料は埴輪である。今回検出した埴輪は、すべての個体に黒斑が無く、一部に須恵質化しているものも含まれるため、窯焼成されたものであることが理解できる。外面調整は、ヨコハケを主体とし、一部にタテハケのみのものを認めることができる。前者は川西氏編年のIV期に、後者はV期に^{註40}該当する。川西氏はIV期を5世紀後半に、V期を6世紀にあてている。付近でIV期の埴輪を持つ代表的な古墳として城陽市の芭蕉塚古墳(前方後円墳、全長120m)があげられる。埴丘規模でも5世紀後半の南山城を代表する古墳である。また、宇治市宇治山本の山上に立地する宇治二子山南墳も副葬品から5世紀後半と推定できるものである。これらの埴輪と瓦塚古墳のものを比べると、瓦塚古墳の方がV期の特徴を持つ埴輪を混じえる点で新しい。瓦塚古墳の築造年代は、5世紀後半の中でもやや新しい時期といえるだろう。

また、第2主体部の年代については、鉄鏃の型式から一定推定できる。鏃身の下に更にもう一つの腸扶をもつ長頸鏃は、前述の宇治二子山南墳を始め、大阪府黒姫山古墳や埼玉県稲荷山古墳などのように、5世紀後半に比定される古墳から比較的良く出土する型式のものである。第2主体部についても、やはり5世紀後半の年代を与えて大過ないものと考えられる。



第36図 宇治二子山南墳出土の鉄鏃

I. 瓦塚古墳発掘調査概要

したがって、第2主体部は、第1主体部埋葬後、大きな時間的経過を経ずして埋葬されたものと考えられるのである。

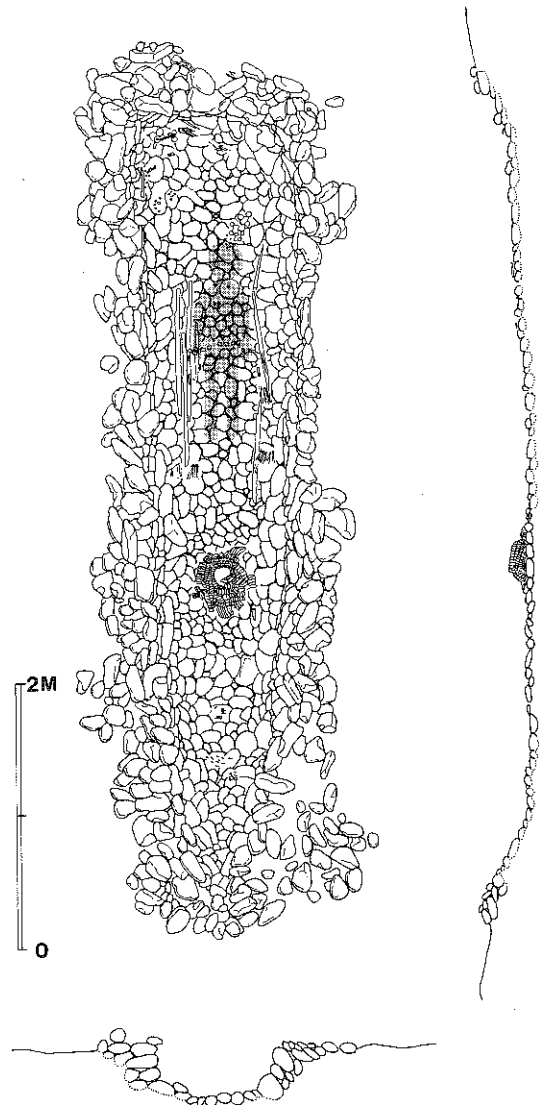
(礫槨について)

瓦塚古墳の主体部は、第1主体部の礫槨によって特徴付けられる。礫槨は、木棺を礫によって包み込むものであり、全国的に類例の少ない埋葬施設である。

礫槨をもつ著名な古墳としては、辛亥年銘の鉄剣を出土した埼玉県行田市埼玉稲荷山古墳^{註43}(前方後円墳、全長120m)と群馬県藤岡市白石稲荷山古墳^{註44}(前方後円墳、全長93m)がある。これらの古墳の礫槨は、木棺を礫で完全に被覆したのではなく、木棺底及びその周囲に礫を使用している。この点で、瓦塚古墳の礫槨と埼玉稲荷山・白石稲荷山両古墳の礫槨とは構造上の差異が認められる。しかし、礫で木棺を保護するという基本点では同一であるため、現状では必ずしも両者を区別する必要はないように思える。

礫槨をもつ古墳の分布状況は、九州に1例、中国に1例、北陸に3例、関東に6例、東北に4例があり、畿内では確実例としては瓦塚古墳の1例^{註45}だけである。これらの古墳の年代は、九州の佐賀県伊万里市杵路寺古墳(前方後円墳、全長90m)が前期に、前述の白石稲荷山古墳が中期、埼玉稲荷山古墳が後期初頭と古墳時代前期から後期にかけて認められ、古墳の形・大きさも全長120mの前方後円墳である埼玉稲荷山古墳から直径30mの円墳瓦塚古墳まで幅広く採用されている。

現段階では、礫槨をもつ古墳の位置づけは難しいが、畿内では特異な埋葬施設であるといえる。

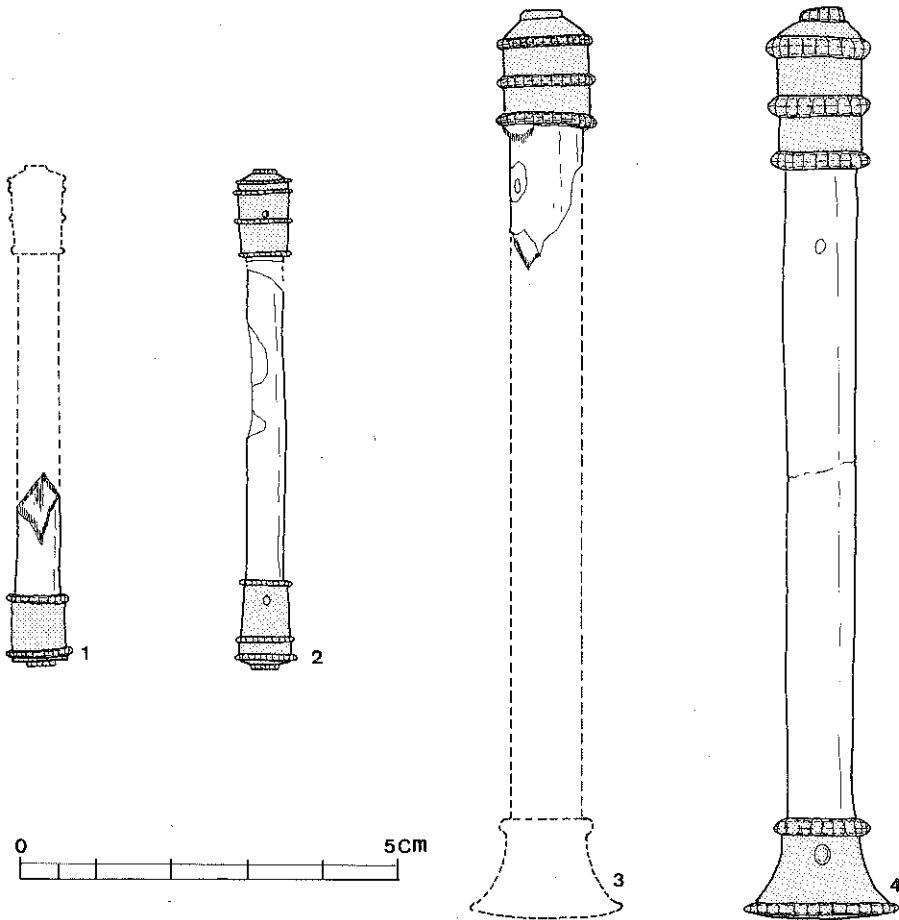


第37図 埼玉稲荷山古墳の礫槨(註43からトレース)

(玉杖形金銅製品の類例)

玉杖形金銅製品については、金製金具付きのもの、銀製金具付きのものとも各1例が本報告までに知り得た。

金製金具付きのものは、兵庫県姫路市にある宮山古墳^{註46}の第3主体部出土品中に類例が1点ある。宮山古墳は、標高35m程の丘陵上に築造された直径30mの円墳で、昭和44年と47年に発掘調査が実施されている。主体部は3基の堅穴式石室であり、第3主体部は最初に宮なまれたものである。第3主体部は盗掘を受けておらず副葬品が原位置で検出されている。副葬品には、舶載画文帯神獣鏡を始め三角板鋌留短甲・横刃板鋌留衝角付冑・多量な刀剣や鉄鏃・垂飾付耳飾り・大量のガラス玉・銀製指輪・古式須恵器などがある。宮山古墳の報告では、玉杖形金銅製品ではなく、用途不明金銅製品と呼称しているが、これは銀製指輪に接して出



第38図 玉杖形金銅製品の類例

(1・3：瓦塚古墳、2：宮山古墳〔註46よりトレース〕、4：小倉コレクション)

1. 瓦塚古墳発掘調査概要

土した。状況的には、遺体の右手に添えられていたか、もしくは握っていたものと判断できる。宮山古墳出土例は、全長約8cmで、その両端に金製金具が付く。金製金具は、ともに長さ1.2cm、直径0.8cm程の大きさで、それぞれ3条と4条のキザミ目のある金製凸帯を付している。また金具の先端には直径0.4cm程の凸帯と同様な小さな突出が付く。軸は、直径0.5cm程の鉄心金銅張りの筒で、表面に金箔が遺存している。古墳の年代は5世紀後半であり、出土品は現在、兵庫県立歴史博物館^{註47}に展示している。

銀製金具付きのものは、東京国立博物館が蔵する小倉コレクション^{註48}中に類例が1例存在する。小倉コレクションは、戦前に朝鮮半島で収集され昭和57年に東京国立博物館へ寄贈されたものであり、多くの考古遺物が含まれているという。小倉コレクション例は、全長11.9cmで、両端に銀製金具が付く。一方の金具は、長さ2.1cm、直径1.1cmの円筒形のもので3条のキザミ目のある銀製凸帯を付し、先端には直径0.6cmのキザミ目のある突出を付している。この突出の中央には直径0.3cm程の孔があり中と通じている。この円筒形の金具は軸から取りはずすことができる。他方の金具は、先端に向って開くもので、軸側の直径1.0cm、先端での直径1.9cmである。先端は銀板でふたがしてある。金具の両端にはキザミ目のある銀製凸帯がめぐる。また、金具の軸寄りの所に金銅製の鋳らしきものが1対あり、これにより金具と軸とを固定しているものと思われる。軸は全長10.4cm以上、直径1.0cm、肉厚0.2cmの金銅製の筒で、ところどころに金箔が遺存している。また、軸の円筒形の金具寄りのところに一對の鋳跡らしきものが存在する。年代は不明。

以上の2例は、それぞれ瓦塚古墳出土のものと同形状的にも法量的にもほぼ同一であり、瓦塚古墳出土例も本来はこの類例と類似した形態であったと見てよいであろう。また、小倉コレクション例が朝鮮半島出土品であるため、他の日本出土のものも朝鮮半島から請来品である可能性が高い。

このように、本報告が仮称する玉杖形金銅製品は、現在のところ^{註49}4例が知られるのみで、この内1例は朝鮮半島出土品である。我国では極めて稀な遺物といっても過言ではない。このため、その用途や性格、また国産品であるのか大陸からの請来品であるのか等、種々の問題を解明するには、さらに多くの資料と広範な検討が必要であることは言うまでもない。しかし、玉杖形金銅製品と仮称した杖の文字に我々は今、こだわりたいと考えている。それは第1にこれらは基本的に棒状(筒状)であること、第2に小倉コレクション例の先端に向かってラッパ状に広がる金具は玉杖の石突に類似すること、第3に宮山古墳出土例は、遺体の手付近から出土していること、から、形は小さくとも機能的には杖を想定することが最も可能性が高いと考えられるからである。いずれにしても、さらに究明を続ける必要のある遺物といえる。

(宇治古墳群における位置)

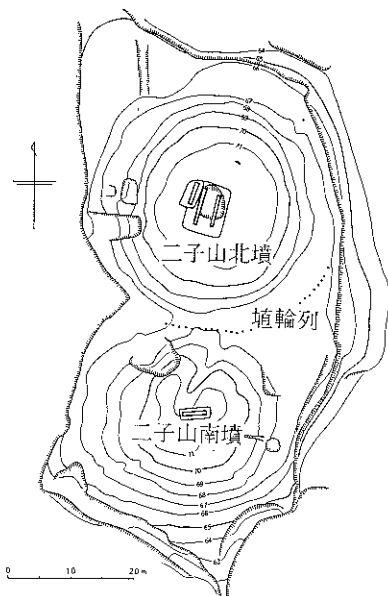
宇治市東部、現在の宇治川東岸部には南北4kmにわたって現在約140基程の古墳が粗密をもちながら点在している。今、これらのまとまりを仮りに宇治古墳群と呼ぶことにしよう。

ここでは、宇治古墳群における瓦塚古墳の位置付けについて若干の検討を加えたい。

宇治古墳群では、まだ確実に古墳時代前期に比定できる古墳は発見されておらず、現状で最も古い古墳は宇治二子山古墳北墳である。この古墳は、宇治橋東側の山丘上に立地する直径42mの円墳で、昭和42年に発掘調査が行なわれている。3基の主体部をもち、副葬品として、仿製半円方形帯神獸鏡を始め、三角板帯綴衝角付冑、長方板帯綴短甲、多量の鉄鏃、刀剣、工具、玉類などが出土している。外表施設として埴輪、葺石をもち、埴輪は川西氏編年のⅢ期に該当する。年代的には5世紀中葉に比定できる。

宇治二子山古墳北墳の次に比定できるのが、宇治二子山古墳南墳(以後南墳)である。南墳は、北墳に近接して築造された一辺36m程の方墳である。1基の主体部をもち、副葬品として、仿製四葉文鏡を始め、三環鈴、横矧板鋌衝角付冑、横矧板鋌留短甲、挂甲、馬具、多量の鉄鏃、刀剣、玉類が出土している。外表施設として埴輪が確認されている。甲冑の型式や鉄鏃に長頸鏃が含まれる点から5世紀後半に比定できるものである。

この両古墳は、その規模・副葬品の内容から見て宇治古墳群の首長墓と見てまちがいないものである。瓦塚古墳は、年代的には宇治二子山古墳南墳に次ぐ時期に比定できる。規模的にさほどの差をもたない瓦塚古墳と二子山古墳北・南墳とを比べると、いくつかの差異を認めることができる。まず、その立地である。二子山古墳北・南墳が丘陵上にあるのに対し瓦塚古墳は平地に立地している。宇治古墳群において、平地に立地するものは、すでに消滅している古墳も含め数基程しかなく、大半が丘陵上もしくは丘陵腹に築造されている。その点で、瓦塚古墳は平地にある数少ない古墳の一基といえる。第2に、副葬品である。二子山古墳北・南墳を特徴付けるものは、甲冑、刀剣等に代表される豊富な鉄製武器・武具類の副葬である。瓦塚古墳は、盗掘されていて副葬品の全容が必ずしも明確ではないものの、盗掘場中からはごくわずかな鉄片と多量の玉類及び玉杖形金銅製品が出土し、遺存部では第1主体部に若干の馬具類、第2主体部では鉄鏃と刀子が出土したに留まっている。盗掘時においては、錆化し破損し易い鉄製品は、そのまま遺棄されるのが通例であり、本来鉄製品



第39図 宇治二子山古墳測量図

1. 瓦塚古墳発掘調査概要

を多く副葬しているならば、盗掘墳中よりもっと多量の鉄片が出土して良いはずである。したがって、瓦塚古墳の特に第1主体部においては、もともと鉄製武器・武具の副葬は極めて少なかったと予測できるのであり、かわって多量の玉類や出土例が稀な玉杖形金銅製品などの装身具が主体であったと推測できる。第3は主体部の型式である。二子山古墳北・南墳の主体部は、粘土槨もしくは木棺直葬などの当時広く用いられた施設であるのに対し、瓦塚古墳の第1主体部は、礫槨であり全国的にも類例の少ないものである。

瓦塚古墳は、当該時期の中では、規模的にも外表施設の完備という点においても首長墓として遜色のない古墳であるが、前代の首長墓である二子山古墳北・南墳との副葬品に見る差異は、直ちに瓦塚古墳を一連の首長墓と速断することに躊躇を感じさせる。仮りに瓦塚古墳を首長墓とした場合、そこには前代までの首長と性格を異にする新たな首長の出現を考慮しなければならないであろう。

瓦塚古墳以後の首長墓には五ヶ庄二子塚古墳が挙げられる。全長110mの前方後円墳で、二重周濠をもつ整備された大型古墳である。年代的には6世紀前半に比定できる。この古墳は、前代までの首長墓とは隔絶した規模を誇るもので、6世紀を境として宇治古墳群は急激に変容したことを物語っている。

(結 語)

以上、瓦塚古墳の発掘調査で得られた成果を簡略ではあるがまとめてきた。今回の調査は、瓦塚古墳の保護を目的とするものであるため、調査範囲は必ずしも広いものではない。しかし、当初に設定していた調査目標は、十分に達成できたものと考えている。

墳丘・主体部の遺存状況は、盗掘等の災いを受けてはいるものの、全体的には往時の状況を充分復元できる状態であり、宇治市では比較的良好に遺存している数少ない古墳といえよう。

また、内容的には、畿内では類例が極めて少ない礫槨をもつ事や、出土例が全国的に稀な朝鮮半島製の玉杖形金銅製品の副葬など、やや特異な古墳として注目される。

このように、今回の発掘調査で、瓦塚古墳が古墳時代の宇治を考えるうえで重要なものであることが判明し、今後の保護を図るうえでも貴重な資料が収集できたことは、本市の文化財行政にとって大変有意義であったと考える。最後に、この調査に対し全面的にご理解とご協力を賜った土地所有者である中村健二氏をはじめ地元町内会、関係機関、関係各位にお礼を申し上げ、本報告のおわりとしたい。

(註)

- 註1. 『宇治市史』第1巻、宇治市、昭和48年。
- 註2. 加藤友欣子、辻村美栄、西川裕美、藤本弘美。
- 註3. 千拓前の巨椋池は、面積7.94km²であり、湖底の標高約10m、水深約1.4m程であった。
- 註4. 「京滋バイパス関係遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第7冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、昭和62年。
- 註5. 「寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集、宇治市教育委員会、昭和62年。
- 註6. 「羽戸山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第2冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、昭和57年。
- 註7. 久津川車塚古墳(全長180m、前方後円墳)を盟主とする大型の古墳群である。
- 註8. 市域の宇治川東岸部、すなわち宇治・菟道・五ヶ庄・木幡地区に散在する古墳を総称して「宇治古墳群」と呼びたい。現在確認できる古墳数約140基。宇治川東部古墳群ともいう。
- 註9. 『宇治二子山古墳』、宇治市教育委員会、昭和43年。
- 註10. 本書の「五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要」を参照。
- 註11. 『宇治市遺跡地図』(改訂版)、宇治市教育委員会、昭和61年。
- 註12. 註4と同じ。
- 註13. 「岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集、宇治市教育委員会、昭和62年。
- 註14. 小川敏夫「宇治市五ヶ庄出土の須恵器」『古代学研究』第17号、昭和32年。
- 註15. 『宇治市史』第1巻・第5巻、宇治市、昭和48年・昭和54年。
- 註16. 『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』、宇治市教育委員会、昭和58年。
- 註17. 『大鳳寺跡発掘調査報告』、宇治市教育委員会、昭和62年。
- 註18. 註13と同じ。
- 註19. 註5と同じ。
- 註20. 註13と同じ。
- 註21. 註4・16と同じ。
- 註22. 「東中遺跡・菟道遺跡・滋賀谷窯跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集、宇治市教育委員会、昭和62年。
- 註23. 京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏の指導をえて実施した。第2主体部直下に第1主体部の礫が存在したため、分割し取り上げたが、取り上げ時に破損した部分があった。
- 註24. 橋本清一氏のご教示。
- 註25. 註9と同じ。宇治二子山古墳南墳主体部棺外より大・小2種の木心鉄板張輪鏝が出土しているが、鉄板・鉄鋳自身の法量はもちろん構造的にも今回のものと比べると堅牢なものである。
- 註26. 小野山 節「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系3 日本 III 古墳時代』、昭和34年。
- 註27. 水野清一・小林行雄編『図解考古学辞典』、昭和52年。
- 註28. 高橋美久二氏のご教示。
- 註29. ここでいう直弧文とは鍵手文を除いた狭義の直弧文である。

1. 瓦塚古墳発掘調査概要

- 註30. 西川 宏「武器」『日本の考古学Ⅴ 古墳時代(下)』、昭和50年。
- 註31. 小林行雄「鹿角製刀剣装具」・「直弧文」・「装飾古墳」『古墳文化論考』、昭和51年。
- 註32. 小林行雄『統古代の技術』、昭和39年。
小頼康行「管切り法によるガラス玉の成形」『考古学雑誌』73-2、昭和62年。
- 註33. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、昭和53年。
- 註34. 『鳴谷東1号墳第1次発掘調査概要』、立命館大学文学部、昭和62年。
- 註35. 吉田恵二「埴輪生産の復元」『考古学研究』19-3、昭和54年。
- 註36. 赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』90、昭和54年。
- 註37. 「平安京(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-3、京都府教育委員会、昭和55年。
- 註38. 『陶邑古窯址群Ⅰ』、平安学園考古学クラブ、昭和41年。
- 註39. 註34に同じ。
- 註40. 註33に同じ。
- 註41. 註9に同じ。
- 註42. 『河内黒姫山古墳の研究』 大阪府教育委員会、昭和28年。
- 註43. 『埼玉 稲荷山古墳』、埼玉県教育委員会、昭和55年。
- 註44. 後藤守一・相川竜雄「多野郡平井村白石稲荷山古墳」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第3冊、昭和11年。
- 註45. 『日本の考古学Ⅳ 古墳時代(上)』昭和41年、による。
- 註46. 『宮山古墳第2次発掘調査概報』姫路文化財保護協会、昭和48年。
- 註47. 調査に関しては、水口富雄氏のご指導をえた。
- 註48. 調査に関しては、早乙女雅博氏にご指導ご協力賜り、また、亀井正道氏からご教示を受けた。
- 註49. 奈良県石光山32号墳にも同様なものがある。しかし、形態・材質に若干の差異があり、ここでは取りあげていない。

(追記)

本報告脱稿後、中司照世氏よりガラス2色小玉(トンボ玉)の類例について、福井県十善の森古墳、滋賀県大通寺5号墳、和歌山県井辺前山6号墳、奈良県滋思寺1号墳等に散見できるとのご教示をお受けした。

付表1 円筒埴輪観察表

図版 番号	出土 番号	内外面調整手法	法 量	口縁 形態 タガ	ハケメ	胎 焼 色 土 成 調	備 考
1	C ₂	外面—Ⅱ類 内面—ナデ	底 径 13.4~15.5cm	タ ガ B 類		精 不 黄 良 良 橙色	タガ裏面ヨコ ナデ
2	C ₁	外面—Ⅰ類 内面—ナデ	底 径 16.4~17cm	タ ガ B 類	5~6 /cm	精 や 淡 良 や 橙色	基底4cmヨ コハケ
3	C ₃	外面—Ⅰ類 内面—ハケメ・ナデ	底 形 19~20.6cm	タ ガ B 類	5~6 /cm	精 良 淡 良 良 橙色	
4	C ₄	外面—Ⅲ類 内面—ナデ	底 形 13.4~14.5cm		10~11 /cm	精 良 赤 良 良 橙色	底部調整あり
5	C ₅	外面—Ⅱ類 内面—ナデ	底 径 17.8~18.6cm	タ ガ A 類		精 良 淡 良 良 橙色	タガ裏面ヨコ ナデ
9	F ₃	外面—Ⅲ類 内面—ナデ	底 径 13~14.9cm	タ ガ A 類	6/cm	や 不 黄 や 良 橙色 粗 良	底部中央板状 ナデ
10		外面—タテハケ 内面—ナデ 口縁部—ヨコナデ	口 径 29.6cm	口 縁 部 a ₁ 類	8/cm	や 不 淡 や 良 橙色 粗 良	
11		外面—タテハケ 内面—ヨコハケ 口縁部—ヨコナデ	口 径 23.2cm	口 縁 部 a ₂ 類	8/cm	精 良 赤 良 良 橙色	
12		外面—タテハケ 内面—ヨコハケ 口縁部—ヨコナデ	口 径 24.2cm	口 縁 部 a ₃ 類	3/cm	精 や 黄 良 や 不 良 橙色	
13		外面—タテハケ 内面—ヨコナデ 口縁部—ヨコナデ		口 縁 部 b 類	7~8 /cm	精 良 赤 良 良 橙色	
14		外面—Ⅲ類 内面—ナデ		タ ガ A 類	8~9 /cm	精 良 淡 良 良 橙色	スカシー円形 または楕円形
15		外面—Ⅲ類 内面—ナデ		タ ガ A 類	8~9 /cm	精 良 淡 良 良 橙色	スカシー円形 または楕円形
16		外面—Ⅲ類 内面—ナデ		タ ガ A 類	6/cm	精 不 黄 良 良 橙色	スカシー円形 または楕円形

付表2 朝顔形埴輪観察表

図版 番号	出土 番号	内外面調整手法	法 量	口縁 形態 タガ	ハケメ	胎 焼 色 土 成 調	備 考
6	C ₆	外面—I類 内面—ナデ	底 径 26.2~23.5cm	口 縁 A 類	8~9 /cm	精 不 黄 良 良 橙 色	
7	F ₂	外面—I類 内面—ナデ	底 径 24~26cm	口 縁 A 類 (A ₂)	10/cm	精 良 淡 良 良 橙 色	底部調整あり
8	G ₁	外面—Ⅲ類 内面—タテハケ	底 径 23.2~24cm	口 縁 A 類 (A ₂)	4~5 /cm	精 や 黄 良 や 橙 良 良 色	タガ裏面ヨコ ナデ
17		外面—タテハケ 内面—ヨコハケ(A種) 口縁端部—ヨコナデ 頸部内面—ヨコハ ケ・ヨコナデ	口 径 62.8cm 頸部径 22.5cm		8/cm	精 や 黄 良 や 橙 良 良 色	
18		外面—I類 内面—ナデ		タ ガ A 類	7~8 /cm	や や 淡 や 良 橙 粗 良 色	タガ裏面ヨコ ナデ スカシ—円形
19		外面—タテハケ 内面—ヨコハケ(A種) 口縁端部—ヨコナデ	口 径 26cm	口 縁 やや垂下	7/cm	精 良 黄 良 良 橙 色	
20		外面—ナデ 内面—ナデ		タ ガ B 類		精 良 黄 良 良 橙 色	

「凡例」

- (外面調整) I、タテハケの後、ヨコハケを施す。
II、タテハケの後、指により上方へナデる。
III、タテハケの後、二次調整を省略する。
- (タガ形態) A、接合時に上下を強くナデ、突出度の高い台形を呈する。
(A₂) (突出度が高い断面M字形)
B、接合時のナデが不均一で、突出度の低い不整形なもの。
- (口縁形態) a₁、直線的に立ち上がり端部が内傾する。
a₂、直線的に立ち上がり端部が外傾する。
b、やや外反し端部外面に低い突帯を製作する。

Ⅱ. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要

1. はじめに

五ヶ庄二子塚古墳(以下、二子塚古墳)は、宇治市五ヶ庄大林の西方寺境内に所在する前方後円墳で、市内最大の古墳である。

古墳の現状は、墳丘が竹藪になっており、墳丘の西・南側に周濠と堤が一部遺存している。墳丘の北側には工場が建ち、東側は西方寺の建物・民家等が存在し、現状からではこの部分での古墳の旧状を推定し難くなっている。墳丘も完全には遺存しておらず、現在は前方部のみが往時の姿を留めている。このように、本古墳の遺存状況は必ずしも良好とはいえないものの、現地に立てば一部に残る墳丘・周濠・堤からだけでもかつての偉容を十分に推しはかることができ、以前より宇治市唯一の100m級前方後円墳として有識者の注目を集めてきた。

今年度の調査までに、二子塚古墳の調査として基礎的なものは3回実施されている。一つは、大正年間の後円部破壊時の伝聞録^{註1}、一つは昭和46年の宇治市史編纂に伴う墳丘測量^{註2}、もう一つは昭和60年に本市教育委員会が実施した外濠の確認調査^{註3}である。この中で、昭和60年での外濠の発見は、本墳が府下で唯一本格的な二重周濠を備えた前方後円墳であることを確認したのものとして注目できる調査であった。しかし、これらはいずれも二子塚古墳の墳形なり規模なりを具体的に解明する事を目的とするものではなく、なお本墳は不明な点が多いまま現在に致った。また、出土遺物についても記録は少なく、わずかに採集され報告^{註4}されたものから本墳の年代を概ね6世紀前半頃と推定するに留まってきた。

このような状況の中で、本墳の周辺でも開発が増加し、早急にその具体的な内容を把握する必要性が生じたため、今年度から宇治遺跡群発掘調査事業の一環として本市教育委員会が二子塚古墳の発掘調査を実施することとなった。

二子塚古墳については、墳丘部分の調査が今までに皆無であり、その規模・範囲が不明であるため、まずは墳丘部分の確認を実施することとした。特に今年度においては、大正年間に破壊された後円部を調査の主要個所として、後円部直径の確認を主目的として発掘調査を実施した。

この発掘調査の成果については、後述をするが、簡略にまとめるとすれば次の5点が今回の発掘調査の一応の成果といえる。まず第1に後円部直径はなお正確には把握できなかったものの一応の目安を立てることが可能となった。第2に後円部は完全に消滅しているのではなく、下段部分は良好に埋没していることが明らかとなった。第3に後円部中央付近で横穴式石室の基礎と思われる礫群を検出した。第4に外表施設として葺石を有していることが明らかとなった。第5に本墳は盛土による築造であることが理解できた。本報告は、これらの

II. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要



第1図 調査地周辺の主要遺跡(1:50000)

成果について、その概要を報告するものである。

今回の調査を実施するにあたって、全面的にご協力をいただいた西方寺・西方寺住職藤原了孝氏をはじめ西方寺総代各氏、また、大正年間の後円部破壊時の見聞をお聞かせ下さった飯田武夫氏に感謝をするとともに、調査に従事していただいた学生諸君、作業員諸氏、調査中や整理事業中にご指導を賜った関係機関・各位に対して心よりお礼を申し上げる。

なお、本調査における遺物・資料については宇治市教育委員会が全て保管している。

2. 位置と環境

(二子塚古墳の位置)

二子塚古墳の所在する五ヶ庄大林付近(岡屋)は、ゆるやかに西に向って低くなる沖積台地となっており、二子塚古墳付近の標高は21~28m程となっている。古墳の西400mには宇治川が北流し、北1kmあたりには山科盆地を南下してきた山科川が流れている。宇治市域の宇治川東岸部分を我々は宇治市東部と呼んでいるが、二子塚古墳の位置するところはその中でも北端部分にあたり、山科盆地と接する地域である。

宇治川の西側にはかつて巨椋池と呼ばれる巨大な淡水湖が存在していた。湖は昭和16年の干拓終了によって現在は水田と化した。二子塚古墳は、この巨椋池に主軸を平行にして築造されており、墳丘頂からは、今でもかつての巨椋池を通して対岸の向日丘陵・男山丘陵そして北摂津の山丘を望むことが可能である。

近くの遺跡には寺界道遺跡・宇治郡衙推定地・木幡古墳群がある。寺界道遺跡は二子塚古墳の南側に広がる縄文から平安時代に至る集落跡であり、昭和60年にその一部が調査されて



第2図 五ヶ庄二子塚古墳と周辺の地形

II. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要

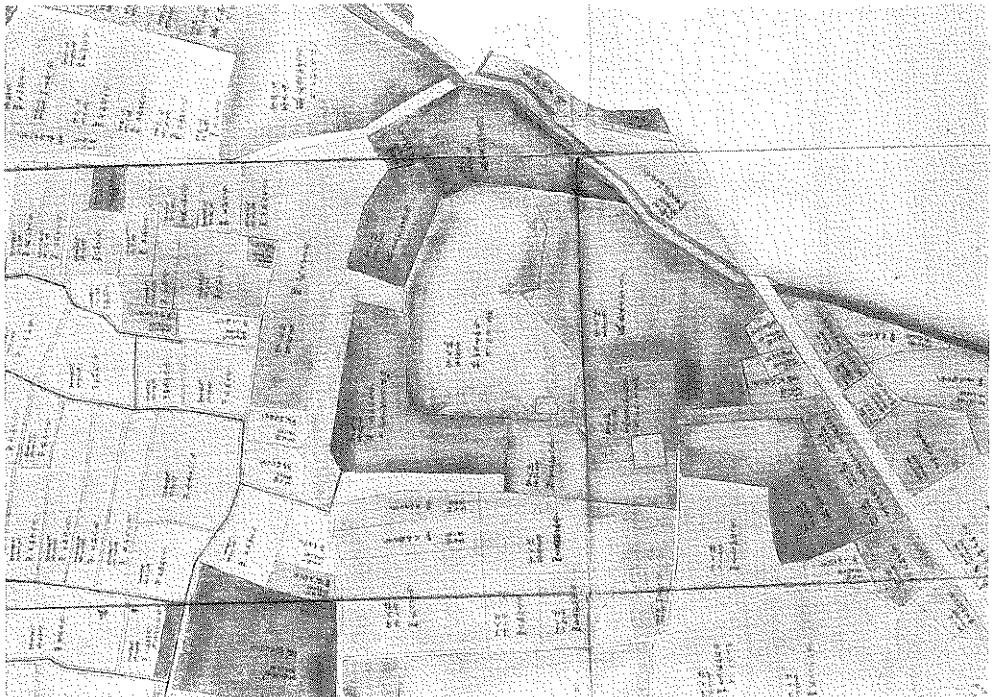
いる。宇治郡衙推定地は古地名からその存在が推測^{註6}されているところであり、土器片、古瓦片を採集できる。また、木幡古墳群は、二子塚古墳東方の丘陵上に密集する古墳群であり、現在120基程の円墳が宮内庁の宇治陵墓として管理されている。

(文献に登場する二子塚古墳)

二子塚古墳は、平安時代の貴族の日記の中にその名を散見することができる。まずは、藤原忠実が著した『殿暦』の康和5年(1103)7月24日条に「二子墓」と記され、次いで忠実の子藤原頼長が著した『台記』の久安6年(1150)9月26日条には「二子陵」と記されている。この両日記にでてくる「二子墓」なり「二子陵」は、文面よりこの二子塚古墳と同一のものと見てまちがいがなく、平安末期においてはこの古墳の存在が当時の貴族の間に知られていた事がわかる。また、江戸時代の宝暦4年(1754)に出版された『山城名跡巡行誌』の第6には「二子塚 在岡屋」とあり、現在我々が使用する二子塚の名称は概ね近世には確立していたと考えられる。このように、本墳は古くより著名な古墳であったことがわかる。

(明治の地籍図)

明治初年頃のものと思われる二子塚周辺の地籍図が現在宇治市に残されている。この地籍図には地割りと地目とが記されており、これより当時の二子塚古墳の状況を知ることができる。墳丘部分の地割りは概ね前方後円形となっており、地目は林とある。周濠は前方部前面及び



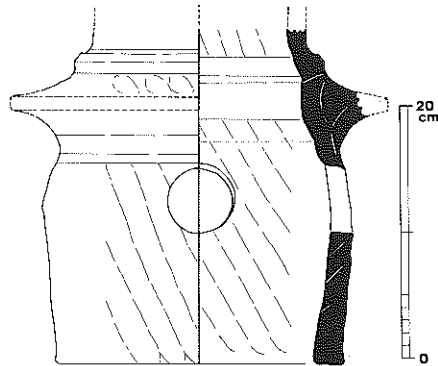
第3図 五ヶ庄二子塚古墳周辺の地籍図(明治初年頃、上が北)

西側に「L」字形に描かれ、それを囲む堤が表現されている。後円部の西・北側にも竹藪として周濠・堤の痕跡を看取できる。また、周濠の西側には田・畑として長細い地割が認められ、これがおそらく外濠の痕跡を示していると思われる。このように、明治初年頃の二子塚古墳は墳丘がほぼ完存しており、周濠・堤・外濠の一部及び痕跡をかなり良好に残していたことが理解できる。なお、遺存する周濠・堤は現在の状況とほぼ等しいと思われ、周濠の大半の埋没は江戸時代以前であったことがわかる。

(大正年間の後円部破壊)

このように、比較的良好に遺存してきた二子塚古墳は、大正3・4年に後円部が土取りにより破壊され、大きくその形状をそこなうこととなった。この破壊の報に接し大正4年5月に現地におもむいた梅原末治はその状況を次のように報告している。「(後円部は)既ニ土砂採掘ノ為ニ其ノ大半ヲ失ヒ、(中略)凹所ノ下方ニ當リテ稍深位ニ大石三四ノ埋没シテ墳ノ主体ノ一部タルヲ思ハシメタリ。而シテ此ノ封土ノ破壊部ニハ埴輪圓筒ノ破片散在シ、マタ礫石ノ遺存スルモノ多カリシ」。梅原が現地を調査した時点では、すでに後円部の大半は破壊され、主体部のもと思われる大石が数個残っているにすぎなかったらしい。しかし、現在では、梅原が主体部の一部と考えた大石もすでになく、彼の調査後、なお少しの土取りが行なわれた事が考えられる。

梅原は、このため後円部破壊時の状況を当時の西方寺住職より聞き取りしている。それによれば、「後圓中央ノ土砂ノ採掘に當リ、基底部近ク小石ヲ積ミ重ネタル室アリ、上部ヲ覆フニ大石ヲ以テシ、マタ周圍ニモ大石ヲ置ケル構造」であつたらしく、彼は本墳の主体部が横穴式石室らしいと考えた。ただ、この石室は「發見ノ當初既ニ原形ヲ損セルノ形迹」があつたらしく、完存ではなかった可能性を指摘している。このように、本墳の主体部が横穴式石室であつたらしいことは、今回の我々の聞き取り調査からも充分可能性の高いこととすることができる。子供時代に二子塚古墳の後円部土取りを実見した飯田武男氏(明治36年生)によれば、後円部を削った時に巨石を組みあげた構造物が発見されたということであり、東西方向に主軸をもつ横穴式石室がこの時露出した可能性は極めて高い。また、土取り以前では、ここにこのような石室があるのを全く知らなかったという事から推測すれば、石室は開口せず完全に封土中に埋もれていたと考えられる。また、竹中宏氏(昭和9年生)によれば、この



第4図 大正年間出土の埴輪

(京都大学蔵)

II. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要

土取りによって出土した巨石を西方寺本堂裏に運んだのを母の(故)竹中みつゑ(明治28年生)が実見したといい、現在、西方寺本堂裏の庭にある巨石(3.3×2.5m)がその石であるという。この石が石室のどの部分に使用された石材かはすでに確証を欠くが、形状から考えて天井石もしくは奥壁に使用されたものではないかと思われる。他の石がその後どのようなようになったかは不明である。

遺物については、石室内より全く出土しなかったといい、わずかにこの時採集された埴輪片(第4図)が現在京都大学に残されている。この埴輪は、形象埴輪の基部にあたり、その形状より人物埴輪の一部と考えられる。

(伝二子塚古墳出土鏡)

二子塚古墳より出土したと伝えられる鏡の写真が、昭和62年に京都府内を巡回展示した「鏡と古墳」^{註7}展示図録にのっている。この写真は、樋口隆康氏が多年にわたって収集した写真資料の一つで、現物は不明であるという。図録によれば、直径12cmの四乳四獣形鏡とあり、鏡周圍の錆化が著しい。仿製鏡である。

(宇治市史編纂に伴う墳丘測量)

昭和46年になって、宇治市史編纂に伴って二子塚古墳の測量調査が実施され、その成果が『宇治市史 第1巻』に報告されている。この測量が本墳にとっては初めてのものであり、本報告においてもその測量図を使用している。

市史ではこの測量成果を次のように報告している。「墳丘の全長は105mにおよび、前方部の幅は80mでかなり広がり、高さも11.5mと比較的高いことが判明した。後円部を図上で復元すると直径60m、残丘の高さは9.5mである。墳丘裾には段築が認められるが、墳丘のまわりには、



第5図 五ヶ庄二子塚古墳昭和46年測量図

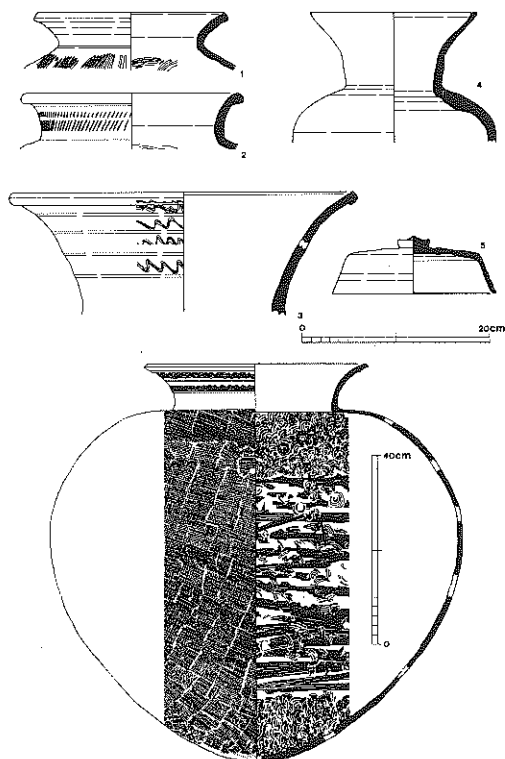
現在の南西角を中心に幅23mの濠が鍵形に残っている。この濠の幅の周滙は前方後円墳の墳丘をひとまわりしていたと推察される。また周滙の外側には幅14mの堤防がめぐらされている。この測量による墳丘等の各数値については、今後、二子塚古墳の調査が進展する中で変更されていき、より正確なものへと向わねばならないが、とにかくにも、測量調査によって本墳が100mを越す規模の大型前方後円墳である事を証明できたことは大きな成果であった。

(外濠の発見)

昭和60年の夏、外濠の発見により、本墳が2重周濠を備える古墳であることがわかった事は、前述した。この調査成果については、すでに本市教育委員会が「二子塚古墳外濠発掘調査概要^{註8}」として報告しているので詳細はこの報告にゆずり、ここではその成果を略記したい。

外濠を発掘調査で確認した地点は、現在残る堤の角の南側である。外濠は素掘りの幅約12m、深さ約1.5mの規模を測る。濠底には粘土層が認められ、一定時間、この外濠が滞水していた事が窺えた。濠内からは、須恵器・土師器・埴輪が出土し、これらの遺物より外濠が埋没したのは奈良から平安時代にかけての頃であることが推察された。

外濠の調査については、調査範囲が狭く、この濠がどの程度の広がりをもって古墳を取り巻くのかは、今後の調査をまたなければならないが、現在の地形からでも一定の推測は可能である。まず、前方部前面であるが、これは外濠の発見地点が前方部前面側であるため、この部分には存在していると見てよい。地形より外濠の存在が予測できるのは、古墳の西側である。この部分は、明治の地籍図において堤にそって長細い地割が認められ、現在においてもその地割は道路・宅地として存在している。外濠部分にあたる場所は、現在家屋が建っているが、その前は水田であったといい、この水田は周囲より一段低かったという。この水田の東西長は約10mであったという。現状の中では、この地割りを外濠の名残りと見るのが最も可能性が高い。古墳の東側は西に比べ7m程も高く、この部分に外濠が存在するか否かは今後の解決すべき点の一つである。



第6図 外濠出土の須恵器

3. 調査の経過

(調査前の状況)

破壊された後円部分の調査前の状況は、東側あたりではほぼ平坦に、西側では少し西に向けて傾斜する平坦面となっており、現状からでは後円部の規模を全く窺い知ることのできない有様である。また、墳丘東側に穿たれた周濠についても、全く埋め立てられており、その痕跡すら確認できない。墳丘部分及び埋没した周濠部分は大半が竹藪で覆われており、削り取られた墳丘崖面にわずかに土がのぞくものであった。また、後円部の中心付近と思われる地点には、人頭大の河原石が多数散見でき、注意を引いた。後にこの部分で礫群を発見した。

(トレンチの設定)

後円部確認用のトレンチは、主軸のやや東よりに第1トレンチ(2m×30m)、東側に第2トレンチ(2m×25m)・第3トレンチ(3m×2m)の3本を設定した。まずは、竹の伐採・抜根を実施した後、人力で掘削を行なった。

第1トレンチでは、表土下で直ちに墳丘盛土を検出するとともに、後円部中央付近で大型の河原石を積み重ねた施設を発見した。この礫群を南に向かって追究した結果、礫群は明らかに後円部残丘の封土中にもぐり込むため、この施設は本墳に伴うものである事が推察された。

第2トレンチでは、西半部分で後円部を東半分で周濠部分を検出した。ここで検出に墳丘斜面を地表下3mまで追究した結果、原位置を保つ葺石の一部を検出した。この斜面を覆う土層には埴輪片・礫・平安後期の土師器が含まれていた。周濠は砂により埋没している状況が看取できた。高さ的には、今回検出した後円部斜面は、その一部に当ると思われ、周濠底はさらに掘り進まなければ検出ができないと思われたが、トレンチ壁の崩壊の危険性が考えられたため、掘削を途中で断念した。

第3トレンチは、京阪宇治線横に設定したものであり、東側堤の検出を目的とし地表下2mまで掘り進めたが、埋土は砂であり堤の痕跡を確認できなかった。

前方部に設定した第4・5トレンチは、次年度に備える予備トレンチである。

測量にあたっては、墳丘部分にコンクリート杭を埋設し今後の基準とするとともに、標高は東宇治中学にある水準点を使用した。また、墳丘全体の測量図は市史に使用した図を使用し、今回の測量成果を加え調整作図した。地区割は任意である。

(現地説明会)

現地説明会は、2月27日に開催し、約300名の参加をえた。その後、埋め戻しを実施した。

4. 遺 構

トレンチ設定は、前述のとおり後円部に第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチを設定した。以下、トレンチごとに順次その概要を述べる。なお、前方部に設定した第4トレンチ・第5トレンチは、次年度に備えた予備トレンチであるため今回報告は割愛する。

(第1トレンチ：第8図)

概ね墳丘の主軸方向に合わせ、後円部残丘の頂端部から北側境界内一杯に設定したトレンチである。後円部のほぼ推定中心位置にあたるトレンチ南半分からは、後円部の墳丘盛土を穿って構築された集石遺構を検出した。また、トレンチ北端では墳丘斜面を検出した。

層 序 第1トレンチでは、厚さ10cm程の腐植土を除去すると、直ちに土盛によって築成された墳丘盛土が認められる。最も深い所では地表下1.2mまで掘削したが、掘削範囲のなかでは地山は認められなかった。土層の堆積状況は、トレンチ北端で層厚1.1m程の堆積が認められる。ほかは、すべて墳丘盛土である。つまり、トレンチの大部分で削平された後円部の下部を確認したこととなる。

墳丘の盛土は、地区ごとに若干の土色の差異はあるものの、基本的には異なる土を交互に土盛りすることによって築成されている。最も盛土の状態が明瞭に観察できる所では、5～10cm程の層厚で茶褐色土と黄褐色粘性土をレンズ状に土盛りしている状態が看取できた。所謂版築のように平坦につきかためたものではなく、比較的軟質な盛土である。しかし、その整然とした縞模様からは意図的に両層を交互に土盛りしたことが推測できる。また、それらの盛土は、さらに数m単位の大きなブロックごとに分けることができる。これは、盛土工事における作業の工程差を示す可能性がある。

トレンチ北端において、今回の調査地を越えさらに北方へ下降する傾斜面を検出した。葺石等の外表施設は認められない。斜面の高さは検出面で標高26.1mを測る。この斜面は、直上の河川堆積層により削平されている可能性があるが、状況的には後円部の1段目の墳丘斜面である可能性が高い。したがって、後円部北裾部は第1トレンチ北端よりさらに北方であることとなる。

墳丘斜面直上の堆積土は大きく2層に分け得る。上層は、厚さ60cm程で2～3cm程の礫を含む灰褐色系砂礫層である。近世以降現代にかけての遺物を含む土層である。下層は、黄褐色系の砂層・砂質土層・粘土層の互層である。無遺物層である。調査範囲の制約のため速断はできないが、墳丘斜面に沿い北に向って厚く堆積するようである。北端で50cm程の層厚を測る。後述する第2トレンチと同様、本古墳の周濠を埋没させた河川堆積と思われる。

II. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要

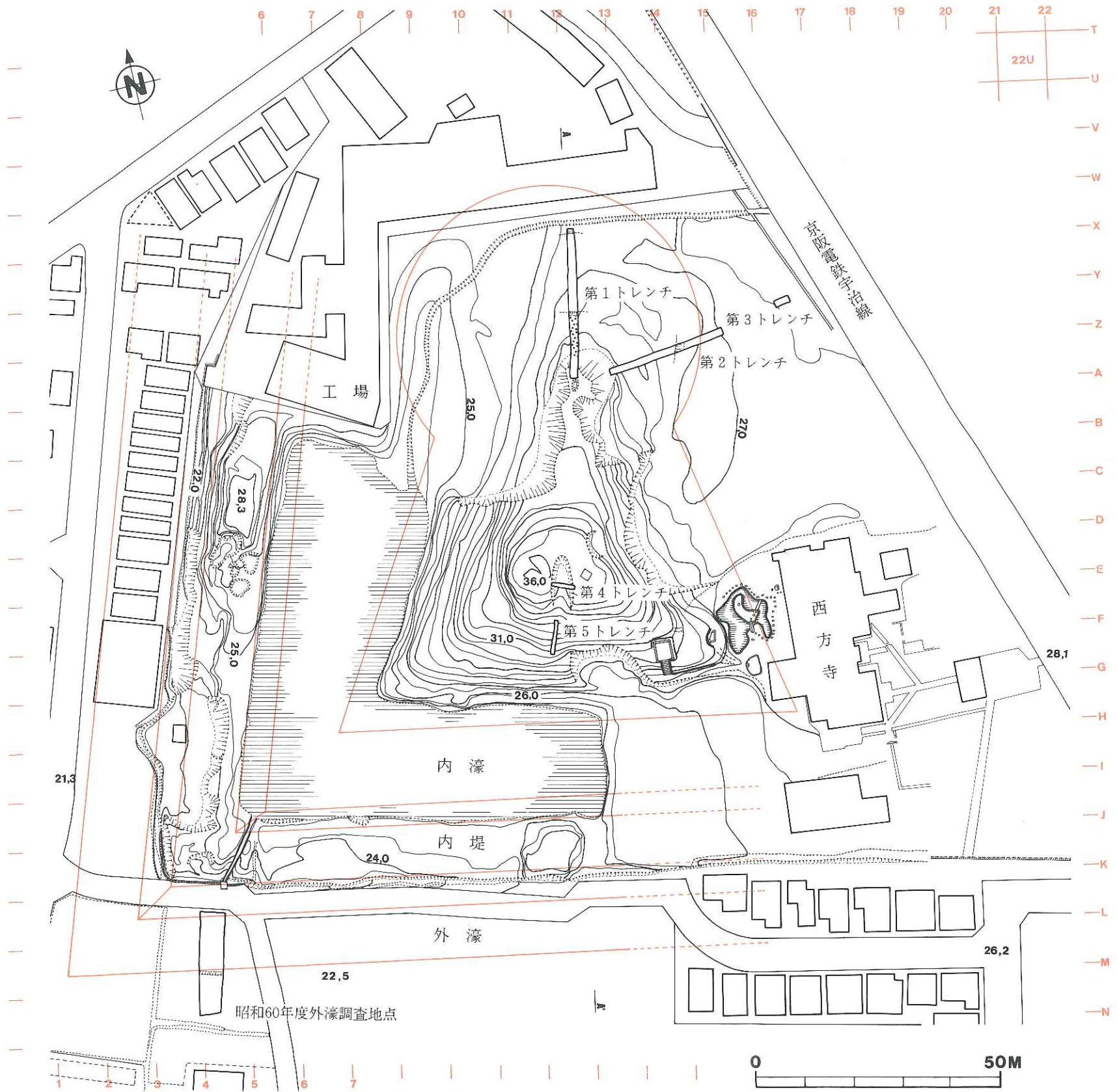
基礎礫群 トレンチ南端部から、夥しい人頭大の河原石からなる集石遺構を検出した。礫群は後円部残丘内へと潜り込む状況を示し、位置的にもほぼ後円部の中心に位置するであろうことから、この施設は後世のものではなく本古墳の主体部関連施設と判断した。状況的には、丁度現在の建物の基礎工事に見られる掘込み作業に類似したもので、主体部である横穴式石室の基礎部にあたる施設と考えられる。このことから本報告では、基礎礫群と仮称した。遊離する礫を慎重に除去すると、墳丘盛土を穿った土壌掘方を伴う施設であることがわかった。しかし、今回はその一部のみを確認したに留まるため、遺構の詳細は不明瞭な点も多いが現状で知り得た事実を報告する。

検出長は東西長1.5m、南北長8.5mを測る。掘方は、墳丘築成のある時点において一度盛られた墳丘盛土を再び穿って造成されていると思われる。後円部がすでに削平されているため、本来はどの高さより構築されたのか不明である。掘方検出面で標高27.5m程を測る。未完掘のため掘方の底は確認していない。礫群北端で東西方向に一直線に並ぶ列石部分を検出した。もしこの列石が礫群の基底部を示す縁石であるとすれば、掘方の底は標高26.5m程となる。使用する石材は大半がチャート質の河原石であり、その他若干の砂岩を含む。石材の大きさは、径30～40cm程のものである。加工痕は特に認められない。構造的には、これらの石材を単に掘方向に投入したのではなく、幾段かに水平に積み重ね構築している。さらに、礫群は掘方に密接して構築するのではなく、その間には50cm程の空間がある。この空間には、黄褐色粘土が裏込め粘土として充填されている。礫群の遺存状態は、トレンチ内では現状で3・4段程、トレンチ南端の後円部残丘の崖面にはさらに4・5段程の礫が潜り込んでいる。このような状況からは、現状では少なくとも基礎礫群の深さは2.5m程、礫の積み上げは8段以上に復元することができる。また、礫群の規模は、遺構の検出状況及びトレンチ周辺のボーリング探査から、東西方向にさらに広がることが確認できた。遺構の主軸方向は不明であるが、その平面形は方形ないし長方形の大型施設であることが推察される。

(第2トレンチ：第8図・第9図)

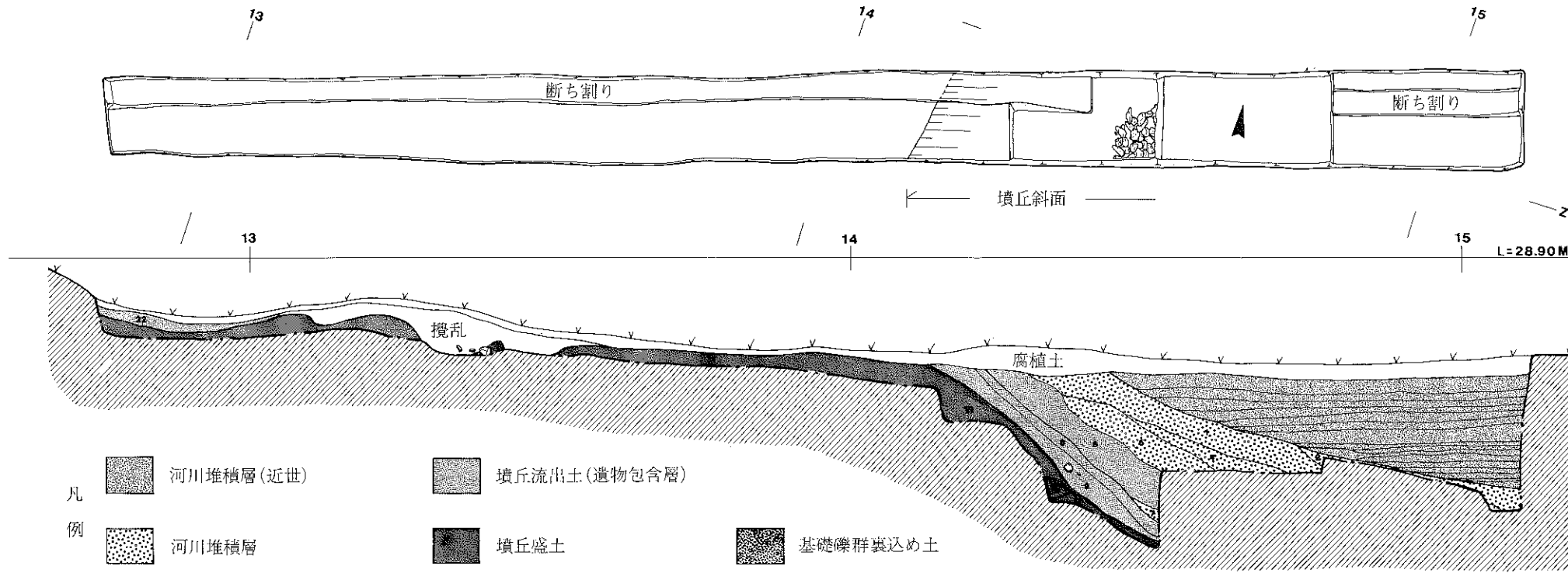
第2トレンチでは、トレンチのほぼ中心部で後円部東側斜面を検出した。その斜面を追ってさらに下に掘削をつづけたところ、厚く堆積した周濠埋土によって墳丘部が比較的良好に遺存していることが判明した。また、地表下2.5m程において原位置を保つ葺石を検出した。

周濠埋土 トレンチ西半部では、第1トレンチと同様で層厚10cm程の腐植土を除去すれば直ちに墳丘盛土となる。それに対して東半分の周濠部分は、河川堆積層等の流入土が厚く堆積する。これらの周濠埋土は、後円部斜面にそって斜めに堆積するものと、その上を水平方向に堆積するものとに分かれる。前者は墳丘流出土、後者は周濠を埋めた河川堆積層である。



第7図 五ヶ庄二子塚古墳測量図

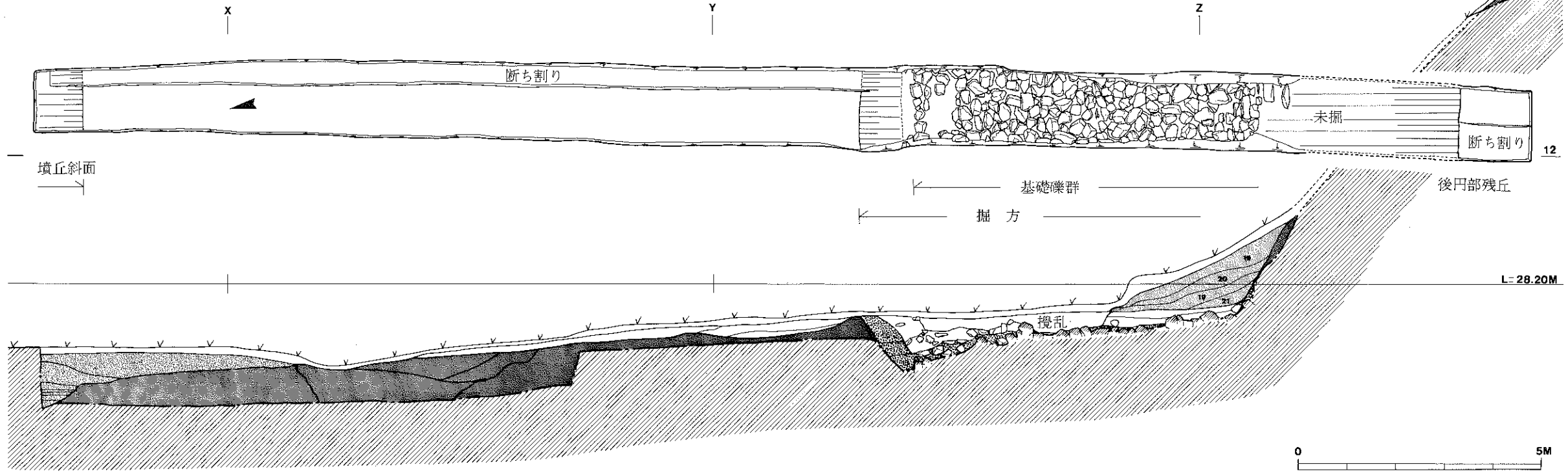
(1) 第2トレンチ実測図



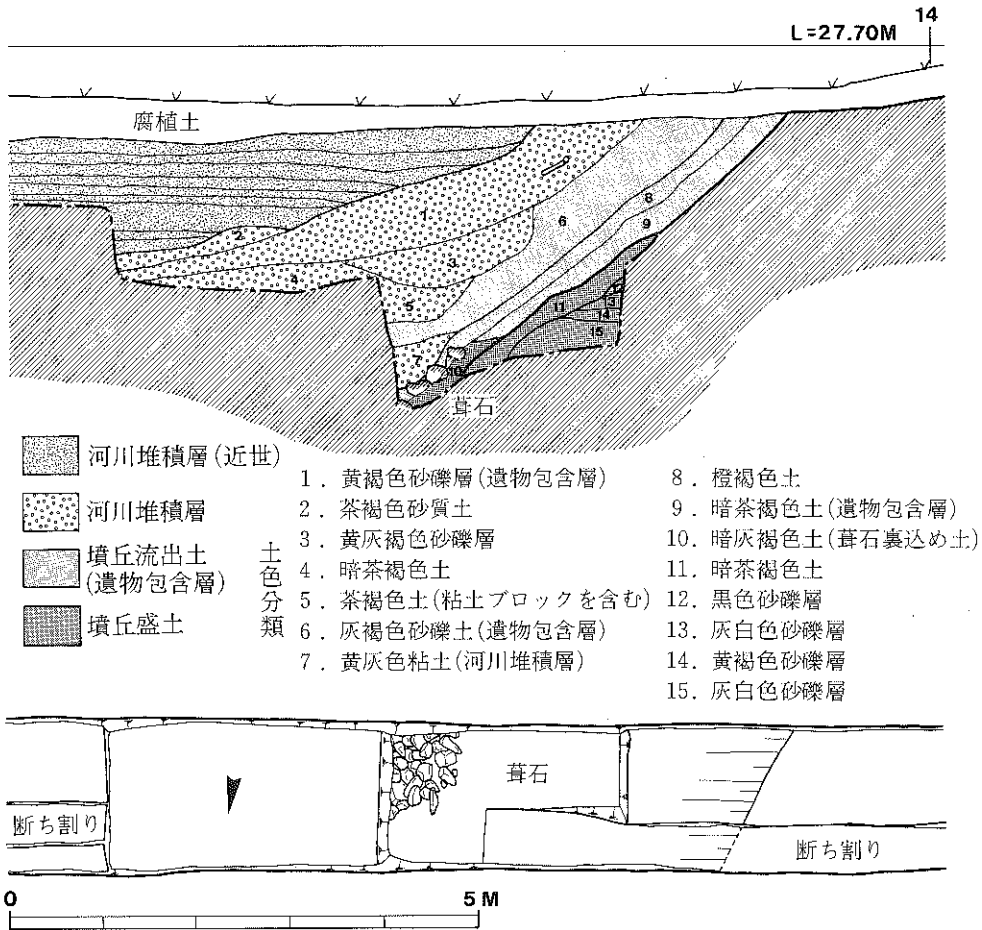
- 土色分類
1. 黄褐色砂礫層(遺物包含層)
 2. 茶褐色砂質土
 4. 暗茶褐色土
 5. 茶褐色土(粘土ブロックを含む)
 6. 灰褐色砂礫土(遺物包含層)
 7. 黄灰色粘土(河川堆積層)
 8. 橙褐色土
 9. 暗茶褐色土(遺物包含層)
 10. 暗灰褐色土(葦石裏込め土)
 11. 暗茶褐色土
 12. 黒色砂礫層
 14. 黄褐色砂礫層
 16. 黄褐色粘土(裏込め粘土)
 17. 暗灰茶褐色砂礫土(裏込め土)
 18. 暗灰色砂礫層
 19. 灰白褐色砂礫土
 20. 黄褐色土
 21. 淡黄褐色土
 22. 暗褐色土

- 凡例
- 河川堆積層(近世)
 - 墳丘盛土
 - 河川堆積層
 - 墳丘流出土(遺物包含層)
 - 基礎礫群裏込め土

(2) 第1トレンチ実測図



第8図 第1・2トレンチ実測図

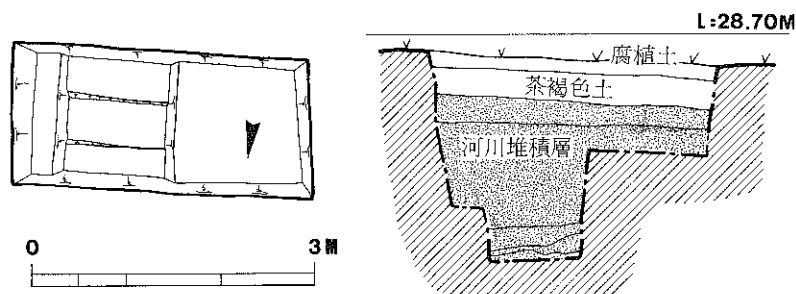


第9図 第2トレンチ葦石実測図

河川堆積層はさらに上・下2層にわかれる。上層は黄灰色系の砂層・砂質土層・粘土層の互層である。最も厚いところで2m程を測る。周濠に向ってさらに厚く堆積する遺物包含層で、第1トレンチでも認められた河川堆積層と同一のものと思われる。ほぼ後円部の北東部全体を被覆するようである。下層は黄褐色系の砂礫層で1~5cm程の礫を含む河川堆積層である。

河川堆積層下には、堆積状況から明らかに性質を異にする墳丘流出土が認められる。この墳丘流出土も上・下層に分けることができる。上層は灰褐色砂礫土である。埴輪小片・須恵器小片と共に、平安後期の所謂かわらけや環状金銅製品が本層から出土した。特に環状金銅製品は、本古墳の副葬品の一部である可能性が高いことから、本層は、人為的墳丘改変時の崩落土であると考えられる。そして、下層は墳丘盛土の直上を被覆する橙褐色土である。層厚20cm程の無遺物層である。本層は墳丘斜面に遺存する葦石の直上に堆積することから、

II. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要



第10図 第3トレンチ実測図

周濠埋没以前の比較的早い時期に流出した墳丘崩落土と考えられる。今回は周濠底が未検出であるため、これらの周濠埋土の層位の中では、周濠内の滞水状態が窺えるような状況は認められなかった。墳丘流出土の灰褐色砂礫土と橙褐色土との間には、黄褐色系の粘土層が認められるが、これは一時的な河川氾濫によるものであると考えられる。

墳丘 第2トレンチでは、周濠に向かって下降する後円部東側斜面を検出した。また標高24.5m程から原位置を保つ葺石を検出した。検出範囲は東西70cm・南北1m程である。葺石面は40°前後の傾斜をもつ。使用石材は径20cm内外のチャート質の河原石で、長辺を墳丘側にさし込んで小口積に葺いている。葺石は直接墳丘盛土に葺かれるのではなく、その直上の層厚20cm程の暗灰褐色土層の裏込め土上に葺かれている。上部では、この裏込め土にかわり表土層の腐植土と大差のない軟質な茶褐色砂質土が墳丘盛土直上に被覆する。本層には、転落した葺石と比較的大形の埴輪片が混在する。このような状況から、本層は葺石が転落したあと一時的に墳丘表面を覆っていたのであろうと推察される。葺石については、作業の安全性からこれ以上の検出は行えなかった。しかし、その検出状況からは、周濠底に向かってさらに下降する墳丘斜面には、葺石が良好に遺存するであろうと推察された。

墳丘盛土は、トレンチ西半分に見られる基本的な墳丘盛土層と、1～3cmの礫を包含する黄褐色系の砂礫層との2層が認められる。無遺物層である下層の黄褐色系の砂礫層は、ほぼ水平に堆積しており、その直上に暗茶褐色系土層の墳丘盛土が斜めに被覆する。下層の黄褐色系の砂礫層は、上層の盛土とは異質であり、地山である可能性が考えられたため、断ち割りを実施し、その確認を行なった。しかし、断ち割り途中にトレンチ壁崩壊の危険性が生じたため、その追究を途中で断念した。

(第3トレンチ：第10図)

第3トレンチは前述のとおり、内堤の検出をその目的として掘削した。地表下-2.2m、標高25.7m程まで掘削した。しかし、第2トレンチで認められた黄灰褐色系の河川堆積層が依然厚く堆積していることや、作業の安全性からも、それ以上の掘削は断念した。

5. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、円筒埴輪、須恵器、土師器、近世陶磁器のほか、環状金銅製品がある。出土総量はコンテナに1箱分程である。量的には、埴輪片が圧倒的に多くその9割程を占める。他は少量である。出土場所は、そのほとんどが墳丘流出土であり、原位置で出土したものはない。また小片の個体が多く全形を窺えるものはない。以下、種類ごとにその概要を述べる。なお、近世陶磁器については今回は一切割愛した。

(埴 輪：第11図・第12図)

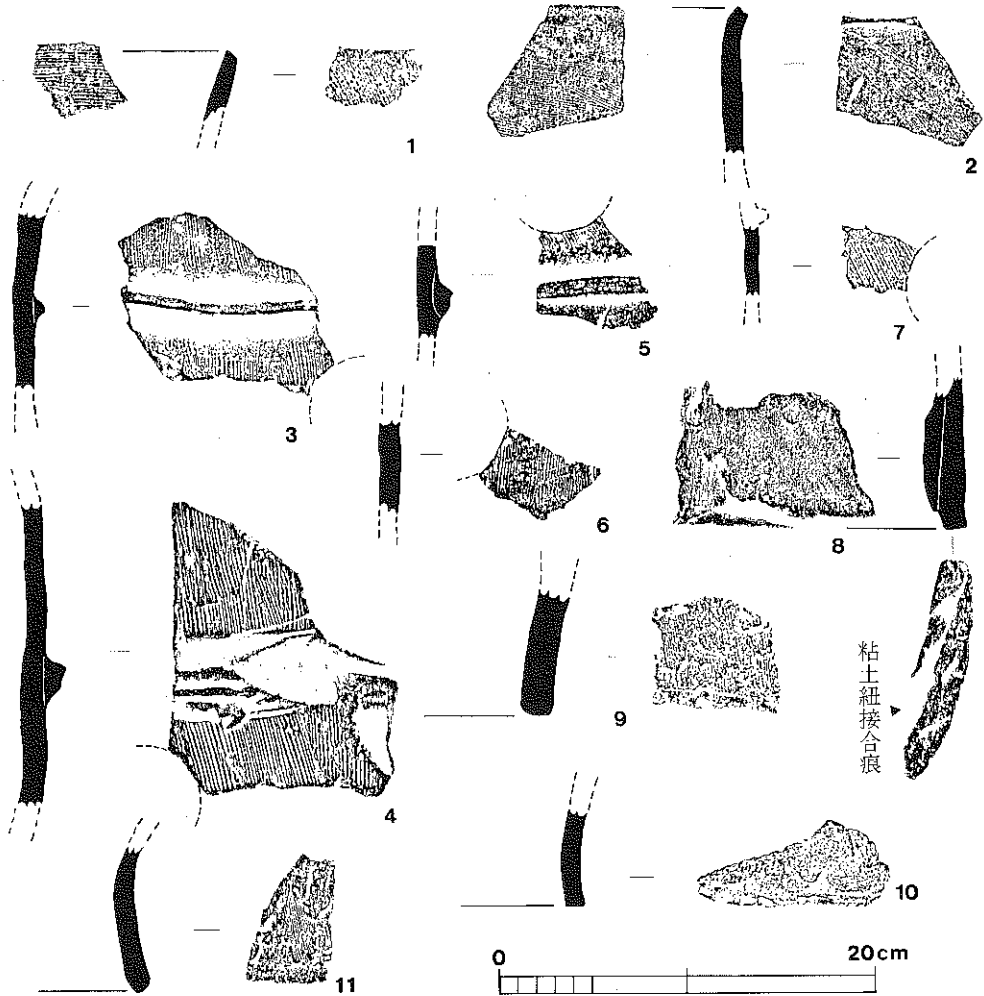
埴輪は、遺物のなかで量的にそのほとんどを占める。しかし大半は小片であり遺存状態も余り良くない。種類のにはすべて円筒埴輪である。部分的には、口縁部・胴部・基底部が認められる。全形を窺えるものはない。今回は、総括的にその特徴を述べることとする。

成 形 部分的であるが成形方法については、(8)・(14)等より若干窺い知ることができる。基底部の1段目の基部は、幅6cm程と他の部分より幅広い粘土紐でつくる。(8)は基部の粘土紐の接合痕を明瞭に残すものである。そしてその接合痕は、内面と断面との2箇所別々の接合痕が認められることから、単一粘土紐だけでなく他の粘土が付加されている可能性がある。底部には棒状圧痕を残すもの(10)もみられる。また、それらの底面は比較的平坦で基部下端はスカート状に外開きとなっている。

基部の上には、幅2～3cmの粘土紐を巻きあげが、接合痕を明瞭に残す(14)では、右回りに巻き上げており、1段分に6本分の粘土紐が認められる。

調 整 外面調整は基本的には、すべて1次調整のタテハケだけで2次調整は省略する。ハケは基底部に対して垂直方向で、口縁部では左方向に傾く。部位ごとの確認のため全体でのハケの連続性は確認できないが、ハケは基底部より口縁部に向かって一気にかきあげられている可能性が考えられる。(4)はその典型的なものである。1cmあたり6～7条程の明瞭な条痕を施す粗いタテハケで、タガの上下でハケの連続性を認めることができる。以上の外面調整が埴輪の主要な調整のなかで、1cmあたり9～10条の細いハケを施す一群(21・24・29)が少量存在する。これらは、淡橙色を呈す軟質のものであり、器壁は厚さ8mm前後と他に比らべて薄手で、他のものとは容易に識別できるものである。その量的比率は、全体の4分の1程を占める。ハケは器面から離れながら施すため幾重にも重複する部分がある。特に(21)・(24)は、タガ接合のナデの部分にハケがかかっている個所が認められる。つまり、この一群だけが、タガ接合の後再びタテハケによって若干の調整を施している。

内面調整は、基本的にはタテハケの後、下半部にナデを施すことが部分的であるが窺い知



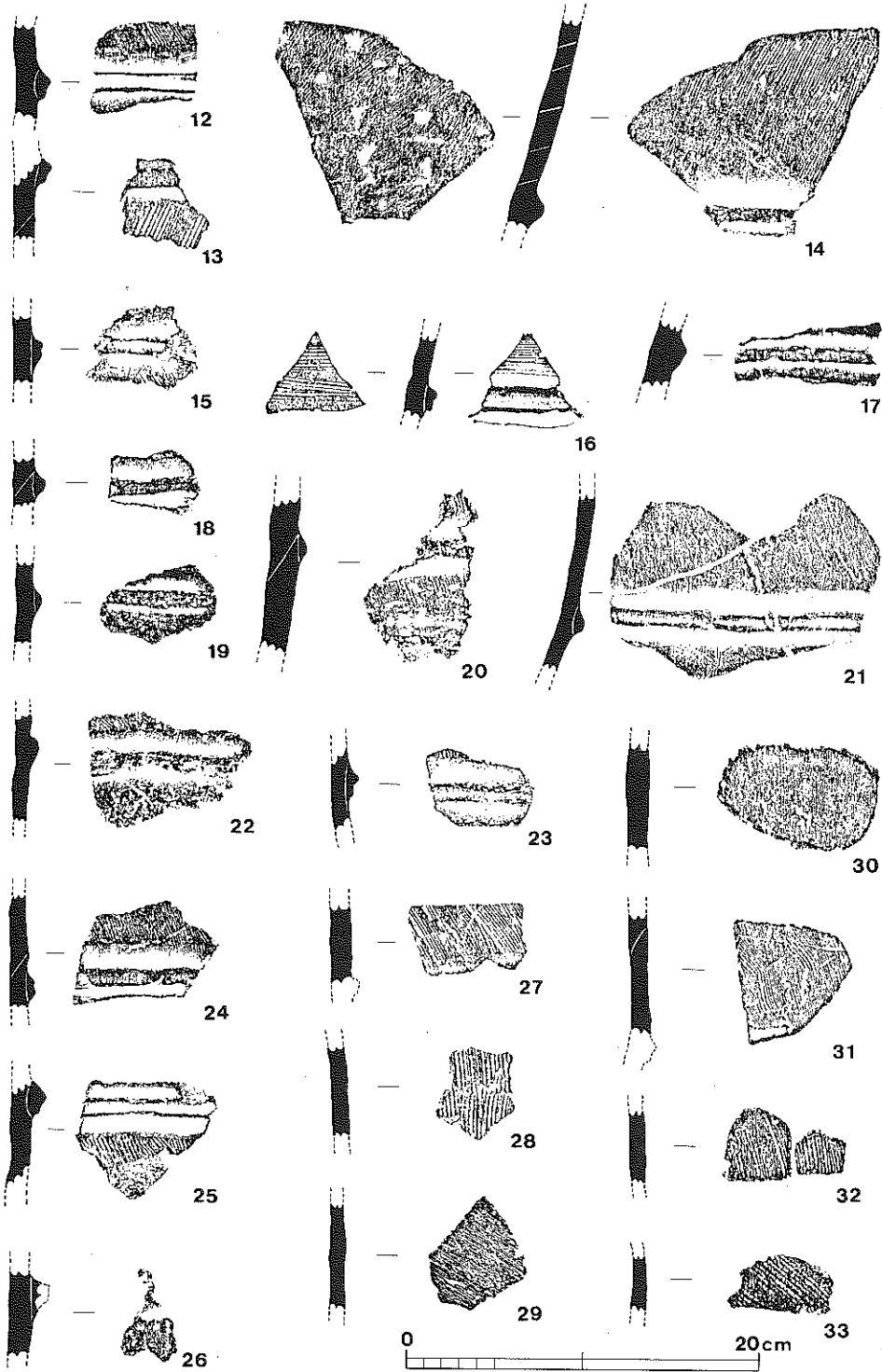
第11図 埴輪実測図 1

ることができる。(14)はタテハケによる調整が不十分で、粘土紐巻きあげ痕を明瞭に残すものである。また、口縁部(1・2)は、再度ヨコハケによって調整される。

底部調整は、指圧痕を内面下端にもつもの(9)、外面下端にヨコナデを施すもの(11)が、認められる。底部が変形したままの粗雑なもの(10)もある。

タガ・スカシ タガの断面形態は、上部の凹んだ断面台形のもの(4・14・16)と扁平化した低台形のもの(12~15・17・19・21・24)、そして断面三角形のもの(3・5・19・20)とがある。全体的に、断面台形のはタガの上・下を強くナデて比較的丁寧に作られるのに対し、低台形や三角形のものはナデが不均等のため断面形が不整形な粗雑なものである。

スカシは、(3)~(7)の個体で確認できた。ほぼ円形のスカシ孔と思われる。穿孔は、外面よりヘラ状工具によって穿っていることが内面側に残る取り残し粘土により理解できる。



第12图 埴輪実測图 2

II. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要

焼成 色調は黄褐色・赤褐色・灰色と多彩であり、大半が比較的硬質に焼け締まっている。須恵質のものも認められる。黒斑をもつものは一切認められない。調整手法との対比では、前述の淡橙色の軟質のものだけが、ハケ調整の手法と対応する一群をなす。

口縁部・基底部 口縁部・基底部は、個体数が少なく今回図示したものがすべてである。

口縁部は(1)・(2)の2個体だけである。(1)は1cmあたり6～7条の粗いハケと白色砂粒を含んだ粗い胎土から、全体に粗雑な感じを受ける。それに対して(2)は、1cmあたり10～11条の細かいハケで胎土は密で須恵質に焼きあがる。(1)に比べ丁寧な造りである。形態的には、(1)は直接的な口縁部に外傾する端面をもつ。(2)は同じく直線的な口縁部にやや外反する端面で、端面は外側につまみ出される。

基底部は(8)～(11)の4個体確認した。全体的傾向としては、器壁が厚いもの(8・9)と薄手のもの(10・11)とに分けられる。前者は、厚さ1.5cm前後を測り、やや軟質のもので淡橙色を呈する。後者は、厚さ1cm前後を測る硬質のもので灰褐色を呈す。

時期 以上の観察から本古墳の埴輪の特徴は次のようにまとめられる。外面調整は1次調整のタテハケにとどめ、内面調整はタテハケの後下半部にナデを施す。また、底部調整を施すものも認められる。タガの断面形は低台形から三角形のものが主流をなす。焼成は須恵質のものもあり黒斑は認められない。このような特徴は、川西氏^{註9}編年のV期にあたるものであり、実年代では6世紀代とされている。

以上、埴輪についてその概要を述べた。これらの特徴はごく限られた部分的な観察より得られたものである。しかし、資料数が少ないものの前述のまとまりをなす一群の製作手法の差は単に個体差だけではなく、工人集団間の差にまで追求できる可能性がある。これらの検討は今後の課題であり、資料の増加をまたねばならない。

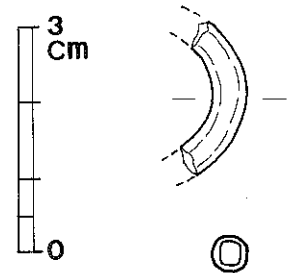
(環状金銅製品：第13図)

第2トレンチの埴丘流出土より出土した。断面隅丸方形の鉄棒を銅板で被覆し、アマルガム法により鍍金したものである。錆化が進み全体の半分程の鍍金部分が剥離する。最大復元径2.4cm、断面形態は円形で径4mmを測る。

(土器類：図版第15)

須恵器の壺・甕の体部片や土師器の皿が全部で10点程ある。いずれも小片で図示しえなかった。ほとんどは、第2トレンチの埴丘流出土より出土したものである。それ以外では、第1トレンチの基礎礫群の掘方壁の埴丘盛土中より甕の体部が、前方部西側の堤内斜面より壺ないし甕の体部片が採集できた。

土師器の皿は所謂かわらけである。平安後期に比定できる。 第13図 環状金銅製品実測図



6. ま と め

最後に、今回の発掘調査で得られた知見を整理し本報告のまとめとしたい。

(後円部の直径)

今回の調査では、後円部直径を復元するには、なおその基準とすべき検出地点が少なくその確定には更に調査が必要である。しかし、第1・2トレンチでの状況をもとに概ねの規模を復元するとすれば、直径60m前後とするのが現状の中では最も無理がない。したがって、測量図より前方部幅を85m前後と仮定するならば、本墳は前方部幅が後円部直径を大幅に上廻ることとなり、後期の前方後円墳の形態となる。墳丘全長についても、推測の域を出ないが、今まで復元されていた全長105mを超える可能性は極めて高く、110m前後と考えるのが良いように思える。規模については、更に今後の調査により明確にしなければならない。

(古墳の年代)

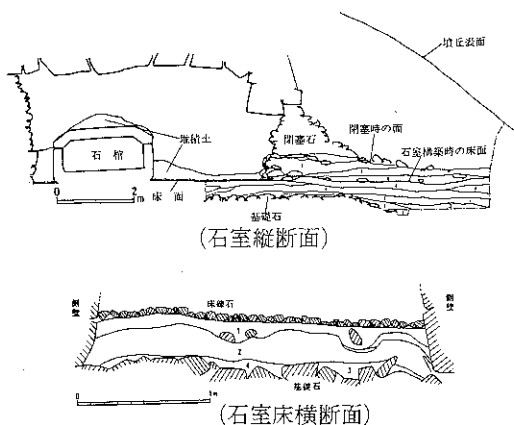
古墳の時代を窺える資料に埴輪がある。埴輪については前述したごとく、すべて川西氏編年のV期にあたるものである。この資料と墳丘の形態及び主体部の型式とを考え合わせるならば、6世紀前半に比定することができよう。

(後円部中央の礫群)

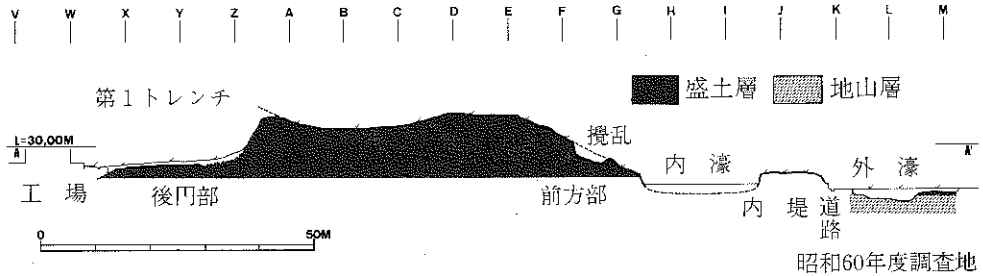
後円部中央付近で掘方を伴う礫群を検出した。この礫群は検出状況より本墳に伴う施設と見て大過ない。今回の調査では、その規模を明確にすることは不可能ではあったが、未掘部分をボーリングした所では、その範囲は東西方向に広がる事が理解できた。位置・規模等から考えて、主体部、すなわち横穴式石室に伴う施設である可能性は極めて高い。石室本体はすでに消滅しているため、この礫群は石室本体そのものではなく、その下部、いうなれば基礎部分に構築されたものと見ることができる。ここでは、この施設を基礎礫群と仮称した。大正の後円部破壊時の記録でも「基底部近く小石ヲ積み重ねタル室アリ」とされるように、石室基底部付近に基礎礫群が認められている。

このように横穴式石室の下部に礫を積み重ねるものの類例には、奈良県高取町の市

尾墓山古墳がある。市尾墓山古墳は、全長 第14図 市尾墓山古墳の石室基礎石(註10報文より)



II. 五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要



第15図 墳丘縦断面図

65mの前方後円墳で、後円部に南西方向に開口する横穴式石室が構築されている。この石室下部に基礎礫群が発見されている。石室側石の基底は基礎礫群の上に乗っており、石室内の床面は40cm程土により嵩上げされている。この状況から、基礎礫群は石室本体そのものではなく、あくまでも石室の基礎部分であることがわかる。市尾墓山古墳における基礎礫群の効用については、盛土中に構築した石室が崩壊するのを「解消するため基礎に石を敷きならべる手法をとっている」と考えられている。

二子塚古墳についても、石室は盛土中に構築されていたことは疑いがなく、市尾墓山古墳と同様に石室の崩壊を防ぐための基礎施設として基礎礫群が構築されたと考えられる。

今回の調査での基礎礫群の検出は一部に留まっており、なお解明しなければならない点は多いが、大型の古墳で盛土中に横穴式石室が構築される場合における基礎養生の数少ない実例として重要な資料といえる。

(結 語)

以上の発掘調査の成果をかいつまんで報告した。二子塚古墳の実態解明に係る調査はやっとその途についた所である。不明な点はまだまだ多い。しかし、今回の調査成果だけからでもこの古墳の重要性を充分認識できるのである。大正年間の梅原の報告が「其ノ保存ノ法ノ加ヘラレン事ヲ期待ス」と結んだように、本市教育委員会としても二子塚古墳の保護に留意をしていきたいと考える。今後の本墳の調査に関係各位のご協力をお願いするしだいである。

(註)

- 註1. 梅原末治「五箇庄二子塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第四冊、京都府、大正12年。
- 註2. 『宇治市史』第1巻、昭和48年。
- 註3. 「二子塚古墳外濠発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集、宇治市教育委員会、昭和62年。
- 註4. 杉本宏「二子塚古墳の円筒埴輪」『京都考古36』、昭和60年。
- 註5. 「寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集、宇治市教育委員会、昭和62年。
- 註6. 註2に同じ。
- 註7. 『鏡と古墳一景初四年鏡と芝ヶ原古墳』京都府内巡回展示図録、京都府立山城郷土資料館他、昭和62年。
- 註8. 註3に同じ。
- 註9. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64—2、昭和53年。
- 註10. 『市尾墓山古墳』、高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所、昭和59年。